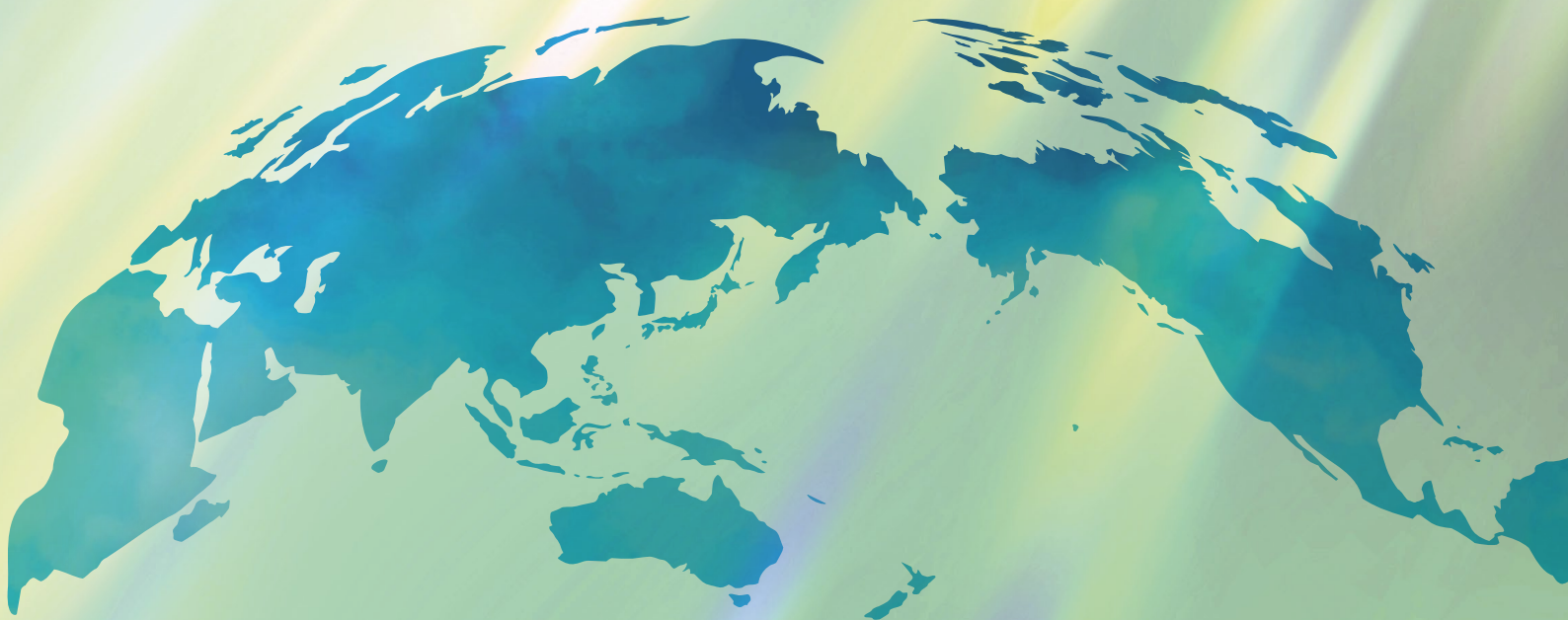


FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

＜総合パンフレット 2026＞



公立大学法人

福島県立医科大学



福島県立医科大学の理念

(令和元年6月26日制定)

福島県立医科大学は、県民の保健・医療・福祉に貢献する医療人の教育および育成を目的に設立された大学である。同時に、研究機関として、不断の研究成果を広く世界に問いかけるという重要な使命を担っている。

もとより医療は、すべての医療人が共に手を携えて、すべてのひとのいのちと健康の問題に真摯に向き合い、その未来を拓く営為である。その基盤とすべきところは、個人の尊厳に対する深い配慮と、高い倫理性である。

福島県立医科大学は、以下に掲げることを本学の理念として、教育、研究および医療を幅広く推進していくものとする。

- 1 ひとのいのちを尊び倫理性豊かな医療人を教育・育成する。
- 2 最新かつ高度な医学、看護学および保健科学を研究・創造する。
- 3 県民の基幹施設として、全人的・統合的な医療を提供する。

CONTENTS

福島県立医科大学の理念	2	02 研究成果	60
ガバナンス・コード	4	03 診療	64
福島県立医科大学の3つの方針（ポリシー）	7	附属病院	65
01 教育（医学部、看護学部、保健科学部、別科助産学専攻、 大学院、医療人育成・支援センター、 総合科学教育研究センター）	8	会津医療センター	76
医学部	10	04 健康の見守り（ふくしま国際医療科学センター）	82
看護学部	22	05 各種センター	88
保健科学部	26	資料編	98
別科助産学専攻	34		
大学院	36		
学生生活について	40		
医療人育成・支援センター	48		
総合科学教育研究センター	56		



共創と知の循環で、福島から未来の医療を拓く

福島県立医科大学は、県民の健康と命を守る「最後の砦」として、また世界へ向けて質の高い研究成果を発信する拠点として歩みを進めてまいりました。福島県誕生150年、そして東日本大震災から15年という歴史的節目を迎える現在、本学は教育・研究・診療のすべてにおいて、未来の医療と社会を牽引する「中核拠点」へとさらなる進化を遂げようとしています。

現在、本学では県と連携しながら双葉地域の医療提供体制の中核を担う新たな病院の整備を進めております。また、附属病院の再整備に取り組んでおり、特に、高度医療と予防医学を融合させた「疾病予防センター（仮称）」の新設など、新たな社会価値の創造を目指しています。さらに、研究成果を迅速に地域へ実装し、その成果を国内外へ発信する実践的研究基盤の構築を推進しています。

複合災害や超高齢社会という未曾有の課題に真正面から向き合ってきた福島だからこそ、生み出せる「知」があります。本学が掲げる理念は、次の一文に込められています。

共創と知の循環で未来を拓く
(Co-create. Circulate knowledge. Open the future.)

福島の知を世界へ、世界の知を福島へ。本学は、国内外の研究機関や産業界、行政の皆様との緊密な連携を推進し、共同研究や人材交流、社会実装を通じたイノベーションの創出に努めてまいります。

持続可能な医療社会の実現に向け、本学の取り組みに一層のご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

令和8年4月

公立大学法人福島県立医科大学 理事長兼学長 鈴木 弘行

福島県立医科大学ガバナンス・コード（抜粋）

はじめに

公立大学法人福島県立医科大学（以下「本学」という。）は、福島県民（以下「県民」という。）の保健・医療・福祉に貢献する医療人の教育及び育成を目的として設立された大学である。同時に、研究機関として、不断の研究成果を広く世界に問いかけるという重要な使命を担っている。

また、従前から担っている県民の命と安全を守るための高度な医療の提供や、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故という未曾有の災害（以下「東日本大震災及び原子力災害」という。）を受けて、県民の健康状態を長期にわたり見守るという使命・社会的責務も負っている趣旨を踏まえ、ステークホルダー（「利害関係者」をいう。以下同じ。）に対して運営状況や本学の使命及び社会的責務をどう果たすのかなど、ガバナンス・コードを策定することで、広く示す必要がある。

このため、公立大学に共通するガバナンスの基本原則については、一般社団法人公立大学協会が策定した「公立大学ガバナンス・コード」に準拠し、これに医療系総合大学としての本学の独自性や、東日本大震災及び原子力災害からの復興を盛り込み、本学の理念に次ぐ高位規範として、以下のとおり「公立大学法人福島県立医科大学ガバナンス・コード」を定める。

基本原則 1

本学の自主性・自律性に基づいた計画策定と体制構築

本学は、設立目的である「県民の保健・医療・福祉に貢献する倫理性豊かな医療人の教育・育成」、「最新かつ高度な医学、看護学及び保健科学の研究・創造」、「県民の生命と健康を守る基幹施設としての全人的・統合的な保健医療の提供」を使命とし、福島県（以下「県」という。）から措置される運営費交付金等を基盤的な財源として活用しながら、これら使命を果たし、地域社会に貢献していく責任を負っている。そのため、法定計画である中期計画や、本学の自主性・自律性に基づいた各種計画（以下「計画等」という。）を策定し、それを実現できる体制を構築する。

- 原則 1－1 本学の使命を踏まえた計画等の策定
- 原則 1－2 計画等を実現・検証する体制の構築
- 原則 1－3 自主的・自律的・戦略的な経営及び教学運営の体制構築
- 原則 1－4 多様な人材の確保と高度な専門性を有する人材の計画的な育成
- 原則 1－5 自ら実行する不断の改革

基本原則 2

本学の適正な経営の展開

本学は、自主的・自律的な運営に係る環境の下、基本原則 1 に掲げる使命を果たし、地域社会に貢献していくため、理事長兼学長（以下「理事長」という。）がそのリーダーシップを発揮し、迅速・的確な意思決定を可能とする経営体制を構築するよう努める。

また、ガバナンスの基本要素の一つとして、トップへの牽制機能が求められることから、理事長が客観性を担保した大学運営を行えるよう、理事長に対する自律的な牽制機能について検討し、強化を図る。

- 原則 2－1 理事長を始めとした経営執行部の責務
- 原則 2－2 本学の経営、教育・研究を支える審議機関と監査体制の構築
- 原則 2－3 理事長選考機関の責務
- 原則 2－4 法令遵守とリスクマネジメント

基本原則 3 教育・研究の発展

本学は、県内における医療人を育成する高等教育機関の中核的存在として、高度な教育による社会の持続的発展を支える優秀な医療人材の輩出、社会にとって普遍的な価値をもたらす高度な学術研究の推進や大学の知的価値の提供などの機能について、高度化させていく責務を持つ。

そのため、理事長は、上記責務を果たし、全体として調和のとれた大学運営を実現するために、全学的な視点で行われる教学マネジメントを確立し、教育研究等の質を高めるため不断の見直しに取り組む。

- 原則 3－1 全学的視点に立った教学マネジメントの実現
- 原則 3－2 教育・研究の水準の向上を支える内部質保証システムの構築

基本原則 4 地域社会への貢献

本学は、教育、研究及び医療に関する活動の展開により使命を果たし、地域社会へ貢献していくため、本学設立の経緯と建学の理念を踏まえ、本県の保健・医療の課題・問題点を把握しその分析を通して、解決や解消を図り、地域社会の保健医療水準の向上に努めながら、その社会的な役割を果たしていく。

- 原則 4－1 ステークホルダーとの信頼醸成
- 原則 4－2 教育・研究による地域社会への貢献
- 原則 4－3 医療による地域社会への貢献

基本原則 5 持続可能性・多様性のある社会への対応

大学には、世界に開かれ、世界的な普遍的価値を生み出し、あまねく提供する存在となることが求められる。本学は、社会の持続的発展のために貢献するとともに、多様性のある社会に対応し、進んで人権の尊重やハラスメントの防止に努める。

- 原則 5－1 持続可能な社会のための貢献
- 原則 5－2 ダイバーシティ社会への対応・男女共同参画の推進
- 原則 5－3 人権の尊重とハラスメントの防止

基本原則 6 東日本大震災及び原子力災害からの復興

本学は、優れた医療人の教育・育成、医学、看護学及び保健科学の研究推進、そして高度で先進的な医療の提供という本来の使命に加え、東日本大震災及び原子力災害によって課せられた「県民のこころと体の健康を長期に見守り、福島復興の中核となる」という歴史的使命を担っている。

本学は、基本原則 1 から 5 に則り、震災を経験した医療系総合大学として、災害の記憶を風化させることなく、福島の復興に寄与するとともに、今後の社会の変化に対応していくため、その知見をいかしながら、教育、研究及び医療を推進する。

- 原則 6－1 福島の復興の牽引
- 原則 6－2 福島の復興を担う優れた医療人の育成
- 原則 6－3 優れた価値ある研究成果の発信
- 原則 6－4 県民の健康長寿の実現
- 原則 6－5 持続的に進化する大学

令和 7 年 3 月 制定

福島県立医科大学ビジョン2014

— 忘れない。そして希望の未来を拓く —

誓いの言葉

東日本大震災と原発災害発生から3年余、本格的な復興の始まりにあたり、私たちは、この災害を忘れず、風化させず、県民とともに希望の未来を拓くことを誓います。

もとより本学は、優れた医療人の教育・育成、医学と看護学の研究推進、そして高度で先進的な医療の提供を使命としてきました。

私たちは今、本学本来の使命を再確認するとともに、この未曾有の災害によって与えられた「県民のこころと体の健康を長期に見守り、福島復興の中核となる」という歴史的使命を自覚し、ここに本学の新たなビジョンを提示し、その実現への決意を表明いたします。

(平成26年6月1日)

1

**私たちは福島の復興を牽引します。
全ての県民の復興が達成される日まで支え続けます。**

私たちは、ふくしま国際医療科学センターを中心に総力をあげて、長期にわたる県民一人ひとりの心身の健康の増進、新しい医療産業の創出、地域医療の支援を通して安全で安心な生活基盤を確立し、福島の復興を前進させます。

たとえ長期にわたるとしても、私たちは、誰もが復興の達成を感じられる日が来るまで福島県民を支え続けることを誓います。

2

**私たちは福島の復興を担う優れた医療人を育成します。
高度な知識、技術と高い倫理性を備えた
医療人を育てます。**

私たちは、建学の原点を再確認し、福島の復興を担うことができる高度な知識と技術、そして高い倫理性を備えた医療人の育成を続けます。医学部、看護学部及び大学院の教育カリキュラムを整え、教育力を不断に高め、知識、技能、態度において実践的能力を備えた医療人を輩出します。附属病院と会津医療センターでは、医療の実践により診療・教育力を高め、魅力ある研修プログラムを提供し、総合性と専門性のバランスに優れた医療人を育む生涯教育を行います。さらに、災害に際して世界中から差しのべられた多くの支援に報いるため、将来起こりうる複合災害に備え、災害医療と被ばく医療に精通し、社会コミュニケーション能力を備えた医療人の育成に取組みます。

3

**私たちは優れた価値ある研究成果を
世界に向かって発信します。
本学に課せられた歴史的使命を果たします。**

私たちは、全ての人が抱える健康に関する課題を解決するために医学と看護学に関する研究を推進し、その成果を世界に発信します。

4

**私たちは県民の健康長寿を実現します。
高水準の医療の提供と根拠に基づく
疾病予防に取組みます。**

私たちは、生涯にわたる健康なくらしを願う県民の期待に応え、多様な職種の専門性を生かしたチームとして、病める人の自己決定を尊重し、高水準の診断・治療とケアを提供し心温まる医療を実現します。日々研鑽に努め、人々の声に耳を傾け、正しい知識と情報を提供します。

県民が健康長寿を実感できるよう、地域と連携し、科学的根拠に基づく疾病予防と健康増進および抗加齢医学の研究と実践を推進します。

5

**私たちは持続的に進化する大学を創ります。
ここに集うすべての人々の思いに応えられる
大学を目指します。**

私たちは、現状に満足せず、常にあるべき将来像を見据え、組織として進化を続けます。

激動する社会の変化に対応し、県民には安心の医療を、学びを求める人々には魅力ある教育と研修の場を、働く人々には誇りを持って仕事に打ち込める環境を提供し続けます。

理事長・理事等

	氏名
理事長	鈴木 弘行
副理事長(復興・国際担当)	亀岡 弥生
理事(県民健康担当)	島袋 充生
理事(医療・臨床教育担当)	藤森 敬也
理事(教育・研究担当)	大谷 晃司
理事(地域医療担当)	藤井 正純
理事(経営・内部統制担当)	菊地 健一
理事(企画・管理運営担当)	高橋 憲徳

学長・副学長・学部長

	氏名
学長	鈴木 弘行
総括副学長(総務担当)	竹石 恭知
副学長(県民健康担当)	島袋 充生
副学長(学務担当(総務))	大谷 晃司
副学長(臨床教育担当)	藤森 敬也
副学長(地域医療担当)	藤井 正純
副学長(学務担当(業務))	山下 俊一
副学長(学務担当(業務))	福原 俊一

	氏名
副学長(学務担当(業務))	吉村 泰典
副学長(学務担当(業務))	挾間 章博
副学長(学務担当(業務))	河野 浩二
医学部長	伊関 憲
看護学部長	高橋 香子
保健科学部長	五百川 和明
別科長	看護学部長兼務

(令和8年4月1日現在)

福島県立医科大学の3つの方針(ポリシー)

1

卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

diploma policy

本学は、次のような能力を身につけた者に学位を授与します。

- 医療に携わるプロフェッショナルとしての知識・技能および倫理観を習得した者
- 福祉と医療の分野において社会貢献できる能力を有する者
- 科学的思考力および自律的に生涯学習を継続する姿勢を習得し、医療の発展に寄与する成果を発信する基礎的な能力を持つ者
- 本学履修規程に則り、卒業までに所定の単位を授与された者

2

教育課程の編成及び実施に関する方針(カリキュラム・ポリシー)

curriculum policy

本学は、次のような方針で教育を実施します。

- 高度化する医療の諸問題を自ら進んで学習し、問題発見・解決能力を養う。また、生涯学習の姿勢を身につける。
- 医療を体系的に学び、疾患の深い理解に基づいて医療人として見識を養う。また、コミュニケーション能力や協調性の育成を図る。
- 臨床の現場を知り、医療人としての自覚を持ち、患者様に寄り添う心を身につける。
- 福島の地域医療の現状を学び、人々の健康を守る方法論を学ぶ。
- 科学的探究心と創造性に基づく研究を目指し、世界に飛躍する志を養う。

3

入学者の受入に関する方針(アドミッション・ポリシー)

admission policy

本学は、次のような資質を持つ学生を求めます。

- 高い倫理観と豊かな人間性をもち、命を尊ぶ心を備えた人
- 十分な基礎学力を有し、医療に関する高度な専門的知識・技術の修得を目指す人
- コミュニケーション能力にすぐれ、協調性を持つ人
- 地域の発展や東日本大震災からの福島県の復興に貢献する熱意を持つ人
- 科学的探究心と創造性を備え、医療の分野で、世界に飛躍しようとする志を持つ人



01

教育

医学部、看護学部、保健科学部、
別科助産学専攻、大学院、
学生生活について、医療人育成・支援センター、
総合科学教育研究センター





School of Medicine

本学は、地域医療の牽引者となる使命をおびて、県立の医科大学として創立しました。医学部では「生涯にわたる健康な暮らし」を願う県民の期待に応えるべく確かつ迅速に対応し、より高度な技術、判断力を持った医療人を今後も供給し続ける責務があります。また同時に、大学として普遍的問題の解決に果敢に挑戦し、その成果を広く世界へ発信し続ける努力を重ねています。全国的な医師不足が叫ばれるなか、医学部では、2008年度から定員を順次増員し、2013年度には130名としました。医療の未来を担う医師の育成をめざして、優れた人材を輩出しています。



School of Nursing

看護学部は、公立単科医科大学初の看護学部として1998年に開設しました。また、より高い看護の専門性を携えた人材を育成するために、2002年4月には大学院看護学研究科を設置しました。以来、多くの卒業生・修了生を県内外の看護実践・教育の場に送り出しています。看護専門職に求められるのは、医療の介助のみならず、入院中あるいは在宅における生活の質を高めることや健康増進、病気の予防、セルフケア能力の向上にも関わることです。看護学部では、人と出会い、人との関わりの中で生み出される相互作用を原点とする看護ケアを大事にしています。



School of Health Sciences

保健科学部は、東日本大震災後の福島県における医療技術者の流出や健康不安の増大を背景に、広く社会に貢献しうる専門医療技術者（理学療法士、作業療法士、診療放射線技師、臨床検査技師）を養成するために、2021年4月に開設しました。本学部では、専門医療技術者に必要とされる知識・技術に加え、主体性と協調性も含めた総合力を身につけられる、実践的な科目を多く配置しています。新たに整備された「福島駅前キャンパス」において、MRIをはじめとする多くの高度な専門機器を利用した効果的な演習・実習を行うことで卒業後、医療現場に速やかに適応できる人材を養成していきます。



Division of Midwifery

別科助産学専攻は、未来を担う子どもたちを安心して生み育てられる福島県にするため、専門的知識と技術とを身に付けた質の高い助産師の養成と必要数の安定的確保を目的として、2023年4月に開設されました。看護基礎教育修了後、更に1年間で助産師国家試験受験資格を取得できる課程です。本課程では、臨床実践能力としての助産診断/技術力を身に付けるとともに、高い倫理観を備え、地域の保健・医療・福祉に貢献できる助産師を養成します。さらに、助産学の課題に対して、クリティカルに探求し、専門職として生涯にわたり活躍できる自律した助産師を養成していきます。



Graduate School

近年の医学・医療は「質の向上」が叫ばれるとともに、多彩な専門領域の中で存分に活躍できるスペシャリストが求められています。大学院では、医学・看護学・保健科学の発展に寄与できる研究者および専門職を育成するとともに、新しい医学・看護学・保健科学の創造を目的としています。医学専攻（博士課程）と医科学専攻（修士課程）、災害・被ばく医療科学共同専攻（修士課程）の3つの専攻からなる医学研究科と、博士前期課程、博士後期課程の2つの課程からなる看護学研究科看護学専攻、保健科学研究科保健科学専攻があります。大学院では学術的な知識を深めることはもとより、医療の現場を数多く経験し、実践を通して地域の発展に尽力できる人材を育成することを目的としています。



医学部

School of Medicine

医学部の使命

「高い倫理観と生涯にわたる探究心を持つ医師を養成し、世界に知を発信する」

Fostering doctors with high ethical standards and a lifelong inquisitive mind, and disseminating knowledge to the world

医学部の教育理念

福島県立医科大学医学部は、心を感じ、知を持ち、技を活かし、和を育み、地域を創造する医師を養成します。

message

メッセージ

高い倫理観を持ち、確かな知識と技術を備えた医師を育成してまいります。

このたび、福島県立医科大学医学部長に就任いたしました伊関憲です。平素より本学の教育・研究・診療活動に格別のご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

本学医学部は、福島県民の命と健康を支える医師・医学研究者の育成を使命として歩んでまいりました。とりわけ震災と原子力災害という未曾有の経験を経た福島において、地域医療の中核を担うとともに、災害医療や放射線医学などの知見を国内外へ発信し続けています。ここで培われた学びは、世界の医療課題の解決にも貢献する貴重な財産です。

現在、少子高齢化や技術革新により医療環境は大きな変革期を迎えています。本学では、確かな知識と技術に加え、高い倫理観や多職種協働の力を備えた医療人の育成を目指し、シミュレーション教育や ICT を活用した教育改革を推進しています。研究面では、医学部・看護学部・保健科学部の連携に加え、工学、情報科学、行政機関、医療機関、企業等との幅広い連携を通じて学際的研究を展開し、その成果を社会へ還元してまいります。

本学は「地域医療から世界に広がる社会貢献」の理念のもと、福島から未来の医療を切り拓き、地域と世界に貢献する医療人と研究者の育成に努めてまいります。今後とも皆様の温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

医学部長 伊関 憲



医学部の教育目標

君の持つ力を見つけ出して育てよう

- 心 真摯な心、共感する心、探究する心
 知 命を救う知識、病める人を癒す知恵、
 明日を生きる知性
 技 確かな技、未知に挑む技、
 未来へ繋ぐ技
 和 患者や家族との和、働く仲間との和、
 地域や世界の人々との和
 地 地域に学ぶ、地域を創る、地域から発信する

医学部の概要

本学は、地域医療を牽引する使命を帯びて、県立の医科大学として創立されました。以来70年余にわたり、高水準の基礎知識と技術を有する医療人を育成し、県民の皆さまはもとより広く国民の健康と福祉の増進に寄与してまいりました。

現在、最新の生命科学の知識や技術を応用した高度先進医療が急速に進歩しつつあります。また、本格的な高齢化社会を迎えて、より多くの人々が健康を保ったまま長生きできるようにするための新たな取組が展開されつつあります。このような中、「生涯にわたる健康な暮らし」を願う県民の本学に対する期待は一層強まりを見せています。本学は、これら県民の皆さまの期待に的確かつ迅速に対応しつつ、より高度な技術、判断力をもった医療人を今後も供給し続ける責務があります。同時に、大学として普遍的問題の解決に果敢に挑戦し、その成果を広く世界へ発信し続けなければなりません。

本学の「ビジョン2014」では、「私たちは福島復興を担う優れた医療人を育成します。」「高度な知識、技術と高い倫理性を備えた医療人を育てます。」を提示しています。このビジョンは大学の発展、ひいては県民の皆さまの健康の増進に貢献しようとする私たち医科大学(医学部)の決意を表したものです。

生涯にわたる健康な暮らしを願う人々が安心して受けられる医療とは何か？ そのような医療を提供するために、私たちは何を目指し何を成すべきか？ といった問いかけに対して、私たちはこれまで培ってきた実績と伝統をもとに、また私たち自身も変化しながら新しい答えを探していきたいと考えております。



医学部組織機構図

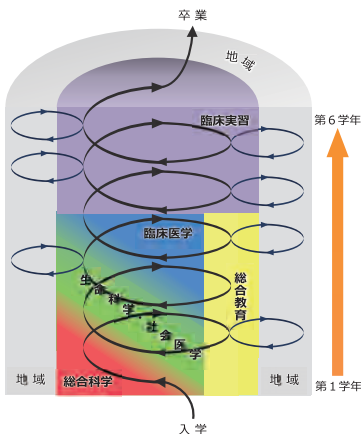
令和8年4月現在

医学科	
生命科学・社会医学系(16講座)	
神経解剖・発生学講座	解剖・組織学講座
細胞統合生理学講座	システム神経科学講座
生化学講座	免疫学講座
病態制御薬理医学講座	微生物学講座
基礎病理学講座	衛生学・予防医学講座
バイオメディカル・アナリティクス講座	法医学講座
放射線生命科学講座	疫学講座
放射線物理化学講座	健康リスクコミュニケーション学講座
臨床医学系(38講座・1担当)	
内科学部門	
循環器内科学講座	血液内科学講座
消化器内科学講座	リウマチ膠原病内科学講座
腎臓高血圧内科学講座	糖尿病内分泌代謝内科学講座
脳神経内科学講座	呼吸器内科学講座
外科学部門	
消化管外科学講座	肝胆膵・移植外科学講座
呼吸器外科学講座	乳腺外科学講座
外科研修支援担当	心臓血管外科学講座
脳神経外科学講座	整形外科科学講座
形成外科学講座	産科婦人科学講座
小児科学講座	眼科学講座
皮膚科学講座	泌尿器科学講座
耳鼻咽喉科学講座	神経精神医学講座
放射線医学講座	麻酔科学講座
救急医療学講座	病理病態診断学講座
臨床検査医学講座	感染制御学講座
輸血・移植免疫学講座	総合内科・総合診療学講座
放射線健康管理学講座	甲状腺内分泌学講座
災害こころの医学講座	放射線腫瘍学講座
腫瘍内科学講座	放射線災害医療学講座
リハビリテーション医学講座	
寄附講座(32講座) ※講座紹介はP.96をご覧ください。	
附属生体情報伝達研究所	
生体物質研究部門	細胞科学研究部門
生体機能研究部門	
附属放射性同位元素(RI)研究施設	附属死因究明センター
附属実験動物研究施設	附属教育評価室

カリキュラムの特徴

6年一貫の「らせん型カリキュラム」

医学部では、独自の「らせん型カリキュラム（図1参照）」による教育を行っています。このカリキュラムでは、各自の成長・習熟度に合わせて、基本と発展の科目を繰り返し学ぶことができます。また、県立の医科大学として、常に地域社会を意識し、学習者が大学から地域に出かけ、そこに暮らす人々から謙虚に学ぶという機会を数多く設けています。



〔図1〕カリキュラム編成概念図

知を蓄え、自分のなりたい医師をめざす 【最初の1年次】

語学・自然科学・人文社会科学系科目と総合教育科目群および生命科学・社会医学系科目を効率よく配置。最初のステージで医学の基本をおさえ、医学を取り巻く課題を多面的にとらえる考え方を学びます。ここでは、医療現場や地域社会の見学・調査などを通して、チームワーク、相手の立場を思いやる想像力、自分の考えを伝えるコミュニケーション能力などの重要性についての理解を深めていきます。同時に、自分がめざす医師のビジョンが次第に見えてくるステージでもあります。

医の道を照らす、その手法を広く学ぶ 【次の2年～4年次】

生命科学、臨床医学および社会医学科目の学習をとおり、医学について生命現象から医療の実践、保健・福祉や社会との関わりまで網羅的に学びます。医学の道に本格的に入る時期であり、医学生としての立場を強く意識するステージです。

2年次には、「人体の正常構造と機能」と「疾病の原因や病態の基本」を学ぶ生命科学系科目群が、3年次には内科系・外科系からの治療アプローチについて総合的に学ぶ臨床医学系科目が有機的に配置されています。それらに併行して社会医学系科目を配置し、医学の多面性や社会とのつながりを学びます。

また、4年次には、6週間の研究活動（基礎上級プログラム）が実施されます。さらに、臨床実習前 OSCE（客観的臨床能力試験）受験・臨床実習開始に先立ち、基本的かつ実践的な診療技術や生命倫理等を学ぶ医療入門が配置され、約22ヶ月間にわたる臨床実習（ベッドサイドラーニング：BSL）へ、円滑に移行していきます。

豊かな人間性を備えた医師として成長 【最後の5～6年次】

これまでに培ってきたコミュニケーション能力や問題解決能力を発揮しながら、医療チームの一員として医療に参加し、実践的な診

療能力を身につけます。このほか、看護学部、保健科学部と合同で実習を行い、症例を通して、それぞれの学部の特徴を理解し、現場で必要とされる多職種連携を学ぶ機会も設定されています。

この「らせん型カリキュラム」は、あくまで医学生の学ぶ姿勢をサポートするもので、必ず機械的に段階的に身につくものではありません。表面的な技術の習得ではなく、豊かな人間性を備えた医師としての成長こそが、医学部の教育がめざすものです。

放射線災害医療を学ぶ

医学部では、3年次に患者さん、自分の家族、他の地域の友人にも、放射線と健康について自ら解説できるようになるよう「放射線生命医療学」、「救急災害医療」、「放射線災害医療学」を学びます。さらに4年次から始まるBSLにおいても放射線災害医療及び災害医療について実習を行います。

会津医療センター臨床実習

会津医療センターでの臨床実習はBSL第2クールに行われ、すべての学生が会津医療センターで2週間の実習を行うこととなります。総合内科、麻酔科、漢方内科が最大2名、他の診療科は1名の学生受け入れを行っています。それぞれの診療科においてマンツーマンでの実習となり、臨床推論、医療面接、身体診察、基本的手技、プレゼンテーションの能力を習得します。さらに漢方内科、漢方外科の外來実習が必修項目としてそれぞれ半日ずつ用意されています。

地域との協働による実習

医学部では、地域医療に貢献する医師の育成と定着をめざし、地域の医療機関や福祉施設の協力のもと、低学年から地域住民等と向き合う「地域実習」を行っています。また、高学年の「BSL」においても、一定期間地域の医療機関で実習を行う「協力病院コース」などを設け、質の高い実習を行います。

卒業後の進路

卒業後は2年間の臨床研修があり、複数診療科をローテートしながら研修を行います。この研修を終えると、専門医資格取得のための専門研修に進みます（P52～参照）。

■医大附属病院臨床研修の特徴

- ①柔軟性をもったプログラム
- ②県内外21の研修協力病院との「たすきがけ研修」も選択可能
- ③希望に応じて研修協力病院での短期研修が可能
- ④総合内科研修を必修とし、総合的な臨床能力の高い医師を養成
- ⑤メンター（相談員）制度によるきめ細かな研修サポート

■医大附属病院専門医研修の特徴

- ①全ての基本領域で基幹施設としてプログラムを運用
- ②希望する専門医資格の効率的な取得が可能
- ③専門医と博士号を並行して取得可能
- ④連携施設との共同により、必要な症例等を確保

医学部医学科講座

生命科学・社会医学系

神経解剖・発生学講座

Department of neuroanatomy and embryology



講座主任(教授) 辻岡 洋 TSUJIOKA Hiroshi

成人は中枢神経系等を再生させることはほとんどできませんが、新生児はある程度の再生力を持ち、ゼブラフィッシュでは脊髄を完全に切断してもほぼ元通りに再生します。ヒトでこのような高度な再生を実現することはできるのでしょうか？ 私達は小型魚類やマウスを用い、再生能の多様性が生じるメカニズムの解明とその応用を目指しています。

生命科学・社会医学系

免疫学講座

Department of Immunology



講座主任(教授) 関根 英治 SEKINE Hideharu

免疫とは、身体に侵入した病原体を非自己と認識し排除するシステムをいいます。当講座では感染初期の生体防御に関わる補体系を中心とした自然免疫機構の解明と、自己成分に向けられた免疫応答が引き起こす自己免疫疾患の発症機構の解明に重きを置いています。学内をはじめ、国内外の研究機関や製薬企業との共同研究を積極的に推進しております。

生命科学・社会医学系

解剖・組織学講座

Department of Anatomy and Histology



講座主任(教授) 和栗 聡 WAGURI Satoshi

人体の構成要素は常に入れ替わっています。細胞内でも同様の新陳代謝が起きており、その分解過程を担うのがオートファジー・リソソームシステムです。これが外界の変化にどのように適応するのか？ 肝疾患、神経変性疾患、癌などの病態にどのような意義をもつのか？ を紐解きたいと考えています。

生命科学・社会医学系

病態制御薬理医学講座

Department of Bioregulation and Pharmacological Medicine



講座主任(教授) 下村 健寿 SHIMOMURA Kenju

糖尿病の発症機序ならびに治療法の研究、脳の機能、体内における薬物動態などを幅広く研究しております。糖尿病に関してはインスリン分泌機序ならびに抵抗性の観点から検討を行い、脳の機能に関してもニューロンから脳全体に至る総合的評価、薬物動態に関しても薬品の効果を最大限発揮する方法を最新技術で検討しています。

生命科学・社会医学系

細胞統合生理学講座

Department of Cellular and Integrative Physiology

細胞を取巻くイオン環境は細胞の生死や分化・増殖に影響を与えています。iPS細胞の分化におけるイオン環境の影響、セシウムイオンが線維芽細胞やがん細胞の増殖に与える効果、卵細胞やiPS細胞の品質管理の研究が進行中のテーマです。それに加え、一般の方々を対象に体の仕組みを紹介する活動を行っています。

生命科学・社会医学系

微生物学講座

Department of Microbiology



講座主任(教授) 立石 善隆 TATEISHI Yoshitaka

三大感染症と呼ばれる結核、HIV/AIDS、マラリア、さらにはCOVID-19パンデミックのように、微生物は人類にとって現在も脅威となっています。私たちは、結核・非結核性抗酸菌症を引き起こす病原体を中心に、次世代シーケンサーを使ったゲノム解読や機能ゲノム解析、マウスを使った感染実験などを行い、病気を引き起こす仕組みや新たな治療標的の同定を目指します。

生命科学・社会医学系

システム神経科学講座

Department of Systems Neuroscience



講座主任(教授) 永福 智志 EIFUKU Satoshi

ヒトの脳は総数1000億個を超えるニューロンが、総数1000兆個を超えるシナプスで連結した、複雑な神経回路を、無数の活動電位と呼ばれる電気信号が伝播していくことにより機能しています。本講座では社会的認知、社会行動および睡眠・覚醒制御の脳内メカニズムを、実験動物における神経活動記録とヒトでの脳機能イメージングを用いて研究しています。



生命科学・社会医学系

生化学講座

Department of Biochemistry



講座主任(教授) 西田 満 NISHITA Michiru

がんによる死亡原因のほとんどは原発巣から他臓器への転移によるといわれていますが、そのプロセスは多様であり、その制御機構もきわめて多岐にわたります。生化学講座では、細胞の接着、極性、運動といった基本的細胞機能の視点からがんの浸潤・転移の分子メカニズムの解明を目指して研究を行っています。



医学部医学科講座

基礎病理学講座

Department of Basic Pathology

生命科学・社会医学系



講座主任(教授) 千葉 英樹 CHIBA Hideki

当講座は「細胞間接着-転写因子経路」の発見を皮切りに、「細胞表面から核内に至るシグナル経路(いわゆるoutside-in signal)とその破綻」について臓器・疾患横断的に研究しています。加えてがん悪性形質を左右する標的分子に着目し、診断・予後判定マーカーや新規分子標的薬(抗体医薬・低分子化合物)の開発に繋がっています。

疫学講座

Department of Epidemiology

生命科学・社会医学系



講座主任(教授) 大平 哲也 OHIRA Tetsuya

疫学講座は福島県「県民健康調査」をはじめとして、循環器疾患、がん、生活習慣病、認知症に関する国内外の大規模疫学研究に参加し、疾患の身体心理社会的危険因子を明らかにしています。また、笑い、音楽、栄養等に関する介入研究を実施しています。得られた知見をもとに地域・職域の健康づくりに積極的に関わっています。

衛生学・予防医学講座

Department of Hygiene and Preventive Medicine

生命科学・社会医学系



講座主任(教授) 各務 竹康 KAKAMU Takeyasu

衛生学・予防医学は単に病気にならないだけでなく、健康増進、生活の質の向上など、人々の「よりよく生きる」を追求する学問です。温熱、化学物質など生活、労働に潜む環境要因と健康の相互作用について、様々な手法を用いて研究を行うほか、行動科学を応用した健康支援も担っております。

放射線物理化学講座

Department of Radiation Physics and Chemistry

生命科学・社会医学系

当講座は、身の回りの放射線による被ばく線量をより的確に評価するための調査研究を行っています。原発事故由来の放射線のみならず、元々自然界にある放射線も対象として、環境中に存在する放射線・放射性物質の量を測定するとともに、人への被ばくを与えるまでの過程を検討することで、より確かな線量評価を目指しています。

バイオメディカル・アナリティクス学講座

Department of Biomedical Analytics

生命科学・社会医学系

当講座は、主に地域の人々を対象として、育児支援、思春期の精神的健康、女性労働者の健康、生活習慣病予防や介護予防など「ゆりかごから看取りまで」の幅広いテーマの調査研究を行っています。また、健康危機管理として、災害時避難計画、震災復興関係の調査等を行い、その成果を発信しています。

健康リスクコミュニケーション学講座

Department of Health Risk Communication

生命科学・社会医学系

東日本大震災・東京電力福島第一原発事故後、福島県内外に未だ放射線や健康に関する不安が認められています。当講座は、健康や放射線に関するリスクコミュニケーションの分析やその有効な手法の研究を通じて、主に放射線に関する正確な情報を発信し、県内外における放射線や健康に対する悩みや不安を解消することを目的としています。

法医学講座

Department of Forensic Medicine

生命科学・社会医学系



講座主任(教授) 原田 一樹 HARADA Kazuki

法医学は基礎医学に分類されていますが、法医学解剖・鑑定には幅広い臨床知識が必要とされる、奥が深く魅力的な学問です。主な研究テーマは「頭部外傷の神経病理学的解析」ですが、薬物分析や死後CT画像に関する研究も行っています。亡くなった方から得られた貴重な情報を、生きた人のために役立てることを目指しています。



放射線生命科学講座

Department of Radiation Life Sciences

生命科学・社会医学系

放射線による生物影響を指標に被ばくした線量を調べる方法を生物学的線量評価と呼びます。当講座は生物学的線量評価を用いて、職業被ばく・医療被ばく者の疫学研究や新たな線量評価法の確立研究等に取り組んでいます。これらの研究は放射線被ばく事故の発生時、高速かつ高精度な被ばく線量評価を可能にすることを目指しています。



医学部医学科講座

循環器内科学講座

Department of Cardiovascular Medicine

臨床医学系
内科学部門

講座主任(教授) 竹石 恭知 TAKEISHI Yasuchika

先進的治療を積極的に行い、循環器病だけでなく救急から慢性疾患まで幅広い領域を包括的に診療しています。内科医としての基礎を習得したうえで専門の研鑽を積める教育体制を整えています。研究は基礎研究と臨床研究を両輪とし虚血、心不全、不整脈、肺高血圧、画像診断、腫瘍循環器など様々な研究を幅広く進め、多くの成果を世界へ発信しています。国内・海外の研究施設との交流も盛んです。



教授 石田 隆史 ISHIDA Takafumi

心血管疾患の成因におけるDNA損傷および細胞老化の役割を分子生物学的に探求しています。また近年がん患者の生存率が向上している一方、がんサバイバーの心血管病リスクの増大が問題となっています。これらの問題を最小限にとどめたり、あるいは発症を予知するため、“Cardio-Oncology”という新しい領域の診療・研究を行っています。

リウマチ膠原病内科学講座

Department of Rheumatology

臨床医学系
内科学部門

講座主任(教授) 下島 恭弘 SHIMOJIMA Yasuhiro

関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、全身性血管炎など、難治性疾患に分類されるリウマチ膠原病の早期診断法や新規治療の開発を目指して研究を行っています。基礎研究では発症に関わる免疫学的メカニズムと治療標的の解明に取り組み、臨床研究では多施設共同研究にも参画し臨床データの解析を継続して、臨床に還元できる研究成果に結びつけています。

糖尿病内分泌代謝内科学講座

Department of Diabetes, Endocrinology and Metabolism

臨床医学系
内科学部門

講座主任(教授) 島袋 充生 SHIMABUKURO Michio

当科は、代謝疾患である糖尿病、脂質異常症、肥満症・メタボ、高尿酸血症・痛風、内分泌系疾患である視床下部・下垂体、甲状腺、副甲状腺、副腎、神経内分泌腫瘍等を対象領域としています。肥満・異所性脂肪・フレイル・サルコペニアという切口から、QOL、臓器予後、健康長寿の改善につなぐ包括的医療を目指しています。当科の症例データベースの解析から得た知見を、国内学会、国際誌等で報告し注目されています。

血液内科学講座

Department of Hematology

臨床医学系
内科学部門

講座主任(教授) 池添 隆之 IKEZOE Takayuki

私たちの講座では血液がんの治療成績の向上を目指した研究を行っています。造血細胞移植は血液がん根治をもたらし得る治療法ですが、それをもってしても再発したり、移植片対宿主病や微小血管障害などの合併症で亡くなる症例もあり、その治療成績は未だ満足できるものではありません。血液がんの再発を予防する治療法の開発や、移植後合併症の早期診断マーカーや治療法を開発する基礎研究を行っています。

脳神経内科学講座

Department of Neurology

臨床医学系
内科学部門

講座主任(教授) 金井 数明 KANAI Kazuaki

脳神経内科学講座は、脳卒中・認知症やパーキンソン病などの神経変性疾患といった脳・脊髄・末梢神経・筋肉の病気の患者さんを診察・治療し、これらの疾患に関する研究を行う講座です。診療では、救急疾患対応から慢性疾患の診療・管理まで幅広く行います。研究ではPET-MRIを用いた共同研究などを進めています。

消化器内科学講座

Department of Gastroenterology

臨床医学系
内科学部門

講座主任(教授) 大平 弘正 OHIRA Hiromasa

難治性疾患である自己免疫性肝疾患・炎症性腸疾患および消化器癌を主体に幅広く基礎・臨床研究を実施しています。基礎研究では、患者さんに還元できる成果が得られるように、遺伝子、エクソソーム、腸内細菌、免疫から代謝に至るまで多彩な研究をしています。県内医療機関との連携で多数症例での臨床研究も展開しています。

呼吸器内科学講座

Department of Pulmonary Medicine

臨床医学系
内科学部門

講座主任(教授) 柴田 陽光 SHIBATA Yoko

肺がん、間質性肺疾患、COPD、気管支喘息、呼吸器感染症などの診療・研究を行っています。これらの疾患に関する多施設共同研究や臨床試験に数多く参加しています。臨床研究においては各呼吸器疾患におけるバイオマーカーや新規診断補助システムの開発を行っています。また気管支内視鏡を用いたインターベンションを数多く行っています。

腎臓高血圧内科学講座

Department of Nephrology and Hypertension

臨床医学系
内科学部門

講座主任(教授) 風間 順一郎 KAZAMA Junichiro James

当講座では、慢性腎臓病の発症・進展に関連する要因を追求するコホート研究、慢性腎臓病治療薬の薬理作用や尿毒症病態の成立メカニズムを解明する動物実験・細胞生物学実験、糸球体の生理的・病的状態における微細構造研究、酸化ストレスを標的とした新薬の開発、および遠隔医療のデバイス開発と社会実験などの課題に取り組んでいます。



医学部医学科講座

消化管外科学講座

Department of Gastrointestinal Tract Surgery

臨床医学系

外科学部門



講座主任(教授) 河野 浩二 KONO Koji

当講座は、手術手技、特にロボット手術の成熟化を根底に、さらに抗癌剤、放射線、免疫療法、ゲノム医療の併用による集学的治療の確立を命題としております。食道癌、胃癌、大腸癌の病態を理解し、集学的治療に直接還元できるTranslational Researchを、腫瘍免疫学+分子生物学+Bioinformaticsの手法を駆使し、①有効な癌免疫療法の確立、②癌バイオマーカーの同定の、2大研究テーマを実践しております。

脳神経外科学講座

Department of Neurosurgery

臨床医学系



講座主任(教授) 藤井 正純 FUJII Masazumi

Patient-oriented research (POR) を主軸として、研究開発に基礎から臨床まで取り組んでいます。脳腫瘍の分子マーカーの基礎研究から希少難病に対する医師主導治験まで、脳内の白質線維解剖から覚醒下手術での脳機能研究まで、手術支援の基盤技術開発から術中MRI・画像誘導手術への応用まで、PORで新しい医療を切り開くべく頑張っています。

肝胆膵・移植外科学講座

Department of Hepato-Biliary-Pancreatic and Transplant Surgery

臨床医学系

外科学部門



講座主任(教授) 丸橋 繁 MARUBASHI Shigeru

難治性である肝胆膵領域のがんに対して手術を中心とした集学的治療を行い予後の改善を目指し、かつ腹腔鏡下・ロボット支援下手術(低侵襲手術)によってQOLも改善する外科の最前線治療を行っています。基礎研究においては、難治性癌の細胞内輸送やサーフェソームに着目して早期発見や創薬につながるバイオマーカーの開発と、独自の膵島シート・肝細胞シートを用いた組織移植の研究を行っています。

整形外科科学講座

Department of Orthopaedic Surgery

臨床医学系



講座主任(教授) 松本 嘉寛 MATSUMOTO Yoshihiro

整形外科科学講座では運動器(身体運動に関わる骨、筋肉、関節、神経などの総称)の疾患の治療・研究・教育を行っています。研究テーマとしては、伝統である脊椎脊髄疾患の病態解明、難治性慢性疼痛に対する集学的アプローチに加え、転移性骨腫瘍を含む骨軟部腫瘍や、関節疾患やスポーツ外傷に対しても、積極的に取り組んでいく所存でございます。

呼吸器外科学講座

Department of Chest Surgery

臨床医学系

外科学部門



講座主任(教授) 鈴木 弘行 SUZUKI Hiroyuki

当講座では肺癌、縦隔腫瘍を中心に様々な胸部疾患を対象として新たな外科治療の開発、教育、研究を行っています。手術治療においては多くのロボット手術を手掛け、薬物療法の専門家の加入によって先進的な薬物療法も精力的に行っています。研究では「癌と免疫」をキーワードに国際的な臨床研究に数多く参画する一方で、腫瘍の微小環境に着目した癌免疫に関わる多くの基礎的研究、AIを用いた画像解析システムの開発といった先端的な研究を進めています。以上を行うことで、難治性癌の代表である肺癌、胸部悪性腫瘍の治療に日々果敢に挑んでいます。

形成外科学講座

Department of Plastic and Reconstructive Surgery

臨床医学系



講座主任(教授) 小山 明彦 OYAMA Akihiko

形成外科学講座では、さまざまな先天性形態発育不全の外科治療の開発・研究に取り組んでおり、その中でも唇裂・口蓋裂に対し初回の1回の外科治療で裂の閉鎖を完了する先進治療の発展に他大学と連携して力を注いでいます。また薄型遊離皮弁の開発や顔面神経麻痺に対する動的再建術など、高度な再建術式の開発やケロイドの発生メカニズムの解明と治療薬開発など、臨床に直結した研究プロジェクトを推進しています。

乳腺外科学講座

Department of Breast Surgery

臨床医学系

外科学部門



講座主任(教授) 大竹 徹 OHTAKE Tohru

当教室では「臨床」と「研究」の両立を指導目標としています。臨床面では、画像診断、外科治療、薬物療法、ゲノム医療、サポートケアに至るまで、乳がんに対する集学的治療を体系的に学ぶことができます。研究面では、新たな診断技術や薬剤の開発、治療効果を予測するマーカーの探索などに取り組み、乳がんの個性に応じたオーダーメイド治療の確立を目指しています。最先端医療の現場で、臨床力と研究力を磨ける環境が整っています。

産科婦人科学講座

Department of Obstetrics and Gynecology

臨床医学系



附属病院長(教授) 藤森 敬也 FUJIMORI Keiya

当講座の特徴は、全員が周産期医学、婦人科腫瘍学の研鑽を積み、腹腔鏡下手術を含めて、バランスの取れた診療を行うことが出来ることです。その中で、研究テーマとして、周産期医学、婦人科腫瘍学、不妊・内分泌学、女性医学を持っております。その他、胎児超音波診断、更年期、遺伝、子宮筋腫動脈塞栓術、内視鏡治療といった特殊外来(要予約)も行っております。

心臓血管外科学講座

Department of Cardiovascular Surgery

臨床医学系

外科学部門



講座主任(教授) 今坂 堅一 IMASAKA Kenichi

心臓血管外科学講座では、心臓血管疾患に対する手術治療の臨床、研究、研修・教育を行っています。治療対象疾患は、先天性心疾患、狭心症、心筋梗塞、心臓弁膜症、心不全、不整脈、大動脈瘤、大動脈解離、動脈硬化症など、小児から高齢者にまで多岐にわたり、低侵襲治療など先進的治療の実施と成績向上のための臨床および研究を行っています。



教授 添田 周 SOEDA Shu

婦人科悪性腫瘍に対する、診療・教育・研究を行っています。他施設で切除不能とされた高難度症例に対する安全な手術治療や低侵襲手術にも力をいれております。

また、多施設共同での臨床試験・臨床研究にも参加しています。近年、グローバルの薬剤開発の治験も提供しています。基礎研究として癌微小環境、腫瘍膜タンパクの解析なども行っています。

医学部医学科講座

臨床医学系

小児科学講座

Department of Pediatrics



講座主任(教授) 郷 勇人 GO Hayato

新生児、集中治療、循環器、神経、感染症、腎臓、内分泌など幅広い疾患の診療と研究に取り組んでいます。研究は、細胞や動物モデルを用いた基礎研究から、疾患バイオマーカー等の臨床研究、そしてエコチル調査をはじめとする疫学研究まで様々な研究を行い、論文を世界に発信しています。

臨床医学系

神経精神医学講座

Department of Neuropsychiatry



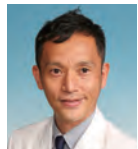
講座主任(教授) 三浦 至 MIURA Itaru

統合失調症、うつ病、双極性障害、せん妄、認知症、不安障害、摂食障害、発達障害などの精神疾患や緩和ケアなどリエゾン精神医学に関する診療、研究に取り組んでいます。精神疾患の薬理学、分子生物学、神経生理学など生物学的研究のほか、心理学や社会精神医学など多面的な視点でbio-psycho-socialモデルに基づいた研究を行っています。

臨床医学系

眼科学講座

Department of Ophthalmology



講座主任(教授) 向井 亮 MUKAI Ryo

患者様の「ひかりを守る」を目指し、黄斑・網膜硝子体疾患をはじめ、小児、斜視弱視、ぶどう膜炎、緑内障、白内障、角膜疾患、眼形成・眼窩疾患、神経眼科に至るまで、各専門領域において高度な診療と研究を展開しております。とりわけ黄斑疾患診療における診断、治療、手術に関する成果を国際的に発信しております。

臨床医学系

放射線医学講座

Department of Radiology and Nuclear Medicine



講座主任(教授) 伊藤 浩 ITO Hiroshi

当講座では放射線画像診断・核医学およびインターベンショナルラジオロジー(IVR)に関する診療・教育・研究を行っています。脳、心臓、腫瘍を主な対象として、CT、MRI、PET、SPECTなどを用いた形態画像と機能画像の融合による画像診断の高度化と新しい画像診断法の開発を目指した研究を行っています。

臨床医学系

皮膚科学講座

Department of Dermatology



講座主任(教授) 山本 俊幸 YAMAMOTO Toshiyuki

強皮症モデルマウスを用いた線維化の機序と抗線維化薬の検討、IL-17病といわれる乾癬の病態解析と膿疱性乾癬の新規バイオマーカーの探索、好中球性皮膚症におけるNETsの局在、膠原病の皮膚症状の成立機序、に加え掌蹠膿疱症、サルコイドーシス、肥満細胞症、アレルギー疾患(アトピー性皮膚炎や食物アレルギー)、悪性リンパ腫、皮膚血管炎、などの臨床研究を行っています。

臨床医学系



教授 福島 賢慈 FUKUSHIMA Kenji

当講座ではCT、MRI、核医学画像を用いて循環器疾患にフォーカスした研究・開発を行っています。PETMRを用いて絶え間なく動く臓器である心臓の4D解析や分子イメージングなどを組み合わせ、AIによる自動診断やコンピュータ・シミュレーションによる大血管の血流解析にも取り組んでいます。

臨床医学系

泌尿器科学講座

Department of Urology



講座主任(教授) 小島 祥敬 KOJIMA Yoshiyuki

当講座では、ロボット支援手術をこれまでに約1,000例経験し、その実績は国内外で高く評価されています。また腎移植、尿失禁などの女性泌尿器科疾患、小児泌尿器科疾患、男性不妊症、高齢者の排尿障害に力を注いでいます。さらに基礎研究や教育の充実をはかり、数多くの学会賞の受賞や質の高い論文が国際雑誌に掲載されています。

臨床医学系

麻酔科学講座

Department of Anesthesiology



講座主任(教授) 井上 聡己 INOUE Satoki

当研究のテーマは、麻酔薬の薬物動態解析、臨床モニターの精度管理、麻酔薬が免疫に与える影響、脳虚血モデルの開発、痛みの機序解析などです。臨床面では手術麻酔、集中治療、ペインクリニック、緩和医療の4つの分野を担っています。外来は、ペインクリニック、緩和医療、手術を受ける患者さんの術前診察外来があります。

臨床医学系

耳鼻咽喉科学講座

Department of Otolaryngology



講座主任(教授) 室野 重之 MURONO Shigeyuki

頭頸部癌の発癌・転移・腫瘍微小環境に関する基礎研究を行っています。特にウイルス関連癌に注目しており、Epstein-Barrウイルスやヒトパピローマウイルス(HPV)のウイルス癌蛋白の機能解析を主としています。また、副鼻腔真菌症の免疫微小環境、エラストグラフィによるIgG4関連唾液腺疾患の診断、AI補助嚥下内視鏡検査の開発などの研究も行っています。

医学部医学科講座

救急医療学講座

Department of Emergency and Critical Care Medicine

臨床医学系



講座主任(教授) 伊関 憲 ISEKI Ken

救急は医療の原点です。高度救命救急センターには多くの外傷、心停止、中毒、感染症などの重症患者さんが搬送されます。最善の診療・治療手順のため心肺蘇生、外傷初期治療、敗血症などに関して世界標準のガイドラインが作られてきました。このガイドラインに則した救急・集中治療を提供し、世界にエビデンスに基づいたデータを発信しています。

総合内科・総合診療学講座

Department of General Internal Medicine and Family Medicine

臨床医学系



講座主任(教授) 濱口 杉大 HAMAGUCHI Sugihiko

高齢者医療、感染症分野、地域医療の研究を中心に行っております。健康長寿に関する地域大規模コホート研究、感染症分野の診断研究、小児・AYA世代のがん経験者の長期フォローアップ体制モデル構築、急性期入院高齢患者の実態調査、などの研究を通じて福島県の地域医療の発展に貢献しよう努力しております。

病理病態診断学講座

Department of Diagnostic Pathology

臨床医学系



講座主任(教授) 橋本 優子 HASHIMOTO Yuko

患者さんから採取した組織(体の一部)や細胞を、顕微鏡等を用いて観察し、病気を診断する「病理診断(生検・細胞診・術中迅速診断)」と「病理解剖」を行っています。

患者さんに最も適した治療を提供するために必要な、正しい「病理診断」を目指しています。

施設間の連携で、県内の病理診断の向上に努めています。

放射線健康管理学講座

Department of Radiation Health Management

臨床医学系



講座主任(教授) 坪倉 正治 TSUBOKURA Masaharu

本講座は2011年3月11日に発生した福島第一原発事故を受け、2011年10月に新設された放射線健康影響に関する健康管理が専門です。実際に、低線量被ばくの健康影響や健康リスクについて、心身両面の健康に役立つ新たな知見の確立について研究を進めております。また、被ばく医療学・予防医学分野の人材育成にも力を入れております。

臨床検査医学講座

Department of Laboratory Medicine

臨床医学系



講座主任(教授) 志村 浩己 SHIMURA Hiroki

臨床検査は、現代の医療において広く行われている「証拠に基づいた医療=EBM」において非常に重要な位置を占めています。本講座では附属病院検査部と連携して、臨床検査分野の研究を行っています。さらに、震災後に福島県にて行われている甲状腺検査にも深く関与していると同時に、甲状腺疾患に関する研究も活発に行っております。

甲状腺内分泌学講座

Department of Thyroid and Endocrinology

臨床医学系



講座主任(教授) 古屋 文彦 FURUYA Fumihiko

甲状腺内分泌学講座では、甲状腺・副甲状腺・副腎といった内分泌疾患の診療、研究、教育を行っています。これまで取り組んできた甲状腺がんの発がん、増殖、進展のメカニズムの研究テーマに加え、希少内分泌疾患の原因遺伝子探索や多因子疾患での複数のレアバリエーション遺伝子統計解析にも積極的に取り組んでいきたいと考えております。

感染制御学講座

Department of Infection Control

臨床医学系



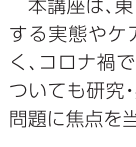
講座主任(教授) 山藤 栄一郎 SANDO Eiichiro

臨床感染症や感染対策の研究を行っています。研究の軸は、我が国の風土病であるつつが虫病や日本紅斑熱、発疹熱などのリケッチア症に関する臨床・疫学研究であり、ベクター調査や診断方法の開発も行っております。その他、市中発症肺炎やCOVID-19、薬剤耐性菌の院内感染対策の研究にも取り組んでおります。

災害こころの医学講座

Department of Disaster Psychiatry

臨床医学系



本講座は、東日本大震災と福島原発事故後の被災者のメンタルヘルスに関する実態やケアに関する研究や支援を行っています。またそれだけではなく、コロナ禍での様々なメンタルヘルス問題や、その他自然災害の影響等についても研究・実践を行ってきました。とりわけPTSDや悲嘆、自殺といった問題に焦点を当てて内外に発信しています。

輸血・移植免疫学講座

Department of Blood Transfusion and Transplantation Immunology

臨床医学系



講座主任(教授) 池田 和彦 IKEDA Kazuhiko

私たちは、輸血、造血幹細胞移植、臓器移植、細胞治療の開発や安全性と効率性の向上を目指しています。このため、免疫検査・遺伝子検査などの検査法、細胞採取・保存・管理・輸注の準備、移植や治療後の免疫反応、幹細胞の性質などを研究しています。研究成果は、世界的にも診療に活かされており、さらなる発展をめざしています。

放射線腫瘍学講座

Department of Radiation Oncology

臨床医学系



講座主任(教授) 鈴木 義行 SUZUKI Yoshiyuki

放射線治療の効果には「がん免疫」が重要な役割を担っており、免疫チェックポイント阻害剤との併用療法の適応が拡大しています。本講座では、放射線治療による「がん免疫」の増強・活性化機構の解明と、放射線治療と免疫療法の併用に関する研究を、基礎から臨床試験まで一貫して推進しています。

医学部医学科講座

腫瘍内科学講座

Department of Medical Oncology

臨床医学系



講座主任(教授) 佐治 重衡 SAJI Shigehira

がん薬物療法の急速な進化に伴い、安全かつ効果的に新規薬物療法を実施できる腫瘍内科医の重要性が注目されてきました。本講座ではがん薬物療法を必要とする患者さんの診療とともに、新規治療薬の臨床開発やトランスレーショナルリサーチ、免疫療法に伴う副作用の軽減を目指した研究、そして乳癌のエストロゲン感受性に関する基礎研究などを行っています。

リハビリテーション医学講座

Department of Rehabilitation Medicine

臨床医学系



講座主任(教授) 林 哲生 HAYASHI Tetsuo

リハビリテーション医学は患者さんが最も期待する医療です。診療範囲は運動器・脳血管疾患・心臓・呼吸・がん・小児・救急・ICUなどほぼすべての診療科にまたがっています。高齢社会でその需要は増すばかりです。研究は脊髄損傷の麻痺改善・嚥下障害・ADLの疫学調査・災害リハビリテーション・障がい者スポーツ等に力を入れています。

放射線災害医療学講座

Department of Radiation Disaster Medicine

臨床医学系



講座主任(教授) 長谷川 有史 HASEGAWA Arifumi

「放射線災害」を掲げる本邦初の講座です。東日本大震災と福島第一原子力発電所事故で露見した課題を抽出・改善し、広く国際社会に還元するための診療・教育・研究を行います。救急・災害・緊急被ばく医療領域の応用医療、並びに医療・福祉・保健領域にまたがる健康危機管理学、を体系化し確立する使命を持つ、当学を特徴付ける講座です。



医学部附属研究施設

生体物質研究部門

Department of Biometry and Genetics

附属生体情報伝達研究所



研究主任(教授) 田中 紀子 TANAKA Noriko

生体物質(核酸、たんぱく質、脂質、酵素など)の生体内での役割や病態への関わりに関連する研究を行っています。特に核酸の計量・計測に関連するドライ(統計学・情報学)&ウェット(分子生物学・遺伝学)双方の研究テーマを包括的に扱い、遺伝学的観点から疾患の根幹を担う分子機能の研究を進めています。

附属施設

附属放射性同位元素(RI)研究施設

Radioisotope Center

医学部附属研究施設



施設長(教授) 井上 直和 INOUE Naokazu

当施設は、放射性同位元素等の規制に関する法律に基づくRI利用のための全学共同利用施設で、許可核種として非密封25核種を登録しています。RIを用いた研究のサポートや、放射線管理業務、法律で定められた教育(教育訓練)を主たる業務としています。また、免疫反応や活性酸素に関連する研究を行っています。

細胞科学研究部門

Department of Cell Science

附属生体情報伝達研究所



研究主任(教授) 井上 直和 INOUE Naokazu

本部門では、ゲノム編集技術、超高解像度分子ダイナミクス、細密立体構造解析などの最新の研究技術を取り入れて、種々の病態の解明に向けた研究に取り組んでいます。特に不妊症の解決に繋がる受精を成立させるための鍵分子の発見や、受精の新たな概念を提唱するなど世界初となる研究成果をあげています。

附属実験動物研究施設

Laboratory Animal Research Center

医学部附属研究施設



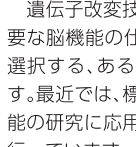
施設長(教授) 関口 美穂 SEKIGUCHI Miho

当施設は、国際的に通用する医学や生命科学の研究の一環として、適正な動物実験実施と研究の再現性を担保するために、動物福祉に配慮し様々な実験動物を高い飼育水準で維持することができる学内共同利用部門です。また、研究者が質の高い研究成果を発信できるように技術や情報を提供し、研究を支援しています。

生体機能研究部門

Department of Molecular Genetics

附属生体情報伝達研究所



遺伝子改変技術により神経回路を操作し、動物が環境に適応するために重要な脳機能の仕組みの解明に取り組んでいます。特に、刺激に応じて行動を選択する、あるいはそれを変更する神経回路をモデルにして研究しています。最近では、標的の神経細胞を活性化させる新規の遺伝子改変技術を開発し、脳機能の研究に適用するとともに、障害による脳機能の低下を回復させる研究も行っています。

附属死因究明センター

Postmortem Examination Center

医学部附属研究施設



センター長 原田 一樹 HARADA Kazuki

死因究明センターは、福島県内で発生する異状死の検案(ご遺体の診察)と剖検(検査のための解剖)を担当しています。死後CT撮影や薬毒物分析の体制を備えた当センターは、福島県内唯一の死因究明専門機関です。法医学や臨床各科との連携により、よりレベルの高い死因究明を目指しています。

医学部トピックス

成績優秀者表彰

学生のモチベーション向上を期待して成績優秀者を表彰することとし、医学部1年生、2年生、3年生の成績優秀者に対し医学部長から表彰状が贈られました。

MD-PhD プログラムガイダンス

MD-PhDプログラムガイダンス(募集する基礎系の講座による研究内容説明会)を毎年開催しており、多くの医学部学生が参加します。本プログラムは2011年度に創設され、今年度も前期プログラムをスタートする予定です。



白衣式

臨床実習を実施するために必要な知識や技能を身につけた医学部の4年生に対し、医師を目指す者としての心構えを新たにし、自覚を持って臨床実習に臨んでもらうため、大学の校章等を刺繍した白衣を授与する「白衣式」を行っています。

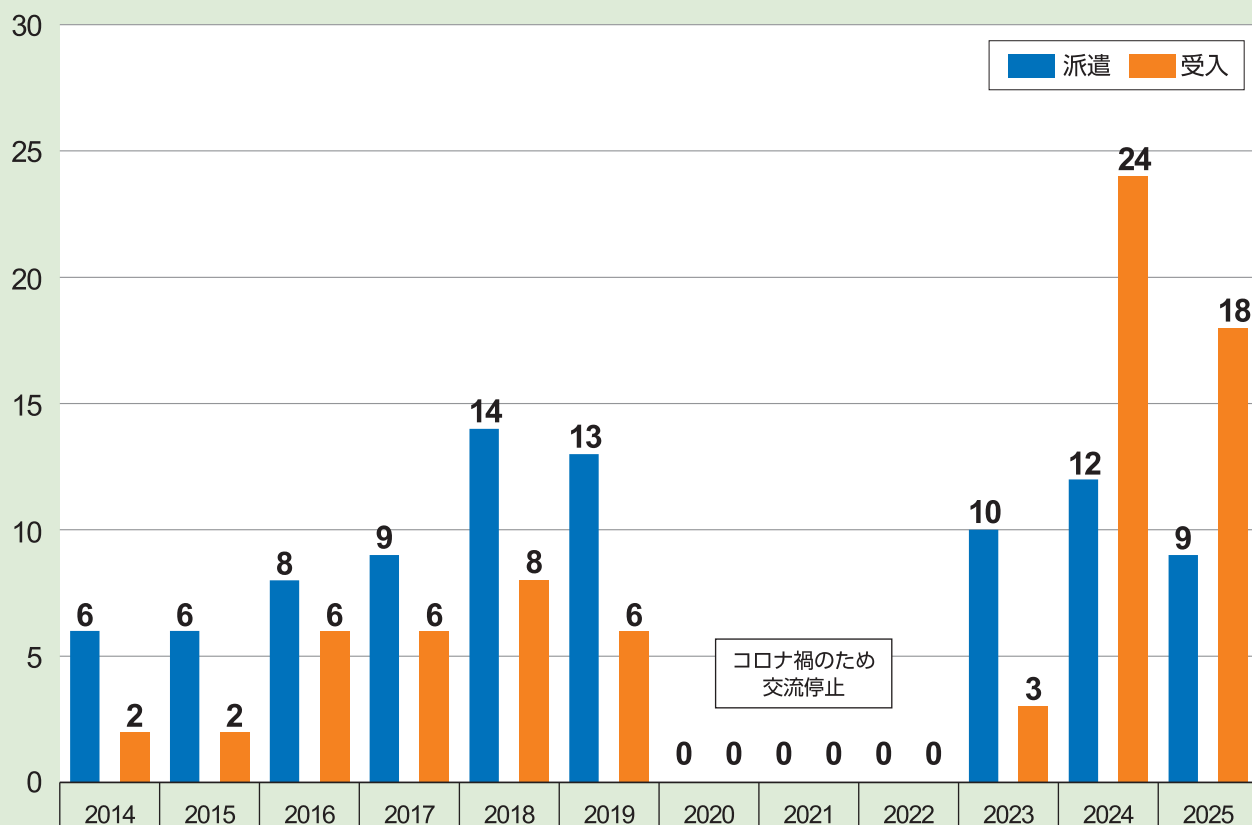
医学部長のあいさつ後、病院長より一人ひとりに白衣を授与し、医師になるための心構えについて講話がありました。続いて、第4学年代表が誓いの言葉を述べ、医療人として歩んでいく決意を新たにしました。



学生の国際交流事業トピックス

協定校派遣・受入実績数(2014年度～2025年度)

本学では、海外協定校との学生派遣および受入を通じて、国際交流を推進しています。



学生の国際交流事業トピックス

留学生交流発表会

本学では、海外協定校との国際交流の一環として、毎年、国際学術交流事業を実施し、医学部生を海外へ派遣しています。本事業は、福島の地域医療に貢献するとともに、多様化する地域社会に対応できる国際的視野を備えた、グローバルに活躍する医療人材の育成を目的として実施されています。

2025年度は、シンガポール国立大学、マウントサイナイ・アイカーン医科大学（米国）、国立台湾大学へ計6名の学生を派遣しました。帰国後には「医学部留学生交流発表会」を開催し、参加学生が現地での学びや経験、その成果について英語で発表を行いました。

発表会には、多くの学生・教職員が参加し、本学が推進するグローバルな学習環境への関心の高さがうかがえる機会となりました。

シンガポール国立大学で学んだ学生からは、基礎と臨床を統合した教育カリキュラムや反転授業など、先進的な学習環境が紹介され、また、女性医師が子育てと仕事を両立できる社会制度に触れ、多様な価値観を学ぶ機会となったという感想が述べられました。

国立台湾大学で学んだ学生からは、救急・災害医療の体制、在宅医療の充実、宗教観が医療に与える影響など、文化と医療の関係性が報告されました。

マウントサイナイ・アイカーン医科大学で学んだ学生からは、多文化社会の医療現場や先進的な電子カルテ、学生主体のクリニック運営を体験したことや、9.11メモリアル・ミュージアム訪問を通じ、災害後のメンタルヘルスケアの重要性を学んだことが紹介されました。



交換留学生受入

2025年度は、海外協定校である米国マウントサイナイ・アイカーン医科大学から2名、国立台湾大学から1名の留学生を受け入れました。

マウントサイナイ・アイカーン医科大学生2名は、本学放射線健康管理学講座で研究に取り組むため本学に3週間留学しました。初日は国際交流センター長との面談、キャンパスツアー、本学医学部生との交流に加え、IFMSA（国際医学生連盟）主催の歓迎会に参加しました。その後、県民健康調査や放射線災害医療、放射線創薬研究など、本学の特色ある研究や取組を学ぶとともに、研究活動を行いました。

国立台湾大学生は、本学の臨床現場について学ぶため、6週間にわたり本学へ留学しました。初日はオリエンテーションやキャンパスツアーに加え、県民健康調査に関するディスカッション、甲状腺検査の見学、災害医療のVR体験などを通して、福島ならではの医療教育を学びました。その後、4つの診療科に所属し、臨床実習を行いました。





看護学部

School of Nursing

看護学部教育理念

学生が主体的に学ぶことを基本とし、人間の存在と生命の尊厳を深く理解することのできる豊かな感性と倫理観を形成し、柔軟で論理的な思考力を培う。

また、あらゆる場で、あらゆる健康レベルの人々のニーズと必要な看護ケアを、人と人のかかわりを通して把握し、学生が自らの知識と技術を統合して、健康の回復から増進にむけた援助を提供できる能力を養う。

力を養う。

さらに、社会の変化に対応した看護専門職の役割を認識し、保健医療福祉に関わる広い領域で様々な人々と連携・協働を図りながら、看護の対象となる人々自らが健康問題を解決し健康状態を高めていく過程を援助できる、創造性豊かな看護専門職の育成を目指す。

message

メッセージ

人々にとって必要な看護とは何か

福島県立医科大学看護学部は、平成10年4月に公立単科医科大学初の看護学部として誕生しました。開設以来、質の高い看護専門職者の育成、看護実践の質向上に貢献すべく、教育、研究、看護実践、社会貢献等に取り組んでいます。

少子高齢社会の進展に伴い、看護の対象となる人々を取り巻く状況は複雑さを増し、看護が果たす役割はますます重要になってきています。一方、どの時代にあっても、看護は、あらゆる場で生活する人々、あらゆる年代の個人および家族、集団、コミュニティを対象に、対象がどのような健康状態であっても、その人が生きる力を十分発揮して、その人らしく生活していくことを支えていく活動を展開します。

人々の生活は、家庭や地域、学校、職場、病院、施設など様々な場所で営まれており、たとえ同じ健康状態であっても、生活実態は多様であり、それぞれの人々がその人なりの考えや価値観を持って暮らしています。その個性、多様性をふまえながら、その人にあった、その人に必要な看護をいかに実践できるかが鍵になります。看護という行為は、一人ひとりの人間に対する科学的なアプローチであり、何よりも看護者自身のその人への関心や配慮を基盤としてなされる実践活動です。

そして、この個性のある多様な看護という実践そのものが、看護職としての質の向上にも大きく貢献しています。看護活動は、人々と看護職とがともに成長する過程でもあると理解することができます。それほど看護は奥深い学問であり実践なのです。

大学生活の中で、看護について学びながら、ともに「人々に必要とされる看護とは何か」について問い続けていきたいと思います。

看護学部長 高橋 香子



看護学部の教育目標

学部の教育理念に基づき、次のような学生を育成することを教育の目標とする。

1. 人間や文化に対する幅広い関心を持ち、人間と生命、健康、生活について深く洞察することができる。
2. 生命の尊厳や人権について理解し、人々の意思決定を支え、擁護に向けた行動をとることができる。
3. 医療やケアの倫理について熟知し、倫理観に基づく判断や行動をとることができる。
4. 自己を内省する力を養うとともに、他者とのコミュニケーションを通して、よりよい人間関係を築くことができる。
5. 人々の健康レベルを、成長発達や日常生活を取り巻く環境の観点で捉え、健康の回復から増進に向けた援助過程で、看護専門職が果たす役割について理解することができる。
6. 安全で効果的なケアを探求し、批判的思考に基づく臨床判断や根拠に基づく看護を実践できる。
7. 地域社会の人々の健康に関するニーズを把握し、地域の専門職者と協働して人々がその課題を解決するために利用できる社会資源を探求することができる。
8. 協働によるチーム医療を構築し、施設内および地域での看護の対象となる人々の状況にあわせたケアのマネジメントと看護専門職が果たす役割を理解することができる。
9. 看護専門職者としての自らの能力を、自己評価、他者評価を通して振り返ることができ、看護専門職者として研鑽する基本的姿勢を修得する。

看護学部の概要

人口の高齢化、疾病構造の変化にともなって、健康に対する考え方の転換やヘルスケアシステムの変革が求められるなかで、医科大学としては全国で初めてとなる看護学部が平成10（1998）年4月に設置されました。これは、昭和25（1950）年以来の伝統をもつ福島県立医科大学附属看護学校が発展し、昇格したものです。

看護学部は、地域社会の健康問題に取り組む教育・研究の拠点として機能し、「看護は住民とともに生み出していくもの」「保健医療福祉のシステムは、人と人とのつながりのなかで作り出していくもの」という考えを基盤に、地域に開かれた学部づくりをめざしています。看護学部の教育理念には、①人間の存在と生命の尊厳を深く理解することのできる豊かな人間性の形成、②人とのかわりを通して、ケアを必要な人も、ケアを提供する看護の専門職も、自分のもっている能力を最大限に発揮し、ともに成長をはかっていくという相互成長、ケアリングの考え方、③社会の変化に対応し、保健医療福祉に関わる広い領域でリーダーシップを発揮できる看護専門職の育成が、三本柱として盛り込まれています。また、看護の実践・研究・教育の場で活躍できる高度な専門知識、技術、実践能力を有

する人材の育成を目指し、平成14（2002）年4月に大学院看護学研究科が開設されました。さらに、平成31（2019）年4月から成人看護学領域が新設、令和4（2022）年4月から博士後期課程が開設、令和5（2023）年4月から基礎看護学領域の新設及び母性看護学・助産学領域において助産師コースが開設されました。より質の高い看護の実践と研究を目指す取組が日々行われております。



看護学部組織機構図

令和8年4月現在

生命科学部門	病態治療学 形態機能学
基礎看護学部門	基礎看護学 看護管理学
小児・精神看護学部門	小児看護学 精神看護学
成人・老年看護学部門	成人看護学 老年看護学
地域・公衆衛生看護学部門	地域・公衆衛生看護学
母性看護学・助産学部門	母性看護学・助産学

年間スケジュール

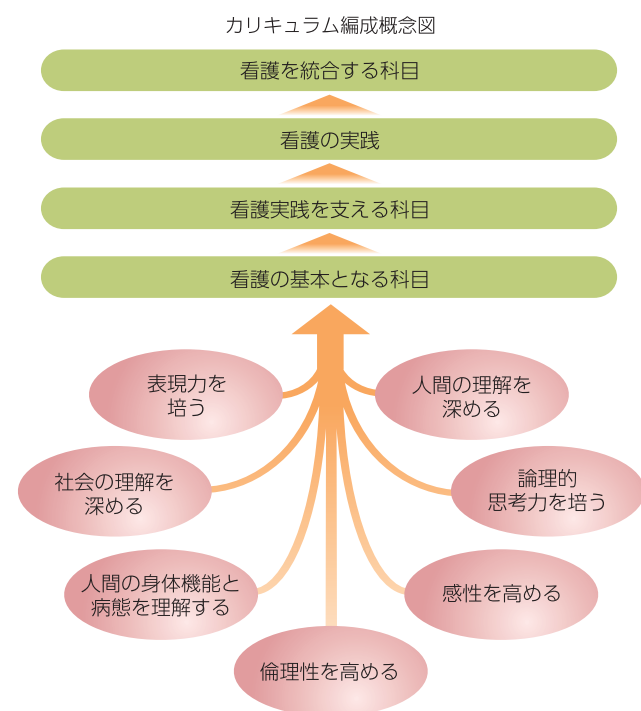
4月初旬	入学式・前期開講
6月18日	開学記念日
7月初旬	オープンキャンパス
7月中旬～8月	前期試験
8月初旬～9月初旬	夏季休業
10月初旬	後期開講
10月中旬	光翔祭
10月下旬	解剖慰霊祭
11月下旬	推薦入試
12月下旬～1月中旬	冬季休業
1月中旬	大学入学共通テスト
2月中旬～	後期試験
2月下旬	一般入試(前期)
3月中旬	一般入試(後期)
3月下旬	学位記授与式・春季休業

カリキュラムの特徴

看護を統合的に学べる科目群

看護学部では、看護の対象となる人間の理解を深めるため、心理学や生活と科学、人間関係論などについて学びます。また、倫理性を高める生命倫理、人間の身体機能と病態を理解するための病態栄養学、薬物治療学のほか、表現力を培うための外国語や、社会の理解を深めるための医療と法、感性を高めるための美術などの一般教養も学びます。

看護の基本となる科目や看護実践を支える科目、看護の実践、看護を統合する科目と段階を踏んで学び、実践能力を確実に身につけます。



文部科学省により看護学教育モデル・コア・カリキュラムが公表されたこと等を受け、本学においても学士課程の看護教育水準の向上に努める必要があることから教育課程の見直しを行いました。

新カリキュラムの特徴は、医学部や保健科学部との連携も見据え多職種連携に必要なチーム医療について学ぶ科目、及び今後さらに重要性が増す地域包括ケアを学ぶ講義・実習を新設し、加えて、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故という複合災害を経験した県立大学として災害看護学を充実させました。

本学部が目指す教育は、看護の対象となる人々がどのような健康状態にあっても、またどのような発達段階にあっても、その健康状態を対象となる人々の生活との関係の中で捉え、自らの知識と技術を統合し、必要な看護ケアを提供できる実践能力をもった学生の育成です。また、保健医療福祉に関わる様々な専門職者と協働し、最終的には看護の対象となる人々自らが健康問題の解決を図り、健康状態を高めていけるように援助できる、創造性豊かな人材の育成に重点を置いています。

統合実習について

4年次の前期には、1～3年次に履修した講義や演習、実習等の学びをふまえて、自分の関心のある領域や対象を定め、自分の看護

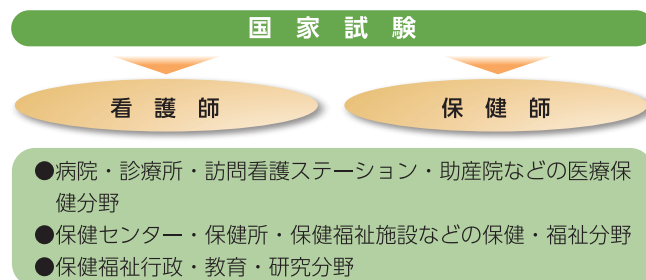
実践上の課題を見出し、その課題の解決・目標達成に向けて、既習の知識・技術・態度を統合した看護実践を行う実習があります。実習前には、担当教員との面接やゼミナールを通して、自分自身の課題をさらに明確化し、課題に関連した文献を系統的に検討します。その上で、課題に沿ってどのような実習ができるか検討し、実習計画を立案して、実習に臨みます。9月の実習報告会では、他の学生の意見や、実習指導者、教員からの助言を受けて、学びを整理しなおし、自身の看護実践能力の向上につなげています。

卒業後の資格と進路

多彩な領域で看護を実践

看護学部卒業後は、看護師の国家試験受験資格を得ることができます。また、必要な科目を選択履修することにより、保健師の国家試験受験資格も得られます。看護専門職者の活躍する場は、病院だけではなく、さまざまな分野へと広がりを見せています。看護学部卒業後の進路としては、病院や診療所などの医療分野や、保健所・保健センター・保健施設などの保健・福祉分野、さらには、行政や教育・研究分野など、幅広い領域で能力を発揮することができます。

卒業生のなかには、医療機関等に勤務しながら本学大学院看護学研究科において学ぶ方もいます。



看護学部トピックス

看護学部教員による研究会一覧

名称(代表者、または連絡先)	会員(人数)	活動
研究会オープン・マインド (通称なすの会) (丸山 育子)	看護職者	県内看護職者の関心あるテーマをとりあげ、講演会などを開催、地域での健康活動
セルフケア事例検討会 (大川 貴子)	医療・保健・福祉職・学生(40)	セルフケア理論を基盤に、臨地(病院・訪問看護等)での困難事例を検討
精神看護学セミナー (大川 貴子)	医療・保健・福祉職・学生(50)	精神看護に関する研修会(講演・シンポジウム等)
NIRF プロジェクト (森 努)	医学・看護学・理学系の研究者と学生、海外の研究者(50)	細胞周期制御因子 NIRF と、癌などヒト疾患との関連性を検討
ふくしまクリティカルケア看護研究会 (菅野 久美)	看護職者および学生(24)	クリティカルケアに関する情報交換や海外文献の抄読会を開催
公衆衛生看護学研究会 (高橋 香子)	保健師(30)	地域の健康づくりや保健師活動に関する情報交換や学習会等

看護学部部門 (分野・領域)

生命科学部門

Department of Human Life Sciences



病態治療・機能形態学

部門長(教授) 太田 昌一郎 OHTA Shoichiro

ヒトのからだの構造から病気の診断、治療の話題まで幅広く学部教育を中心に行っております。1年次の人体解剖生理学では解剖見学実習を行います。ご献体を事前学習の上観察して頂いております。2年次では臨床、そして臨地実習への架け橋となる授業を展開しております。研究では病気の治療の糸口となる遺伝子の検索を行っております。



看護生命科学

教授 関亦 明子 SEKIMATA Akiko

看護生命科学領域では、生命現象の分子的な解明に取り組むとともに、がん支持療法や新規ケアの開発を目指しています。最近では、唾液腺細胞に焦点をあてて、培養法の構築と分化メカニズムの解明、がん治療による唾液腺障害とその予防法の探索を行っています。講義では、看護学の基盤となる生命の基本的な仕組みについての科目を担当します。

基礎看護学部門

Department of Fundamental Nursing



基礎看護学

部門長(教授) 黒田 るみ KURODA Rumi

基礎看護学領域では、看護実践の基盤となるものの見方や考え方、知識・技術・態度について探究しています。慢性期看護、看護学教育、看護理論、パラスポーツ看護など、各教員の得意分野における実践を踏まえ、対象者の望む「より健康的な状態」を共に目指す看護学本来のあり方について、地域の方々と共に追究しています。



看護管理学

准教授 渡邊 美恵子 WATANABE Miekko

「看護管理」は、ケアの対象者に質の高い看護サービスを提供するために、限りある資源(人・ものなど)を最大限に活用して、チームや組織、システムを動かしていく活動であり、「看護管理学」は、看護管理の実践に必要な知識・技術・態度を追求する学問領域です。

組織と人の管理に関する基盤となる理論や、看護管理に必要なヘルスケアに関わる社会状況や制度、戦略的なマネジメントや人材管理などについて学びます。

小児・精神看護学部門

Department of Child Health and Mental Health nursing



小児看護学

部門長(教授) 和田 久美子 WADA Kumiko

小児看護学では、新生児から青年期(思春期)までのさまざまな発達段階と健康段階にある子どもと家族の看護について探求しています。早産児・ハイリスク新生児の家族、急性期にある子どもと家族、慢性期にある子どもと家族、在宅で生活する子どもと家族等さまざまな課題をもつ子どもと家族の看護について実践的な研究課題に取り組んでいます。



精神看護学

准教授 大川 貴子 OHKAWA Takako

精神看護学では、精神の健康問題をもつ人に対するケア方法や、精神の健康を維持増進するための方略について探求しています。精神障害者の方が地域でその人らしい生活を送るための支援、身体的な健康問題により精神の健康レベルが低下した人への支援、災害等により精神的な不調をきたすことに対する予防的な活動など、様々な課題に取り組んでいます。

成人・老年看護学部門

Department of Adult and Gerontological Nursing



成人看護学

教授 菅野 久美 KANNO Kumi

成人看護学は、健康問題をもつ成人とその家族を対象とし、生命危機からの回復と生活機能の維持増進、生活の質の向上を目指した教育・研究に取り組む領域です。クリティカルケア、周術期リハビリテーション、治療期から終末期までを見据えたがん看護、シミュレーション教育など、多様な視点から看護の探究と実践の発展を目指しています。



老年看護学

部門長(教授) 坂本 祐子 SAKAMOTO Yuko

老年看護学は、高齢者の方が“住み慣れた地域”で“その人らしい生活”を営むことができるための看護学を教育・研究しています。人生経験豊かな高齢者の方々の希望や価値観は、千差万別です。高齢者とその家族の方が何を大切に日々暮らしているかを尊び、それを実現・支援するための看護の探求に取り組んでいます。

地域・公衆衛生看護学部門

Department of Community and Public Health Nursing



教授 高橋 香子 TAKAHASHI Kouko

地域で生活する人々の健康およびQOLの向上と、それらを支える地域社会の構築をめざし、人々が所属するコミュニティを基盤とした保健活動・看護活動についての教育・研究を行います。住民との協働や住民の主体的な問題解決支援、個人・家族・集団・組織に対する組織的な支援活動について学びます。



部門長(教授) 難波 貴代 NAMBA Takayo

在宅看護は、医療と生活をつなぐ架け橋です。多職種連携のもと在宅療養者と家族に寄り添い、地域で支える医療の本質を探究します。高齢者虐待における共依存関係に着目した看護ケアプログラムの開発や、訪問看護師のコンピテンシー向上を目指した教育・人材育成モデルの研究を推進しています。

母性看護学・助産学部門

Department of Maternal Nursing and Midwifery



母性看護学

部門長(教授) 山口 咲奈枝 YAMAGUCHI Sanae

母性看護学は、女性のライフサイクルにおける性と生殖に関わる健康の維持・増進に向けた実践科学の領域です。妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期を中心とした女性とその家族やパートナーに対するケアだけではなく、思春期や更年期などのヘルスケア、国際社会における母子保健などを広い視野をもって学びます。



助産学

教授 佐藤 いずみ SATO Izumi

助産師養成コースでは、妊娠・出産・産後ケアに関する専門知識と技術の教育及び研究を行います。妊娠期の健康管理、分娩の介助、新生児のケア、母乳育児の支援、性と生殖に関する健康教育など、幅広い分野を学び、助産実践の質向上を目指した研究を行います。命の誕生を支えるために必要な知識とスキルを身につけ、医療現場や地域で活躍できる専門職を目指します。



保健科学部

School of Health Sciences

保健科学部の教育理念

福島県立医科大学保健科学部は、東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の経験を活かし、高い倫理観と豊かな人間性を備え、地域住民のニーズに応えるとともに、広く社会に貢献する専門医療技術者（理学療法士、作業療法士、診療放射線技師及び臨床検査技師）を養成する。

また、生涯を通じて不断に学び、考え、予想外の事態を乗り越えながら、自らの人生を切り開き、成長していくことのできる

人材を養成する。

このため、学生の視点に立ち、その個性を伸長させるとともに、主体的に多様な人々と協力して仕事のできる資質・能力を身につけさせる教育を体系的に実施する。その際、一人一人の持つ主体性や多様な個性を尊重しながら全ての教育活動において学生の「学びのプロセス」を重視する。

message

メッセージ

地域とともに歩む保健科学部

保健科学部は、東日本大震災後の医療従事者の流出や健康不安の増大といった課題を背景に、令和3（2021）年4月に開設され、今年で6年目を迎えました。

開設以来、私たちの社会は新型コロナウイルス感染症をはじめとする予測困難な出来事に直面し、医療や福祉のあり方が改めて問われる時代となっています。一方で、医療現場では、がんや生活習慣病、精神疾患、発達障がい、さらには高齢者のフレイルや認知症といった多様な健康課題に対する不安が広がっています。こうした中、保健科学部の教育では、専門性の高い知識や技術の習得に加え、多職種との連携、そして地域に根ざした支援の視点がますます重要になっています。

本学部では、理学療法学、作業療法学、診療放射線科学、臨床検査学の各分野において、確かな科学的知見に基づく実践力の育成を図るとともに、目の前の人のところに寄り添える人間性やより良い医療を目指す探究心を大切にしています。

私たちは、社会の変化と真摯に向き合いながら、地域とともに歩み、社会に貢献できる専門医療技術者の育成にこれからも取り組んでまいります。

保健科学部長 五百川 和明



保健科学部の教育目標

1. プロフェッショナルとしての高度な知識と技術を修得し、チーム医療の一員としての役割を果たすことができる人材を育成する。
2. 主体的・創造的に問題を把握・解決できる医療人となるべく、また人としても、常に学び続け、成長することができる人材を育成する。
3. 地域医療、災害医療に関する知識を修得し活かすことができる人材を育成する。

保健科学部の概要



保健科学部では、全国から招聘された臨床経験や教育・研究活動での実績が豊富な教員が教育の中心を担い、専門的知識と技術を教授します。教育機器については、医療機関や研究機関でも導入されている高度な機器を多数備えており、これらを利用した効果的な演習・実習を行うことで卒業後は医療現場に速やかに適応できる人材を養成していきます。

本学部のキャンパスは、JR 福島駅東口から徒歩5分の場所に「福島駅前キャンパス」として新たに整備されました。学生にとって通学の利便性が高く、また、様々な年齢層が行き交う駅前に設置することにより、地域の活性化への貢献も期待されています。

カリキュラムの特徴

保健科学部所属の教員に加えて一部の科目では医学部・看護学部の教員や附属病院職員も授業を担当します。多様な専門性を有する教員陣からの実践的な教育により、医学・医療を広く深く理解した専門医療技術者を養成します。また、4学科合同演習や医学部・看護学部との合同授業など、医療系総合大学ならではの特徴的な授業も行います。これらを通して多職種連携、いわゆるチーム医療の実験を経験することができます。さらに、福島県内唯一の特定機能病院である附属病院を中心に県内の医療機関等のご協力をいただき、幅広く充実した臨床実習が行われます。このような体制の中で、卒業後に県内の医療技術者のリーダーとして活躍できる人材を養成します。

本学部は、東日本大震災及び福島第一原発事故を経験した後に設置された学部であるため、福島県の地域医療や災害医療に関連する科目も多く配置しています。地域医療を担い、健康の面から復興を支える専門医療技術者を養成することもテーマの一つです。学生の視点に立ち、その個性を尊重しながら、専門医療技術者としての知識・技術に加え、主体性と協調性も含めた総合力を身につけるための教育を体系的に実施します。保健科学部は、真に社会のニーズに応えられる人材の養成に重点を置いています。



保健科学部組織

理学療法学科
作業療法学科
診療放射線科学科
臨床検査学科
総合科学（総合科学教育研究センター）

理学療法学科

Department of Physical Therapy

理学療法学科の概要



理学療法士は、病気や障がいのある方が、その人らしい生活を再建するために大変重要な、起きて、立って、歩くといった基本的な動作の改善を、様々な運動や電気・温熱などの物理的手段を用いて促します。その対象は新生児から高齢者まで幅広く、人々の人生を運動機能面から支えるリハビリテーション専門職です。最近では運動機能低下が予想される高齢者の予防対策、メタボリックシンドロームの予防、スポーツ分野でのパフォーマンス向上など、活躍の場が広がっています。

本学科では、福島県で唯一の特定機能病院である附属病院及び地域の医療・介護老人保健施設等との連携の他、医学部・看護学部と連携して教育する体制があります。また、現場での実習を早期から段階的に配置し、「臨床実践能力」を重視したカリキュラム構成になっています。このような環境の中で、保健・医療・福祉に関する理学療法の特長と科学の両面で理学療法の発展に貢献するリーダーとなれる人材を育成します。

理学療法学科のカリキュラム

理学療法学科では、1年次に解剖学、生物学、運動学など、医学やリハビリテーション、理学療法の基礎を学び、医療人、社会人としての教養と倫理観を学びます。学年が上がるにつれて、基礎医学から臨床医学へとより専門的な内容を学ぶ体系となっており、2年次には、運動器障害、神経障害、地域などの領域別理学療法の講義や演習の他、整形外科、脳・神経内科学など、関連する医学の基

本を学び、3年次には、演習や実習を通じて応用的な理学療法を学びます。4年次にはそれらをさらに発展させた理学療法発展領域論を学び、卒業研究も行います。また、実習では、1年次に短期間の見学実習、2年次には附属病院等で学内教員の指導の下で行う実習を経て、3年次からは学外の病院・施設での評価実習・総合実習などを行っています。

さらに、上記の理学療法専門教育に加え、医学部・看護学部との多職種連携教育を通して、理学療法士がチーム医療の中で、専門性を発揮しつつ、多職種協働する能力を身につけます。加えて、理学療法士が地域医療や災害医療の中でどのような役割を果たせるかについて学ぶ科目を開講し、地域と災害に関する様々な課題への取り組みを能動的に行うことができる素地を養います。

卒業後の資格と進路

卒業後には理学療法士の国家試験受験資格が得られます。近年、社会的ニーズに対応して理学療法士の職域はますます拡大しており、理学療法士が活躍する場は保健・医療・介護・福祉領域をはじめ、産業領域における健康管理などがあります。卒業後の進路としては、医療施設、介護老人保健施設、地域包括支援センター、通所・訪問リハビリテーション事業所、教育・研究施設、スポーツ分野、行政関係施設、医療福祉機器企業への就職や大学院への進学などが挙げられます。



開講科目

1年

リハビリテーション・理学療法の基礎

- 解剖学
- 生理学
- 運動学
- 医学概論
- リハビリテーション概論
- 臨床心理学
- 理学療法概論
- 臨床実習Ⅰ など

2年

領域別理学療法と関連医学

- 内科学 ○整形外科
- 脳・神経内科学 ○精神医学
- 老年学 ○リハビリテーション医学
- 理学療法評価学 / 演習
- 運動療法学 / 演習 ○物理療法学
- 運動器障害・神経障害・地域理学療法
- 日常生活動作分析援助学
- 臨床実習Ⅱ など

3年

応用的な理学療法学

- 運動器障害・神経障害・地域理学療法演習
- 日常生活動作分析援助学演習
- 内部障害・発達障害・予防・スポーツ・がん・痛みの理学療法学
- 国際理学療法論
- 理学療法管理学
- 理学療法研究法演習
- 義肢装具学 / 演習
- 臨床実習Ⅲ・Ⅳ など

4年

発展的な理学療法学

- 理学療法発展領域論
- 卒業研究
- 地域理学療法実習
- 臨床実習Ⅴ など

作業療法学科

Department of Occupational Therapy

作業療法学科の概要



作業療法士は、「こころ」や「からだ」の様々な障がいや不調によって生活が困難になった人が、その人らしい生活を送ることができるように支援するリハビリテーション専門職です。作業療法において「作業」とは、対象となる人々にとって目的や価値を持つ生活行為（日常生活活動、家事、仕事、趣味、遊び、対人交流など人の日常生活に関わる全ての諸活動）を指します。すなわち作業療法とは、対象者が「できるようになりたい」活動に焦点を当てた治療や指導および援助であり、作業療法士は種々の活動の治療的活用や動作練習、福祉用具の導入や環境の調整などを行います。本学科では作業療法の高度な知識と技術、そして豊かな人間性を備えた次世代の作業療法士のリーダーを育成します。

作業療法学科のカリキュラム

作業療法学を意欲的に学習し、確かな専門性を修得できるよう、作業療法専門科目を早期から開講し、年次進行に合わせて段階的に専門性を高めていくカリキュラムを構成しています。1年次は教養科目に加え、解剖学や生理学などの基礎医学、リハビリテーション概論、更に、作業療法学概論や基礎作業学実習など、リハビリテーションと作業療法学の基礎となる科目を学修します。基礎作業学実習では陶芸や調理、革細工などの実習を行い、種々の作業活動が心身に与える影響を学びます。またEarly exposureとして臨床実習を1年次から開始し、作業療法の臨床現場の見学を通して、対象者の生活や作業療法への理解、医療人としての自覚を早期から育みま

す。2年次は作業療法に関連する臨床医学を学ぶとともに、身体障害、精神障害、発達障害、老年期障害および高次脳機能障害の領域別作業療法評価学・治療学や日常生活活動学を学びます。授業で学



んだ知識と技術を早期から臨床の場で実践するため、教員指導のもと附属病院を中心とした県内施設で実習を行い、検査や支援技術の基礎を身につけます。3年次は、領域別作業療法学演習や生活環境整備学、地域作業療法学など、応用的作業療法学について学ぶとともに、8週間の総合的な臨床実習を行います。また学生一人ひとりが関心のある領域について深く学ぶことができるよう、選択科目として認知症・介護予防作業療法論や身体障害作業療法学特論を開講しています。4年次では作業療法の発展領域や研究について学びます。子どもから高齢者まで幅広い世代を対象とした作業療法を教授する教員陣の指導のもと、日々発展する作業療分野の先端的知識を学びつつ、今後の新たな作業療法を創造するための研究力を養います。

また上記の作業療法専門教育に加え、医学部・看護学部との多職種連携教育を通して、作業療法士がチーム医療の中で、専門性を発揮しつつ、多職種と協働する能力を身につけます。加えて、作業療法士が地域医療や災害医療の中でどのような役割を果たせるかについて学ぶ科目を開講し、地域と災害に関する様々な課題への取り組みを能動的に行うことができる素地を養います。

卒業後の資格と進路

卒業時には作業療法士の国家試験受験資格が得られます。近年、社会的ニーズに対応して作業療法士の職域は拡大しており、作業療法士が活躍する場は保健・医療・介護・福祉領域をはじめ、教育や職業領域など、ますます広がっています。卒業後の進路としては、医療施設（一般病院、精神科病院など）、介護老人保健施設、通所・訪問リハビリテーション事業所、児童福祉施設、特別支援学校、地域包括支援センター、市町村保健センター、地域障害者職業センター、教育・研究施設、矯正施設（刑務所など）への就職や大学院への進学が挙げられます。

開講科目

1年

リハビリテーション・作業療法学の基礎

- 解剖学
- 生理学
- 運動学
- 作業療法学概論
- 臨床実習Ⅰ
- 基礎作業学実習Ⅰ・Ⅱ など

2年

領域別作業療法学と関連医学

- 整形外科学
- 精神医学
- 脳・神経内科学
- リハビリテーション医学
- 領域別作業療法学
- 領域別作業療法評価学演習
- 臨床実習Ⅱ・Ⅲ など

3年

応用的な作業療法学

- 領域別作業療法学演習
- 生活環境整備学演習
- 地域作業療法学 / 演習
- 地域生活・社会参加支援論
- 臨床実習Ⅳ など

4年

発展的な作業療法学

- 作業療法総合演習
- 作業療法発展領域論
- 臨床実習Ⅴ
- 卒業研究 など

診療放射線科学科

Department of Radiological Sciences

診療放射線科学科の概要



診療放射線科学科は、福島県において初めて開設された診療放射線技師を養成する学科です。診療放射線技師は、理工情報学や医学の高度な知識や技術を活かし、放射線や電波、超音波等を用いて診断や治療技術を提供する医療技術者です。400床程度の病院の放射線部門と同程度の画像診断機器類や放射線計測器などの実験実習機器を設置した福島駅前キャンパス、及び附属病院のある光が丘キャンパスにて知的好奇心を呼び起こす講義や高度な技術に関する実験・実習を行います。科学的探究心と創造性を備え、高度な専門知識と技術を駆使して地域医療や災害医療などに能動的に貢献できる人材を育成します。

診療放射線科学科のカリキュラム

診療放射線科学科では、4年間で診療放射線科学を包括的に学び、診療放射線技師として十分な能力が身につくカリキュラムを開講しています。診療放射線科学の内容としては、画像診断、核医学、放射線治療、放射線管理や医療情報管理等があります。これらを学ぶための専門科目の区分として診療画像技術学（診療画像機器工学、診療画像検査技術学等）、核医学検査技術科学（核医学機器工学、核医学検査技術学等）、放射線治療技術学（放射線治療機器工学、放射線治療技術学等）、医用画像情報学（医療情報学、医療画像工学等）、画像診断・技術学（画像医学、実践臨床画像学等）、放射線総合科目（診療放射線科学概論、特別演習等）、放射線安全管理学（放射線

関係法規、放射線安全管理学等）、医療安全管理学（医療安全管理学、臨床技術基礎演習）、臨床実習、そして卒業研究があり、早いものは1年次より学びを開始します。また、専門基礎科目区分として人体の構造と機能及び疾病の成り立ちを学ぶ科目（解剖学、生理学、医学概論、疫学・公衆衛生学、薬理学、画像解剖学等）や保健医療福祉における理工学的基礎並びに放射線の科学及び技術（情報処理、医用工学、放射線基礎科学、放射線計測学等）の科目を学びます。また、教養教育科目として初年次科目、自然科学系科目、人文・社会科学系科目、外国語科目を開講し、教養あふれる人間性豊かな人材の輩出を目指します。福島で診療放射線技師となるために、福島の経験から学ぶ科目（環境と放射線、危機管理学、放射線災害管理学等）や、医療系総合大学の強みを活かしたチーム医療等の科目も開講しています。これらの科目を順次受講することにより、広範囲の内容を体系的に身につけることができますように構成されています。



卒業後の資格と進路

本学科を卒業すると、診療放射線技師国家試験の受験資格を得て、国家試験に合格して診療放射線技師の免許を得ることができます。本免許取得後、申請によりエックス線作業主任者とガンマ線透過写真撮影作業主任者という国家資格を得ることができます。また、放射線管理に関する資格である第1種放射線取扱主任者や、情報処理系等の国家試験にチャレンジする人もいます。

一般的には、多くの卒業生は診療放射線技師国家試験に合格して医療施設に就職します。診療放射線技師は高度な医療機器を扱うことが多いため、比較的大規模な医療施設を目指す学生が多いです。また、興味や適性に応じてクリニックや検診施設、医療・研究機器関連企業・商社や医療情報関連企業、放射線を取り扱う団体や企業等への診療放射線技師の資格を活かした就職を目指すこともできます。近年は、大学院への進学を希望する学生も増えており、2年間の修士課程（博士前期課程）に進学後、教育・研究施設などでの就職を目指して博士後期課程に進学し、博士号の取得を目指す人もいます。

開講科目

1年

診療放射線科学の基礎

- 物理学
- 化学
- 生物学
- 数学
- 解剖学
- 生命倫理学
- 医用工学
- 放射線基礎科学
- 診療放射線科学概論
- 診療放射線科学総合実習 など

2年

専門基礎科目

- 放射線計測学
- 画像解剖学
- 臨床医学概論
- 医療画像工学
- 診療画像機器工学
- 核医学機器工学
- 放射線治療機器工学 など

3年

専門科目

- 診療画像検査技術学
- 核医学検査技術学
- 放射線治療技術学
- 放射線災害管理学
- 医療情報学 など

4年

発展科目

- 実践臨床画像学
- 先端核医学検査技術学
- 先端放射線治療技術学
- 臨床実習
- 卒業研究 など

臨床検査学科

Department of Clinical Laboratory Sciences

臨床検査学科の概要



現代の医学、医療の進歩には臨床検査の技術革新が大きく寄与しています。今や臨床検査なしには日常診療は成り立ちません。臨床検査学科では臨床検査のスペシャリストである臨床検査技師を養成します。臨床検査技師の仕事は多様化、専門化し、臨床検査技師は病院などの医療施設だけでなく、検査センター、保健所・衛生研究所、医薬関連企業などで幅広く活躍しています。臨床検査学科では高度な医療を支える知識と技術を修得することはもちろん、医療現場で求められる「チーム医療」を実践的に学び、さらには4年間の教育を通して研究マインドを涵養し、医療分野における指導的立場に立てる人材を育成します。

臨床検査学科のカリキュラム

1年次には教養教育に加え、生化学、解剖学、生理学といった医学の基礎分野を学びます。2年次から3年次にかけて基礎分野を土台として臨床検査学を基礎から専門へ段階的に学んでいきます。それぞれの科目は、講義と実習が系統的に一体化された形で学修できるようカリキュラムを組んでいます。3年次の臨床病態学では臨床所見と臨床検査から診断に至る過程、治療方針や治療後の経過と臨床検査の関わりについて臓器系統別に学びます。また、これから益々需要が増える超音波検査やがんゲノム医療にも対応できる教育体制を整えました。がんゲノム医療の分野においては遺伝子パネル検査が保険診療下で実施されることになりました。本学附属病院は福島県で唯一のがんゲノム医療連携病院です。3年次の分子生物学Ⅱ

では、がんゲノム医療について基礎から応用まで高度な実習も含めて学び、臨床面の教育は医学部の腫瘍内科、附属病院の臨床腫瘍センター、がんゲノム医療診療部の全面協力を得て行う予定です。



また、2年次から4年次にかけて選択科目として細胞検査士養成コースを開講します。細胞検査士は顕微鏡を使用して人体から採取された細胞の中からわずかな悪性の細胞を探し出す仕事を行います。臨床検査技師として働いてから試験を受けて資格を得るのが一般的ですが、高度の技能を要求されるため試験は難しく合格率は高くありません。本学のコースを修了した学生は卒業前に資格取得のための受験が可能となり、合格すると臨床検査技師と細胞検査士の二つの資格が得られることになります。

4年次には総合演習、臨床実習や卒業研究を通して臨牀的な実践力や科学的な思考力を養います。特に総合演習では臨床検査技師教育法の一つであるRCPC (Reversed Clinicopathological Conference) を集中的に行います。これは症状や診察所見なしに臨床検査データのみから症例の病態、症状を推測するというもので、検査結果の解釈を学ぶ上で非常に優れた教育手法といわれています。臨床実習は主に本学附属病院と近隣の大原総合病院で行います。卒業研究では生命科学研究の基礎を修練するとともに、臨床検査の現場での問題解決能力や分析力を養います。またインターンシップも導入し医療の高度専門化に対応できる即戦力となる人材育成を目指します。

卒業後の資格と進路

卒業後は臨床検査技師の国家試験受験資格を得られます。臨床検査技師の国家資格を活かして病院、診療所などの医療機関で臨床検査技師として活躍する以外にも、保健所、検査企業、製薬企業、医療機器企業、大学の研究室などからも臨床検査技師の知識と技術が求められています。こうした様々な医療分野で活躍できるよう細胞検査士、健康食品管理士の受験資格を在学中に取得できるコースを設置するとともに、所定の単位を取得すれば遺伝子分析科学認定士(初級)、中級・上級バイオ技術者の受験資格、さらに食品衛生管理者や食品衛生監視員の資格(任用資格)も得ることができるよう教育カリキュラムを構成しました。また大学院に進学し、さらに専門性の高い研究を続ける道もあります。

開講科目

1年

医療専門職になるための基礎

- 組織学・実習 ○基礎生化学
- 医用工学 ○微生物学総論
- 疫学・公衆衛生学
- 解剖学概論・各論・演習
- 生理学・実習
- 医学概論 ○生命倫理学
- チーム医療 (概論)
- 臨床技術基礎演習 など

2年

臨床検査学の基礎・専門

- 病理学総論・実習 ○病態生化学
- 免疫学 ○応用工学実験
- 衛生学演習 ○医療統計学
- 臨床検査学総論・実習
- 臨床化学検査学
- 血液検査学・実習
- 微生物検査学・実習
- 分子生物学
- 臨床生理検査学 など

3年

臨床検査学の専門・応用

- 臨床病態学
- 病理検査学・実習
- 免疫・輸血検査学・実習
- 臨床生理検査学・実習
- 医療安全管理学
- 分子生物学Ⅱ など

4年

臨床検査学の実践

- 臨床実習
- 総合演習
- 卒業研究
- チーム医療 (演習) など

保健科学部専門分野

理学療法学科

Department of Physical Therapy



学科長(教授) 柴 喜崇

SHIBA Yoshitaka

理学療法学科では、周産期から人生の最終段階までを対象に、地域医療の発展に貢献する実践的・科学的な研究を行っています。福島県で唯一の特定機能病院である附属病院や他学科・学部と連携し、基礎・臨床医学を基盤とした疾病・障害に応じた評価・介入法の検討、地域包括ケア、災害時リハビリテーションなど多様な分野で研究を展開。科学的思考と倫理観を備えた理学療法士の育成を目指します。

作業療法学科

Department of Occupational Therapy



学科長(教授) 倉澤 茂樹

KURASAWA Shigeki

人は作業的存在であり、日々の作業は健康や生活の豊かさと深く関係しています。

人の「生活機能」は「心身機能」と「活動・参加」を基盤とし、年齢・性別や人種などの「個人因子」、文化風習や社会制度などの「環境因子」にも影響されます。つまり、人の健康は様々な要因によって脅かされてしまう不安定で脆弱なものなのです。したがって、治療や支援技術は多面的な観点で計画され、医療機関だけでなく、地域社会やコミュニティの中で実装されなければなりません。

脳卒中や認知症患者などの心身機能と生活機能への効果的な治療および支援技術の開発、高齢者の社会参加を妨げる関連要因の検討、発達の困難さを抱える児童生徒に対する学校作業療法の効果など…作業療法学科の教員は様々な領域で研究をすすめています。

診療放射線科学科

Department of Radiological Sciences



学科長(教授) 加藤 貴弘

KATO Takahiro

診療放射線科学科では、専任教員15名が各々の専門性に応じて応用医学物理学領域、医用画像科学領域、核医学科学領域、放射線治療科学領域に分かれ、卒業研究等の教育及び研究を行います。応用医学物理学領域では医用画像工学、医療放射線計測、放射線災害医療技術、放射線防護・情報の各研究室、医用画像科学領域では統合医用画像、磁気共鳴画像、基盤撮影技術の各研究室、核医学科学領域ではセラノスティック薬剤、核医学技術の各研究室、そして放射線治療科学領域では放射線治療技術、放射線治療の各研究室を設け、福島駅前キャンパスや附属病院等の学内及び学外の連携施設等の設備を用いて、国内外の研究者と共に診療放射線科学に関連する様々な研究を行います。

臨床検査学科

Department of Clinical Laboratory Sciences



学科長(教授) 豊川 真弘

TOYOKAWA Masahiro

臨床検査学科では臨床検査に関する基礎研究から臨床研究まで各教員の専門領域に基づいた研究活動を行っています。血小板活性化マーカーや脳腫瘍の体液診断マーカーについての研究は将来の実臨床での応用も視野に医学部との共同研究が進行中です。また生理機能検査やバイオマーカーを活用した心臓病、生活習慣病の治療効果に関する研究などの臨床研究も医学部と協力しながら幅広く行われています。さらには、薬剤耐性菌の耐性機序の研究、病原微生物の迅速診断法の開発、がん関連分子の機能制御機構の開発、輸血・移植免疫に関する研究、麹菌などの発酵食品の研究など、臨床検査の発展を見据えた多分野にわたる研究が行われています。

保健科学部トピックス

IAEA(国際原子力機関)による特別講義

福島駅前キャンパス1F多目的ホールにて、保健科学部1年生および保健科学研究科修士課程学生を対象としたIAEA職員による特別講義が開催されました。内容は「東京電力(TEPCO)第一原子力発電所事故後の復興に向けた福島県とIAEAの協力」「放射線、モニタリング及び測定的基础」「放射性セシウム:福島県の陸上及び水域環境における挙動と環境回復」「放射性廃棄物管理」と90分にわたる日本語同時通訳を介した講義が行われ、教職員含め200名近くが受講しました。9名の学部生と1名の大学院生が積極的に質疑応答を行って知見を広めるなど、参加者にとって貴重な経験となり、これからの学びへの大きな糧となりました。



IAEA特別講義の様子 (福島駅前キャンパス1F多目的ホール)



講義後の質疑応答

専門医療技術職体験会

福島県教育委員会と本学の広報コミュニケーション室共催による「専門医療技術職体験会」が開催されました。本体験会は「県立高等学校普通科における特色あるコース制」の「保健・医療コース」導入校を対象としたイベントであり、高校生44名と保護者が参加しました。

当日は理学療法、作業療法、診療放射線科学、臨床検査学の4つの分野に分かれ、保健科学部の教員と学部生が参加者をサポートし、実習に使用する器具や高度な医療機器を用いた体験を行いました。





別科助産学専攻

Division of Midwifery

別科助産学専攻の教育理念

1. リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関わる健康生活を支援するために、周産期を中心とした女性と家族におけるライフサイクル全般で活躍できる専門知識、判断力、実践力を有する助産師を養成する。
2. いのちにかかわることに責任を持ち、豊かな人間性とケアリング能力を有する助産師を養成する。

message

メッセージ

女性の“生きる”力を支援する

本学では、より高度な専門知識と技術を備えた質の高い助産師を養成するため、令和5（2023）年4月に別科助産学専攻を開設しました。

助産師は、女性のライフサイクル全般にわたり独自の判断で助産ケアを行います。女性や母親たちが最も助産師を必要とし、助産師としてもその専門性を最も発揮できるのが分娩を中心としたマタニティサイクルです。そのため別科では、臨床助産実践能力として必要な知識と、助産診断力および助産技術力を身につけます。

また、周産期を中心とした女性と家族におけるライフサイクル全般において、女性と家族に寄り添い、そのいのちに向きあうことに責任を持ち、その人を尊重し生活を支えるケアについても学びを深めていきます。

「いのち」にかかわる助産師には、人間に対する深い愛情と高い倫理観が求められます。助産師として自己研鑽し、専門的自律能力を備え、未来を担う子どもたちを安心して産み育て、女性として「生きる」ことを支援できる助産師を養成していきます。

別科長 高橋 香子



別科助産学専攻の教育目標

- 1.いのちを尊び、人に寄り添い、対象の主体性を尊重できる倫理的感応力を修得できる。
- 2.科学的根拠に基づいた専門的知識と技術を修得し、安全・安心で有効なマタニティケア能力を修得できる。
- 3.女性の生涯を通じた支援者として、その人の持つ力が最大限発揮できるよう支援するためのウィメンズヘルスケア能力を修得できる。
- 4.周産期医療チームの一員として、助産師の専門性を発揮し、多職種多機関と連携・協働して福島の母子保健・医療・福祉の向上・発展に貢献できる助産実践能力を修得できる。
- 5.クリティカルな思考で助産学を探究し、助産師として自己研鑽する専門的自律能力を修得できる。

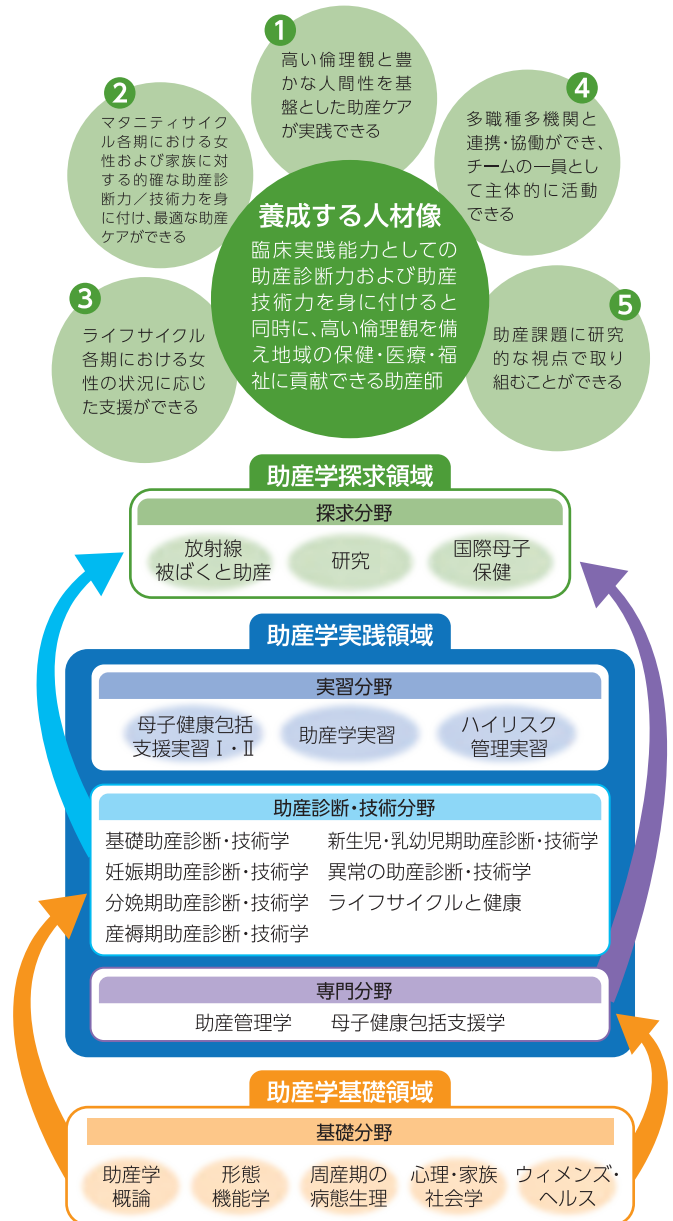
別科助産学専攻の概要

別科助産学専攻は、東日本大震災と福島第一原発事故からの復興を進める上で、将来を担う子どもたちを安心して生み育てられる福島県にすることを目的に、高度な知識と技術を身につけた質の高い助産師の養成をするために令和5年4月に新たに開設しました。臨床経験や教育経験豊かな専任教員による質の高い教育を受けることができます。別科助産学専攻の修学期間は1年間で助産師国家試験受験資格が取得でき、即戦力として地域に根差した助産師活動をし、その核となる母子保健に携わる重要な役割を担い、活躍できる助産師を目指します。また、自律した助産ケアを展開することで、対象者の満足度を高めるのみならず、助産師自身の質の向上にも貢献でき、さらには、クリティカルな思考を発揮し、医療現場の問題提起並びにその課題改善に繋がる関わりができる人材を養成します。

カリキュラムの特徴

福島県では復興を前へ進める上で、将来を担う子どもたちを安心して生み育てるために、母子保健に関わる助産師の育成を求めている。本学別科助産学専攻は、「臨床実践能力としての助産診断力および助産技術力を身に付けると同時に、倫理観を備え地域の保健・医療・福祉に貢献できる助産師」を養成する人材像とし、共に学び共に育ち、助産師としての個々のアイデンティティの形成を促すために、教育課程を助産学基礎領域、助産学実践領域、助産学探求領域の3領域で構成しました。

カリキュラムツリー





大学院

医学研究科・看護学研究科・
保健科学研究科
Graduate School



毎年7月に開催する
大学院研究発表会・
サマーポスターセッション

大学院の概要

本学大学院は、医療の発展に自立して寄与することができる研究者及び専門職員を育成するとともに、新しい医学・看護学の創造を行うことを目的とします。

医学研究科では、研究者を育成する「医学専攻」(博士課程)と、医学以外の専門分野を学んだ学部卒業生を対象とする「医科学専攻」(修士課程)、看護師・自治体職員などの社会人を対象とする「災害・被ばく医療科学共同専攻」(修士課程)を設けています。

看護学研究科博士前期課程では、看護援助方法の開発と研究を担う看護専門職や、高度な専門知識・技術と卓越した実践能力をもつ看護専門職(専門看護師)、助産師を育成します。また博士後期課程では研究者・教育者、看護実践指導者として活躍する人材の育成をめざしています。

保健科学研究科では、研究分野における高度な専門性に基づき、活動の場において修得した知識および科学的思考を実践・還元できる能力を有する、主に福島県内で活躍する教育・研究者および臨床専門職者の育成をめざしています。

大学院の構成

専攻	学習コース	
医学研究科	医学専攻 (博士課程) 定員 60 名	高度医学研究者コース → 学位[博士(医学)] 専門医研究者コース → (専門医+)学位[博士(医学)]
	医科学専攻 (修士課程) 定員 10 名	総合医科学プログラム 社会科学プログラム → 学位[修士(医科学)]
	災害・被ばく 医療科学共同専攻 (修士課程) 定員 10 名	医科学コース → 学位[修士(医科学)] 保健看護学コース → 学位[修士(看護学)]
	看護学研究科	研究コース → 学位[修士(看護学)] CNSコース → (専門看護師+)学位[修士(看護学)] 助産師コース → (助産師国家試験受験資格+)学位[修士(助産学)] 学位[博士(看護学)]
保健科学研究科	保健科学専攻 (修士課程) 定員 16 名	学位[修士(保健科学)]

医学研究科の教育目標

- 1 医学研究を推し進めた新たな医学の創造を目指す研究者を育成する。
- 2 研究の方法論を正しく身につけた専門性の高い臨床医を育成する。
- 3 医学・医療に関連した多彩な分野で活躍できる研究者や高度な専門職として活躍する人材を育成する。

医学専攻(博士課程)の概要 修業年数4年

本専攻では、医学部を卒業した学生を中心とし、医学部以外からの学生にも広く門戸を開放して医学を究めることを目的とすることから、専攻の名称を「医学専攻」(Graduate School of Medicine)とし、学位に付与する専攻分野も「医学」とします。

本博士課程に入学する学生は、入学時点で、高度医学研究者コースと専門医研究者コースのいずれかを選択します。

前者のコースは、医学研究者になることを目標とし、将来の医学を支え、新たな医学の創造ができるような人材の育成を目的とします。後者のコースでは、卒後臨床研修を終え、専門医研修を受ける学生を主な対象として、高度で専門的な臨床能力と、医療の現場から研究する能力を兼ね備えた臨床医を育成することを目的とし、そのために必要な科目を整備しています。

医学専攻 教育課程の特徴

2つの教育課程では共通基盤教育として、高度医学研究者コースでは、講義科目「医学研究概論」を必修とし、実験を主体とする「医科学研究入門」を基本的に履修することとします。専門医研究者コースでは、「総合人間学特論」が必修となります。また、平成25年度から医学研究を行う上での基礎的知識を身につけることができる「研究デザイン学」を開講しています。

それぞれのコースにおいては、これらの共通基盤教育科目を履修することによって医学研究における素養を身につけ、その後の研究活動の基盤とします。

専攻する内容としては、講義科目である「医学特論」と「医学特論演習」に相当する専門分野の中から履修します。また、専門分野と関連する専攻外の分野を「医学特論」と「医学特論演習」の中から選択することで、専門研究の拡充や展開を促し、広い視野からの問題解決能力の育成を行うようにしています。さらに、医学全体の動向を知るために、各方面での先端的な研究内容を学習する「大学院セミナー」の履修は、いずれのコースにおいても必修となります。

このような医学専攻における教育の最終的な目標として、学位論文の作成を行う「研究指導」を、各専攻分野において教授します。

医科学専攻(修士課程)の概要 修業年数2年

本専攻では、医学以外を専攻した多様な知識的背景や発想を持つ人々に、集中的に医科学を教授し、学際的な知識を統合させることによって、医学・医療に関連した多彩な分野で活躍できる研究者、技術者や専門職として活躍できる人材の育成を目指します。

修士課程修了後には、博士課程(4年制、優れた研究業績をあげた者については3年間で修了可能)へ進学し、さらに、高いレベルの専門的知識や研究方法を修学し、研究者としてのレベルを向上することを推奨しています。

医科学専攻 教育課程の特徴

本専攻では、医師を除く、医学系教育を修めた者以外の多くの人材に、短い時間で集中的に医科学を修学させることとなります。このため、臨床系医学についても触れますが、医学を科学的視点から捉えて、基礎医学、社会医学を教授する科目を中心に教育課程を編成しています。

医科学の知識・技術の習得は、講義のみでは困難なために、実験を組み合わせた科目を設けています。平成29年度より2つのプログラム(総合医科学プログラム・社会科学プログラム)に変更し、それらの学術的な知識を統合させ、医学・医療に関連した多彩な分野で活躍できる研究者・教育者と高度な専門職として活躍する人材を育成しています。

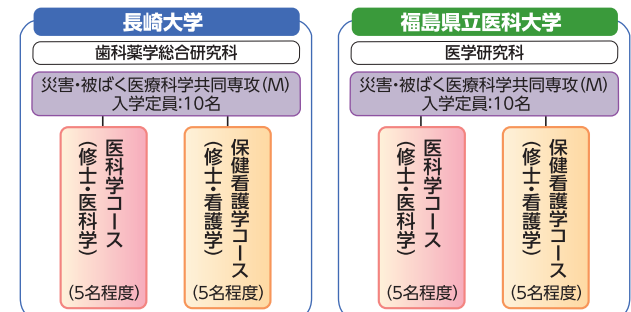
災害・被ばく医療科学共同専攻(修士課程)の概要 修業年数2年

2011年3月の東日本大震災・津波とそれに引き続く東京電力福島第一原子力発電所事故のような未曾有の複合型広域災害を契機に、緊急時から復興期において長期的にわたって健康被害に適切に対応できる人材が絶対的に不足していることが明らかになりました。

こうした状況を踏まえ、平成28年度から長崎大学と共同で「災害・被ばく医療科学共同専攻」を設置しました。

本専攻は、看護師・自治体職員などの社会人を主な対象とした2つのコースを設け、災害・被ばく医療科学分野全般を俯瞰できる幅広い知識の習得により、災害時に活躍できる素養を持った専門家や長期にわたって健康被害に適切に対応できる人材の育成を目指します。

2大学共同大学院 災害・被ばく医療科学共同専攻(修士課程)



災害・被ばく医療科学共同専攻 教育課程の特徴

本専攻の学生は医科学・保健看護学の2コースに分かれ「基礎放射線医科学」「救急医学概論」などの基礎科目と「災害医学特論」「災害公衆衛生看護学」などの各コースに応じた専門科目、「救急医学実習」などの実習を組み合わせ、座学から現場で判断できる能力までを幅広く学ぶこともできます。

また、令和2年度からはいわき市の常磐病院内にサテライトキャンパスを設置し、遠方からの履修者に対し、入学しやすい環境を整えています。

共同大学院 講座

災害被ばく医療科学共同専攻 保健看護学コース 災害危機管理看護学講座 Department of Disaster Crisis Management Nursing



講座主任(教授) 橋本 真由美 HASHIMOTO Mayumi

災害時の健康危機において、看護の視点から健康管理とケア継続を探究します。多職種が関与する中で、優先順位や役割分担、資源配分の構造を明らかにし、実践知の体系化やモデル化を通して汎用的な知見の創出を目指して研究を行います。災害時の保健医療実践を科学的に捉え、判断と調整を担う高度専門職を育成します。

災害・被ばく医療科学共同専攻 保健看護学コース 国際被ばく保健看護学講座 Department of Health Nursing of International Radiation Exposure



講座主任(教授) 佐藤 美佳 SATO Mika

本講座は、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故で得られた教訓に基づき、放射線に関する正しい知識の拡充と、被ばく医療および放射線災害における中長期的な看護実践を、科学的なエビデンスに基づいて体系化し、国際展開することを目標に教育・研究を行います。放射線の健康リスクについて正しい知識を持ち、主体的に看護実践できる人材を育成します。

看護学研究科の理念

福島県立医科大学大学院看護学研究科は、看護の実践・研究・教育の場で活躍できる高度な専門知識、技術、実践能力を有する人材の育成を行い、看護学の創造と発展に貢献することを目的としています。

〈博士前期課程〉教育目標

- 1 高度な専門知識・技術と卓越した実践能力を持つ看護専門職者を育成する。
- 2 看護援助方法論の開発と研究を担う人材を育成する。
- 3 看護職のキャリア開発プログラムを構築できる人材を育成する。

博士前期課程の専門領域

●基礎看護学（研究コース）

看護の対象となる人間の生命活動、看護実践とその教育等、あらゆる看護学領域に共通する一般性・普遍性を、目的や対象の特徴に即した研究方法を修得しつつ追究する。

●がん看護学（研究コース・CNS コース）

がんと診断された時から終末期まで、さまざまな場所で療養しているがん体験者とその家族が抱える健康問題を解決するための効果的な看護援助方法論を開発する。

●成人看護学（研究コース）

疾患や外傷などにより生体侵襲を受けた人やその家族の発達課題・生活過程を踏まえ、さまざまな健康レベルや病期に応じた看護援助方法を開発する。

●老年看護学（研究コース）

老年期にある人が、治療および療養の場でその人らしく生活することを支援する看護援助方法を開発する。

●精神看護学（研究コース・CNS コース）

精神の健康問題を持つ人が、自立したその人らしい生活を確立していくために必要な看護援助方法を開発する。

●母性看護学・助産学（研究コース・助産師コース）

マタニティサイクルにある女性とその家族およびライフサイクル全般に関わる女性の健康を支援するための看護援助方法を開発する。助産師コースでは助産師国家試験受験資格を取得できる。

●小児看護学（研究コース・CNS コース）

育児期にある家族の健康生活を支援するための援助方法および健康問題を持つ子どもとその家族の QOL の向上に必要な看護援助方法を開発する。

●地域看護学（研究コース）

様々な健康水準の個人や集団を対象として、行政・企業・訪問看護等における健康課題に応じた看護ケアシステムおよび看護援助方法を開発する。

〈博士後期課程〉教育目標

- 1 看護系大学等の教育・研究機関において、複雑多様な人々のニーズに応えるケアやケアシステム開発の方法論を考究し、その体系化と発展に寄与する研究を自立して行い、その研究成果を看護実践に還元できる研究者で、その研究成果や研究指導力を以って質の高い看護学教育を展開できる看護教育・研究者を育成する。
- 2 病院や施設等の看護実践の場で、研究活動を自立して行うとともに、組織における研究活動や看護系大学等教育・研究機関との共同研究を推進し、その成果を看護実践に還元することを牽引できる指導者（看護実践指導者）を育成する。

博士後期課程の概要

福島県立医科大学看護学研究科では、学生が修士課程・博士前期課程でこれまで学んできた専門知識を看護実践の観点から発展・深化させ、研究の成果を実践の場に還元できる研究者や指導者の育成を目指し、令和4年4月博士後期課程（実践開発看護学領域）を開設しました。

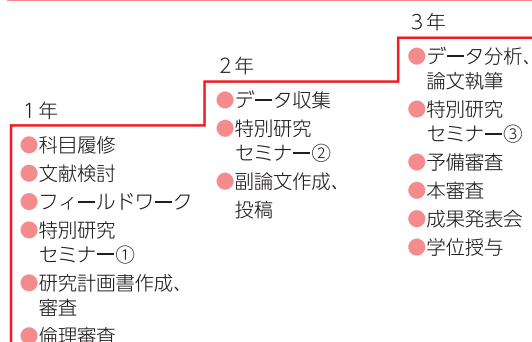
～実践開発看護学～

「実践開発看護学」とは、人々のニーズに応える新規性の高い独創的なケアと、それらを適時適切に人々に届けるケアシステムを創造し、その有効性を検証し、応用・発展させる方法論について教育・研究することを目的とする看護学です。

複雑化・多様化する健康問題の解決に資する独創的で質の高い看護実践を開発するとともに、住み慣れた地域で生活したいと願う住民や保健医療福祉資源の偏在を抱える地域の健康問題解決をめざし、多職種連携も含む継続した看護実践のシステム形成を図る能力の修得を目指します。

博士後期課程での研究活動の流れ

実践開発看護学特別研究（1～3年、博士論文科目）



保健科学研究科の概要

福島県立医科大学大学院保健科学研究科は、保健科学の発展に寄与することができる専門職者を育成するとともに、保健科学の創造と発展に貢献することを目的とし、令和7年4月に開設しました。

保健科学専攻（修士課程）の特徴

本研究科では、研究分野における高度な専門性に基づき、活動の場において修得した知識および科学的思考を実践・還元できる能力を有する、主に福島県内で活躍する教育・研究者および臨床専門職者を養成します。

保健科学専攻は、専攻内で「理学療法学領域」、「作業療法学領域」、「診療放射線科学領域」、「臨床検査学領域」の4つの領域に分かれ研究を進めていきます。

設置の基礎となる学部である保健科学部では、県が定めた「保健医療従事者の新たな養成施設に係る基本構想」に基づき「プロフェッショナルとしての高度な知識と技術を修得し、チーム医療の一員としての役割を果たすことができる人材を育成する」ことを教育目標の一つとして掲げ、「チーム医療」をはじめとする4学科共通の科目や医学部・看護学部の学生と共に学ぶ科目を取り入れ、多職種協働の意識を育んできました。本研究科ではこの特長を発展させ、多職種協働の意識づけだけでなく、実際の課題解決に向け考察し提案を行うなど、自ら働きかける能力の強化を狙いとし、4領域の学生が共通科目において他の職種の最新動向や医療現場の課題を学び、多職種協働の視点を持ちながら専門領域の学修に取り組むことで、課題に対し多角的なアプローチを行う、また、多職種協働の中で自身の専門性を発揮したチームへの貢献方法を考え、実践の場へ還元できるような人材を養成します。

●理学療法学領域

高度な知識と技術を習得し、研究・教育・臨床の場で課題解決能力や実践力を身につけ、主体的に研究を進める力を養うことを目的としています。科目は4つの分野に分かれ、「運動器障害学」では運動器障害の予防と治療、「神経・小児障害学」では神経や小児障害の最新知見、「内部障害学」では内部障害の病態と治療法、「地域・予防学」では地域活動の実践を学びます。特論科目で最新の研究動向や評価方法を学び、演習科目では文献の抄読や議論を通じて、理学療法の実践や研究課題の整理を進めます。

●作業療法学領域

人は作業的存在であり、日々の作業は健康や生活の豊かさと深く関係しています。作業療法学領域では、人の「生活機能」である「心身機能」と「活動・参加」に焦点をあて、心身機能と作業との関連や心身機能障害が作業に与える影響、心身機能や活動・参加の回復に向けた作業療法の効果に関する研究を行っています。具体的内容としては、脳卒中や認知症患者などの心身機能と生活機能との関連、日常生活活動の自立に必要な心身機能の水準、高齢者における生活機能と介護予防等の関連要因、発達の困難さを抱える生徒に対する学校作業療法の効果などです。

作業療法学領域では、高度な知識と科学的思考を身につけ、研究・教育・臨床等の場において、主体的に研究を進めていくことが出来る人材を養成するとともに、人の「生活機能」を探究し、その課題解決のための先進的アプローチを模索する能力を養います。

●診療放射線科学領域

診療放射線科学を基盤として、画像診断、核医学、放射線治療に関する高度な知識と技術を体系的に修得するとともに、新たなニーズや技術の進展に柔軟に対応できる思考力を備えた高度専門医療技術者を育成します。研究分野は「医用画像情報工学」「医用画像科学」「核医科学」「放射線治療科学」「医学物理」の5つに分かれ、独創的な発想を持ち、新たな知見を生み出す「研究マインド」の形成にも力を注いでいます。また、保健医療の世界やチーム医療の中でリーダーシップを発揮し、研究者や教育者として将来活躍できる人材の育成も目指しています。急速に進化する医療技術の現状に対応しつつ、地域や国際社会における医療の質向上に貢献することを目標に、幅広い視野を持った人材を養成します。

●臨床検査学領域

感染症、リウマチ、がん、認知症、心血管疾患など、幅広い疾患に対して先端的な研究が進められています。感染症原因微生物の迅速検出法や薬剤耐性機構の解明、日和見病原体の研究などが行われており、臨床現場での迅速かつ正確な診断に貢献しています。また、アルツハイマー病や原発性脳腫瘍グリオーマの診断・治療法の開発が進められており、認知症リスク因子や糖転移酵素の機能解析を通じて、神経疾患やがんの治療に新たな可能性を見出しています。さらに、循環器疾患や睡眠障害の検査法の開発、超音波検査を用いた血管機能や臓器連関の病理学的研究も進行中です。

これらの研究は、健康長寿県の実現や質の高い地域医療体制の構築、地域共生社会の推進といった目標に貢献し、地域医療の発展を支えています。

オープンキャンパス Report

医学部

2025.7.19 sat

医学部紹介

模擬講義



参加者とコミュニケーションをとりながら熱心な授業を展開しました。

産学連携事例 展示・体験コーナー



本格的な手術道具を使って、先生の指示のもと縫合体験をしました。

学生団体による企画



学生広報サークル「PR-Lab」による大学の魅力発見コーナーに加え、エコー体験や、心臓血管外科手術の体験コーナーも出展されました。

- 医学部の過去問質問コーナー
- 質問・相談コーナー



看護学部

2025.7.5 sat

看護学部紹介



学部長の挨拶、入試概要の説明に続いて、学部生が学部の魅力を紹介しました。

模擬講義



実際の講義さながらの内容で、参加者の方々も興味深く聞き入っていました。

各会場コーナー



各会場で相談コーナーや体験コーナーが実施され、参加者はそれぞれ興味のある内容を楽しみました。

保健科学部

2025.7.12 sat

理学療法学科



模擬講義や体験型のブース、学生相談を行いました。

作業療法学科



発達障害のミニ講義や革細工体験などを行いました。

診療放射線科学科



展示や模擬講義、学生による画像診断クイズを行いました。

臨床検査学科



各種検査の体験ブースや学生生活・入試相談を行いました。

- 過去問閲覧コーナー
- 入試制度相談コーナー
- 図書室見学
- 多目的ホール学科展示

別科助産学専攻

2025.7.12 sat

別科助産学専攻 紹介



別科長の挨拶、入試概要・学生生活の紹介が行われました。

分娩介助演習見学・各種体験コーナー



胎児模型を使用した超音波検査の実演、新生児人形の抱っこ体験、教材展示など、みんな興味深そうに説明に聞き入っていました。

- 質問・相談コーナー
- 過去問閲覧コーナー



私たちのFMU!

光が丘キャンパス編

医学部 × 看護学部

福島だからこそ学べる
“医療&看護”がある!

医学部
比氣 彩歌 さん
(茨城県 桜蔭高等学校
出身)

看護学部
野里 彩乃 さん
(福島県 福島高等学校
出身)

私たちが、医療業界を選び福島県立医科大学に進んだ理由。

比氣 私の場合、父が開業医で医師は身近な職業だったから、自然な流れで医学部を目指すようになったんだけど、実は、高校生のころ別の学科に気持ちが動いたことがあったの。でも、改めて考えたとき、医学部で6年間真面目に勉強をして卒業して、医師の資格が取れたら、その後の可能性や選択肢はとても広がっていると気づいて。今、あのときの選択は間違っていなかったと思ってる。野里さんはどうしてこの大学に？

野里 看護学校よりも専門性の高い知識が学べるのが大きな理由かな。東日本大震災で放射線災害を経験した福島だからこそ学べる、放射線看護や災害看護の授業も魅力的だと思った。それに、福島県立医科大学附属病院に通っていた経験があって、前から馴染みがあったんだ。もともと東北の穏やかな雰囲気が好きで、できれば東北の大学に進みたいなって考えてたの。比氣さんは、茨城県出身だよな。

比氣 そう。一人暮らしに憧れがある一方で、地元から遠すぎない場所を希望してたから、福島は私にとってベストな距離。医学部は思った以上に県外出身者がいて、一人暮らしの人も多いから心強いよ。勉強は大変だけど、個性豊かな学生ばかりで楽しいし、気の合う友達や尊敬できる先生にも出会えて、福島県立医科大学で良かったなって。

野里 私は正直なところ、入学するまで看護学部って怖い人が多いイメージだった(笑)。でも、実際はみんなすごく優しくていい学生ばかり。授業でグループワークをする機会が多いんだけど、みんな協力的だからスムーズに進められるし、課題に取り組む姿勢も真面目。大変な勉強の中でも、クラスメイトの存在とキャンパスの自然豊かな環境が癒しになっている。

社会貢献につながる福島ならではの学び

野里 比氣さんは、これまでの授業の中で何が印象的だった？ 私は、震災看護学の授業で、DMAT(Disaster Medical Assistance Team/災害医療派遣チーム)として活動されている方から聞いた話が心に残ってる。DMATには以前から関心があったんだけど、先生の経験談から現場の厳しさややりがい伝わってきて、これまで以上に興味が増したかな。

比氣 私も、災害医療かな。福島県立医科大学には、東日本大震災後に設置された「放射線健康管理学講座」があって、学生が研究の手伝いをさせてもらえるんだけど、放射線関係の研究をしている先生の特別授業は、とても興味深かった。放射線の研究は、時間をかけて答えを導くことも大事だけど、与えられたテーマに対してスピード感を持って結果

を出して、タイムリーに社会へ還元することにも大きな意義を感じて、私も講座に入りたいと考えてるんだ。

野里 医学部の勉強だけでなく、学生のうちから研究に参加するなんて、意識が高い！災害看護もそうだけど、専門性が高い勉強ができるのは、福島県立医科大学の特徴だよな。

福島県立医科大学での成長。そして、これから。

野里 福島県立医科大学は、レベルの高い学びができるけど、先生方が優しく、質問しやすい環境をつくってくれるから、勉強でのつまずきを減らすことができると思う。私の場合、以前は病気の方や障がい者のドキュメンタリーを見て「かわいそうだな」という同情の気持ちが強かったけど、医療の知識を身に付けた今は、「自分だったらどう関わられるだろう」と、医療従事者としての視点で考えるようになって、心構えの部分でも成長できているのかなって。

比氣 うん。私もそういう目線で見られるようになったと思う。

野里 それと、看護学部では答えが一つではない課題もあるから、個人の思考力が求められることが多いんだよね。そのおかげで、自分の意見を言うようになったと感じてる。

比氣 高校の勉強は大学受験の準備という意味合いが強かったから、教える側もわかりやすさを重視していたと思う。でも大学は、授業で与えられた膨大な情報から自分で取捨選択をして学びを深めるものなんだと実感してる。わかりやすい教科書があるわけではなく、自分で読み解く必要もあるよね。大変だけど、大学を卒業しても勉強は続くから、積極的に学ぶ力を身に付けられたことは、将来を考えても大きいなって。

野里 ほんとそう。私は災害看護に加えて精神看護に興味があるんだけど、病気や障がいなどについて理解することで、例えば、「足に麻痺があるから歩くのは難しいし、旅行もできないだろう」とか、「精神障がいを持つ方には近寄りにくい」とか、無意識に持っていた先入観や偏見がなくなって、いろんな分野の看護に興味を持てるようになった。

比氣 視野の広がりと言えば、福島県立医科大学にはグローバルな視点を持つ先生が多くて、地域医療をやるなら世界の変化にも目を向けなさいとアドバイスをくれるから、どんどん興味が広がってる。今は具体的な夢は決まっていないけど、必要だと感じたことを精一杯勉強して、将来を考えたいな。野里さんの夢は？

野里 看護師も保健師もそれぞれにやりがいがある仕事だから、まだ迷っているけど、患者さんを良い方向に導ける医療職者になりたい。お互いに今は勉強を頑張って、選んだ夢を実現させたいね。

私たちのFMU!

福島駅前キャンパス編

理学療法学科 × 作業療法学科 × 診療放射線科学科 × 臨床検査学科

充実のキャンパスライフが、
目標に向かう私たちの原動力です。

理学療法学科

鈴木 京介 さん
(福島県 白河高等学校出身)

臨床検査学科

高嶋 紗彩 さん
(千葉県 佐原高等学校出身)

診療放射線科学科

長嶋 唯 さん
(福島県 葵高等学校出身)

作業療法学科

佐藤 礼琉 さん
(福島県 橘高等学校出身)

理想の医療従事者を目指し福島県立医科大学へ

鈴木 僕が理学療法士に憧れを持ったのは小学5年生。今も続けているバスケットボールで膝をケガして、リハビリなどでお世話になったことがきっかけ。福島県立医科大学に理学療法学科ができると知ったときは、運命だと思った。みんなは、なぜそれぞれの学科を選んだの？

長嶋 私は、小さい頃から、人に「ありがとう」と言ってもらえる仕事がしたくて医療従事者を目指したの。その中で、医師と協働して直接治療に携われる診療放射線技師に興味を持ったんだ。県外で一人暮らしをするのも不安だったし、福島県立医科大学の診療放射線科学科は一学年の人数が少なく、高度な知識が学べることも決め手になった。

高嶋 私は医療系ドラマを見ていううちに、病院で働きたいと思ったんだ。医療系の職業を調べていたとき、心電図や超音波、尿検査などいろんな観点からデータを分析する臨床検査技師を知って、人の病気を見つける仕事がしたいなって。細胞検査士になりたくて、国公立では珍しく細胞検査士養成コースがあるこの大学に決めたの。地元から出て一人暮らしけど楽しimdiしかなかった！

佐藤 僕の場合、片足に障がいのある叔父がいて、義足のサイズが合わなかったり使いにくかったりするたびに、自分で改造し工夫している姿をずっと見てたんだ。叔父の生活を楽にしたいくて、義足の方をサポートできる仕事って何だろうと調べたとき、義足を作って終わるのではなく、生活の質を上げるために継続して寄り添える作業療法士になろうと決めた。

長嶋 鈴木 高嶋 (拍手)いい話！

佐藤 進学先は、通いやすくて設備が充実したこの学校一択だったよ。

コミュニケーション力が自然と身に付く校風

高嶋 大学って、先生と学生の間に距離があるイメージだったけど、この先生はみんな優しく、すごく親しみやすいと思わない？「いつでも研究室に来ていいよ。顕微鏡を見に来ていいよ」と言ってくれるし、学生と先生が一緒にご飯を食べに行くこともある。

鈴木 どの学科の先生も、フレンドリーに接してくれるよね。僕も先生と飲みに行くし、この間はスノーボードにも行ったよ。悩みを親身に聞いてくれる存在が近くにあって、とても心強いと思う。

佐藤 1つの建物に保健科学部の学生と先生が集まっているから、普段から顔を合わせやすいし、学生のフリースペースと先生の研究室が同じ空間にあって、お互いに声を掛けやすいんだよね。学生も優しい人が多い。

長嶋 診療放射線科学科では、学年対抗運動会をしているの。去年は学会直前で先生を誘えなかったけど、今年は参加してもらいたいと思っている。

鈴木 理学療法学科も、同じ学年で定期的にスポーツ大会をしているよ。その後みんなでご飯を食べに行くのが定番。

高嶋 臨床検査学科はバーベキューや飲み会がよくあって、参加率も高いよ。私も積極的に参加して楽しんでいる！作業療法学科は？

佐藤 先生が誰でも自由に過ごせる場所を用意してくれて、先輩から実習やテストの話を聞いたり、ボードゲームをしたり、好きなように学生同士や先生と交流できる機会が定期的にあるよ。

高嶋 どの学科も一学年の人数が多くないから、仲良くなりやすいよね。

鈴木 先生との距離が近いからこそ、目上の方との接し方や礼儀が自然と身に付いたと思う。社会に出たら、専門知識や技術だけでなく、上司や患者とのコミュニケーションは必須だから、その勉強にもなるよね。

学びが積み上げられていると実感できる瞬間

佐藤 みんなは、大学に入って成長したと感じることはある？僕は勉強に関して言うと、最初は「点」だった知識が「線」になって「面」になって、わざわざ教科書を広げなくても自然と友達と議論できるようになったと思う。一人でレポートを書くよりも、大人数で議論した方が理解も深まるし、同じ目標を持つ仲間がいるからこそその成長か。

長嶋 それ、私も感じてる！大学では自分の意見を言うことが大事で、周りのみんなも話を聞いてくれるよね。それに、違うと思ったら指摘してくれる。勉強に関するディスカッションが多くなって、学年が上がるにつれて内容もレベルアップしているから、成長してる実感があるよ。

高嶋 プライベートでも、ドラマに出てきた医療用語が理解できたとき、勉強したことが身に付いてるなって思うことない？私はよくある！

長嶋 鈴木 佐藤 あー！それわかるー！みんな感じてると思う！

鈴木 僕は、アスレティックトレーナーになりたいと思っていて、去年はトレーナーに関するインターンもしたんだ。成長した部分もあるけど、まだまだ現場経験が足りないから、地域のスポーツに関わって、知識とか対応力を高めたいな。

高嶋 在学中の目標で言うと、私はボランティアサークルの代表を務めていて、外部の人とのやりとりも多い。初めての経験も多くて大変だけど、成長のためだと思って挑戦したいな。

長嶋 佐藤 みんな目標に向かって頑張ってると思うと、すごく刺激になる！勉強もキャンパスライフも充実させながら、夢を叶えようね！



部活動紹介

運動部

アーチェリー部、新極真空手部、弓道部、剣道部、硬式庭球部、ゴルフ部、男子サッカー部、山岳部、柔道部、水泳部、競技スキー部、スピードスケート部、軟式テニス部、剣道部、卓球部、男子バスケットボール部、女子バスケットボール部、バドミントン部、男子バレーボール部、女子バレーボール部、漕艇部、準硬式野球部、ラグビー部、陸上競技部、ワンダーフォーゲル部、ハンドボール部、女子サッカー部、自転車部

文化部

囲碁部、管弦楽団、基礎医学研究会、軽音楽部、混声合唱団「燦」、赤十字奉仕団、写真部、落語研究部

同好会

茶道部、ストリートダンスサークル ZACC、アカペラサークル阿修羅、ウィンドアンサンブル、IFMSA-Fukushima、Cheers !、文芸サークル肋骨スタジオ、Fukushima WILL、ふくしまぬいぐるみ病院、ジャズ研究会、日本酒研究会、POMk Project、蓬萊技術研究機構、論文愛好会 MOO 会、ボランティアサークル Tomorrow、演劇部、FMU PR-Lab、球技サークル、軟式野球部、カードゲームサークル、ルリアン スポーツ Fukushima、SF 研究会、ピアノサロン カデンツァ、テーブルゲーム部、書道パフォーマンスサークル墨舞、自然科学部、ボディビル部、かるた部、浜 ROOTs

学生自治会

本学の学生自治会は学生が運営しているもので、主な取組として、クラブ活動の助成、新入生歓迎会、学園祭(光が丘祭、光翔祭)の運営などを行っています。クラブは現在28の運動部と8の文化部、29の同好会があり、どの部も活発に活動を行っています。また、多くの学生が2つ以上のクラブ、同好会に参加しており、充実した学生生活を送っています。



小泉 大祐さん(医学部 2020年度卒業)
福島県立医科大学附属病院 勤務 専攻医

福島県立医科大学勤務 先輩職員からのメッセージ

医師になるための勉強は膨大ですが、
同じ道を志す仲間がいたから頑張れる。

私が勤務する脳神経内科には、診断することも難しい症例が集まります。しかし、診断しなければ治療も慎重にならざるを得ないためバランスをとって診療するのが難しいこともあります。また、有効な治療方法がない難病を扱うことも多く、そのような患者さんとの向き合い方に悩むこともあります。それでも、少しでも症状が良くなるように医局員の方々と協力しながら診療する日々は大変ですが、人の助けになる医師という仕事の誇りを実感しています。思えば大学時代、同じ道を志す仲間と切磋琢磨できたから今があると思います。

■入学科・授業料・諸会費等

(1) 入学科・授業料

※入学科、授業料の改定が行われた場合は改定後の金額を適用します。
※経済的理由により納付が困難な場合は、選考の上免除または減額する制度があります。

	区 分	医学部	看護学部	保健科学部	別科助産学専攻
入 学 料	福島県の住民	282,000 円	282,000 円	282,000 円	169,200 円
	福島県の住民でない者	846,000 円	564,000 円	564,000 円	338,400 円
授 業 料	区分なし	535,800 円	535,800 円	535,800 円	535,800 円

(2) 諸会費等

※その他、テキスト、実習用器具等の購入経費及び実習に関わる経費が必要となります。
※改定される場合があります。

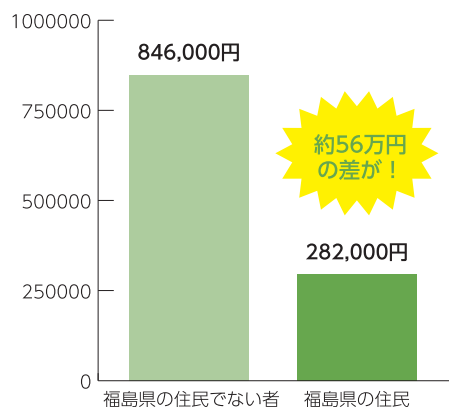
区 分	医学部	看護学部	保健科学部	別科助産学専攻
後援会費	300,000 円	100,000 円	150,000 円	25,000 円
学生会費	10,000 円	5,000 円	7,000 円	-
同窓会費	42,000 円	卒業時 10,000 円	-	-
学生総合補償制度掛金	72,000円程度(コース例)	52,000円程度(コース例)	52,000円程度(コース例)	16,000円程度(コース例)

修学資金制度

卒業後一定期間の勤務を条件として貸与された修学資金の返還が免除される制度(福島県緊急医師確保修学資金、福島県看護師等修学資金、福島県理学療法士等修学資金)があります。その他、各地方自治体、各種団体などによる修学資金制度もありますので、詳しくはお問い合わせください。

■入学科〈医学部の場合〉

福島県内出身者の入学科は
とても安くなります



学生寮

学生に学習面と生活面における良好な環境を提供するため、平成28年4月に開寮しました。学生寮は、学部や学年の垣根を越えて集団生活をするることにより、対人関係を学ぶとともに、地域や他者との交流をしていく中で豊かな人間性を養うことができる場です。

《学生寮の概要》

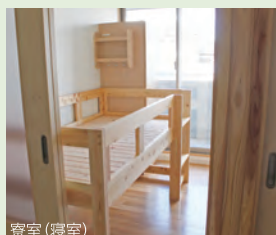
- ・所在地 福島県福島市渡利字大久保60-1
- ・建物概要 鉄筋コンクリート造り3階建
- ・定員 84人(男子42人、女子42人)
- ・寮室 面積約30㎡、3人相部屋(寝室は個室)、冷房等完備
- ・共同スペース 風呂、シャワー、トイレ、洗面台、ミニキッチン、憩談スペース
- ・共同設備 テレビ、電子レンジ、IHクッキングヒーター、洗濯乾燥機(コイン式)、自動販売機(飲料)
- ・食事提供 あり(平日の朝・夕)
- ・寄宿料等 寄宿料(月額) 17,000円
運営経費(月額) 32,000円



学生寮全景



食堂



寮室(寝室)



憩談スペース



寮室(相部屋)



ミニキッチン

各種データ

医学部

年 度	区 分		募集人員	志願者	第1次選考 受験者	第1次段階 選抜合格者※	2次試験 受験者	入学者	実質倍率	入学者内訳					
										地域別		男女別		卒業期別	
										県内	県外	男性	女性	新卒	既卒
令和7年度	前期	一般枠	45	192		191	144	45	2.0倍	4	41	31	14	21	24
		地域枠	25							7	18	20	5	13	12
	推薦入試		55	170			159	52	3.1倍	32	20	35	17	36	16
	総合型		5	32	32	15	15	5	3.0倍	3	2	2	3	5	0
	海外教育		若干名	13			11	3	2.2倍	0	3	0	3	0	3
	外国人留学生		若干名	1			0								
令和8年度	前期	一般枠	45	419		317	243	40	3.4倍	2	38	25	15	21	19
		地域枠	25							2	23	18	7	12	13
	推薦入試		55	169			162	55	2.9倍	35	20	25	30	31	24
	総合型		5	16	16	15	15	5	3.0倍	4	1	1	4	5	0
	海外教育		若干名	21			21	5	4.2倍	0	5	2	3	1	4
	外国人留学生		若干名	0			0								

※総合型は第1次選考合格者数

看護学部

年 度	区 分	募集人員	志願者	2次試験 受験者	入学者	実質倍率	入学者内訳					
							地域別		男女別		卒業期別	
							県内	県外	男性	女性	新卒	既卒
令和7年度	前期	44	113	102	44	2.0倍	28	16	4	40	42	2
	後期	10	86	32	10	2.5倍	5	5	4	6	9	1
	推薦入試	30	64	64	30	2.1倍	30	0	0	30	30	0
令和8年度	前期	44	103	97	44	2.1倍	23	21	2	42	42	2
	後期	10	120	41	10	3.2倍	5	5	1	9	10	0
	推薦入試	30	61	61	30	2.0倍	30		1	29	30	0

保健科学部

年 度	学 科	区 分	募集人員	志願者	第1段階 選抜合格者	第2段階 選抜受験者	入学者	実質倍率	入学者内訳					
									地域別		男女別		卒業期別	
									県内	県外	男性	女性	新卒	既卒
令和7年度	理学療法学科	一般選抜	24	56	56	54	24	2.1倍	8	16	12	12	24	0
		学校推薦型選抜	16	30	-	-	16	1.9倍	16	0	3	13	16	0
	作業療法学科	一般選抜	24	66	66	64	24	2.7倍	6	18	3	21	24	0
		学校推薦型選抜	16	22	-	-	16	1.4倍	16	0	1	15	16	0
	診療放射線科学科	一般選抜	15	72	60	56	15	3.3倍	7	8	8	7	14	1
		学校推薦型選抜	10	31	-	-	10	3.1倍	10	0	3	7	10	0
	臨床検査学科	一般選抜	24	58	58	57	24	2.4倍	10	14	5	19	24	0
		学校推薦型選抜	16	31	-	-	16	1.9倍	16	0	1	15	16	0
令和8年度	理学療法学科	一般選抜	24	44	44	40	24	1.6倍	8	16	12	12	23	1
		学校推薦型選抜	16	27	-	-	16	1.7倍	16	0	8	8	16	0
	作業療法学科	一般選抜	24	49	49	44	24	1.8倍	7	17	7	17	22	2
		学校推薦型選抜	16	19	-	-	16	1.2倍	16	0	0	16	16	0
	診療放射線科学科	一般選抜	15	45	45	41	15	2.6倍	6	9	11	4	13	2
		学校推薦型選抜	10	21	-	-	10	2.1倍	10	0	6	4	10	0
	臨床検査学科	一般選抜	24	61	61	58	24	2.2倍	5	19	5	19	23	1
		学校推薦型選抜	16	26	-	-	16	1.6倍	16	0	1	15	16	0

別科助産学専攻

年 度	区 分	募集人員	志願者	入学者	実質倍率	入学者内訳			
						地域別		男女別	
						県内	県外	男性	女性
令和7年度	一般選抜	10	44	10	4.4倍	4	6		10
	推薦選抜	10	28	10	2.8倍	6	4		10
令和8年度	一般選抜	10	33	11	3.0倍	2	9		11
	推薦選抜	10	31	9	3.4倍	8	1		9

各種データ

■大学学生数

(令和8年5月1日現在)

区 分		1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
医学部	県内	45 (22)	51 (12)	35 (13)	42 (15)	45 (21)	44 (15)	262 (98)
	県外	92 (38)	95 (33)	87 (40)	88 (31)	95 (27)	84 (29)	541 (198)
	計	137 (60)	146 (45)	122 (53)	130 (46)	140 (48)	128 (44)	803 (296)
看護学部	県内	58 (54)	69 (63)	61 (60)	60 (52)			248 (229)
	県外	27 (26)	22 (18)	19 (18)	29 (23)			97 (85)
	計	85 (80)	91 (81)	80 (78)	89 (75)			345 (314)
保健科学部	理学療法学科	県内	25 (10)	23 (18)	24 (14)	25 (13)		97 (55)
		県外	17 (10)	14 (7)	16 (11)	15 (7)		62 (35)
		計	42 (20)	37 (25)	40 (25)	40 (20)		159 (90)
	作業療法学科	県内	23 (21)	23 (20)	29 (23)	26 (17)		101 (81)
		県外	18 (13)	17 (16)	10 (9)	16 (11)		61 (49)
		計	41 (34)	40 (36)	39 (32)	42 (28)		162 (130)
	診療放射線科学科	県内	18 (5)	15 (7)	15 (8)	16 (5)		64 (25)
		県外	9 (4)	8 (6)	10 (7)	9 (6)		36 (23)
		計	27 (9)	23 (13)	25 (15)	25 (11)		100 (48)
	臨床検査学科	県内	22 (19)	26 (21)	22 (17)	20 (14)		90 (71)
		県外	19 (15)	14 (12)	15 (12)	19 (15)		67 (54)
		計	41 (34)	40 (33)	37 (29)	39 (29)		157 (125)
	学部合計	県内	191 (131)	207 (141)	186 (135)	189 (116)	45 (21)	862 (559)
		県外	182 (106)	170 (92)	157 (97)	176 (93)	95 (27)	864 (444)
		計	373 (237)	377 (233)	343 (232)	365 (209)	140 (48)	1726 (1003)

※ ()内は女子学生数で内数

■別科学生数

区 分	1年
別科助産学専攻	20

■大学院学生数

区 分		1年	2年	3年	4年	計
医学研究科	医学専攻 (博士課程)	30	45	39	107	221
	医科学専攻 (修士課程)	5	3			8
	災害・被ばく医療科学共同専攻 (修士課程)	3	3			6
	計	38	51	39	107	235
看護学研究科	実践開発看護学領域 (博士後期課程)	2	2	4		8
	基礎看護学領域 (博士前期課程)	0	3			3
	がん看護学領域 (博士前期課程)	1	0			1
	成人看護学領域 (博士前期課程)	2	2			4
	老年看護学領域 (博士前期課程)	0	3			3
	精神看護学領域 (博士前期課程)	1	0			1
	母性看護学・助産学領域 (博士前期課程)	5	7			12
	小児看護学領域 (博士前期課程)	0	0			0
	地域看護学領域 (博士前期課程)	1	1			2
	計	12	18	4		34
保健科学研究科	保健科学専攻 (修士課程)	15	27			42
合 計		65	96	43	107	311

■学位(博士[医学])授与者数[過去5年分]

(令和8年5月1日現在)

年度	3	4	5	6	7	累計
総数						
大学院	44	30	33	38	39	731
論文	7	9	10	13	8	882
計	51	39	43	51	47	1,613

■学位(修士)授与者数[過去5年分]

(令和8年5月1日現在)

年度	3	4	5	6	7	累計
区分						
医科学	5	8	7	5	2	101
看護学	7	6	7	7	7	151
災害・被ばく医療科学	7	4	9	7	0	56

■国家試験の状況[過去5年分]

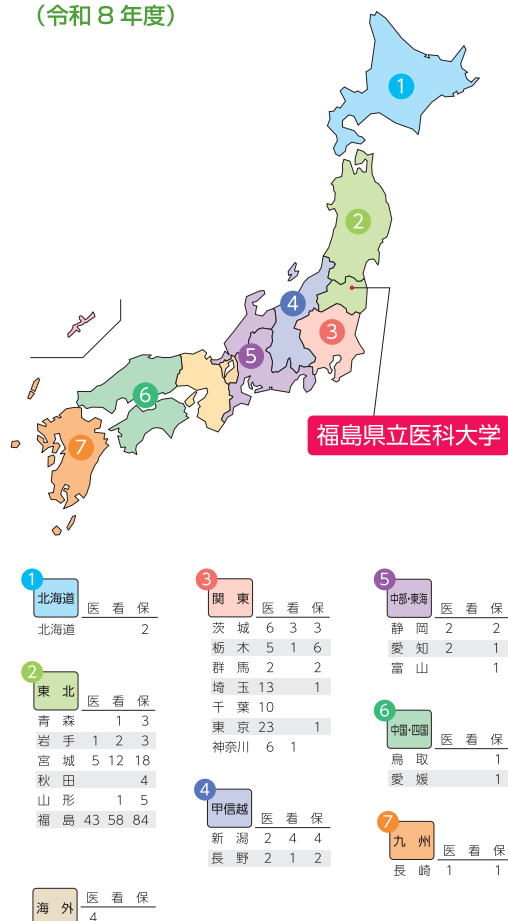
医師国家試験年次別合格者(総数)

実施年	4	5	6	7	8
回数	116	117	118	119	120
受験者 (人)	139	132	134	139	126
合格者 (人)	128	126	127	135	123
合格率 (%)	92.1	95.5	94.8	97.1	97.6
全国合格率 (%)	91.7	91.6	92.4	92.3	91.6

福島県立医科大学の合格順位(総数(新卒・既卒))

実施年	4	5	6	7	8
回数	116	117	118	119	120
公立(8校)中	6	2	5	2	1
国公立(51校)中	27	8	16	5	2
全大学(80校)中	44	20	32	10	5

■入学者の出身高校所在地別内訳 (令和8年度)



医師国家試験年次別合格者(新卒者・既卒者別)

実施年		4	5	6	7	8
回数		116	117	118	119	120
新卒者	受験者（人）	129	122	128	133	124
	合格者（人）	121	122	125	131	121
	合格率（%）	93.8	100.0	97.7	98.5	97.6
既卒者	受験者（人）	10	10	6	6	2
	合格者（人）	7	4	2	4	2
	合格率（%）	70.0	40.0	33.3	66.7	100.0

■国家試験の状況[過去5年分]

保健師国家試験の合格状況

実施年	4	5	6	7	8
受験者(人)	83	42	41	40	41
合格者(人)	78	41	40	40	39
合格率(%)	94.0	97.6	97.6	100.0	95.1
全国合格率(%)	93.0	96.8	97.7	96.4	89.9

助産師国家試験の合格状況

実施年	4	5	6	7	8
受験者(人)	5	5	20	21	23
合格者(人)	5	5	20	21	23
合格率(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
全国合格率(%)	99.7	95.9	99.3	99.3	99.8

看護師国家試験の合格状況

実施年	4	5	6	7	8
受験者(人)	83	84	80	79	82
合格者(人)	82	82	77	79	81
合格率(%)	98.8	97.6	96.3	100.0	98.8
全国合格率(%)	96.5	95.5	93.2	95.9	94.1

理学療法士国家試験の合格状況

実施年	7	8
受験者(人)	39	38
合格者(人)	39	38
合格率(%)	100.0	100.0
全国合格率(%)	95.2	94.9

作業療法士国家試験の合格状況

実施年	7	8
受験者(人)	34	41
合格者(人)	33	41
合格率(%)	97.1	100.0
全国合格率(%)	92.5	96.6

診療放射線技師国家試験の合格状況

実施年	7	8
受験者(人)	25	25
合格者(人)	24	25
合格率(%)	96.0	100.0
全国合格率(%)	92.2	83.8

臨床検査技師国家試験の合格状況

実施年	7	8
受験者(人)	39	39
合格者(人)	38	37
合格率(%)	97.4	94.9
全国合格率(%)	94.0	93.3

■卒業生の状況 医学部[過去5年分]

(令和8年5月1日現在)

卒業回数	卒業年度	卒業者数	地域別		県内					不明
			県外	県内	本学	開業医	公立病院	その他病院	その他	
69	3	129	51	69	5	-	19	45	-	9
70	4	122	41	81	10	-	17	53	1	-
71	5	128	45	75	3*	-	17	55	-	8
72	6	133	44	87	5	-	18	62	-	2
73	7	124	32	89	9	-	20	60	-	3

*会津医療センター含む

■卒業生の状況 看護学部[過去5年分]

(令和8年5月1日現在)

卒業回数	卒業年度	卒業者数	地域別		県内				
			県外計	県内	県	市町村	公立病院	その他病院	その他
21	3	83	28	55	3	5	36	7	4
22	4	84	29	55	2	4	42	3	4
23	5	80	34	46	-	6	26	9	5
24	6	79	30	49	2	4	27	11	5
25	7	82	34	48	4	1	32	2	9

■卒業生の状況 保健科学部

(令和8年5月1日現在)

卒業回数	卒業年度	卒業者数	地域別		進学	その他
			県外	県内		
1	6	137	46	74	14	3
2	7	143	57	72	11	3

■医学部・看護学部・学生生活・入学試験に関するお問い合わせ先

公立大学法人 福島県立医科大学 教育研修支援課

〒960-1295 福島県福島市光が丘1 e-mail gakuseik@fmu.ac.jp

■保健科学部に関するお問い合わせ先

公立大学法人 福島県立医科大学 保健科学部事務室

〒960-8516 福島県福島市栄町10番6号 e-mail h-nyushi@fmu.ac.jp



医療人育成・支援センター

CMECD : Center for Medical Education and Career Development

message メッセージ

医療人としての成長をシームレスに支援

医療人育成・支援センターは、2008年4月、卒前医学教育と卒後臨床研修を一貫して支援する組織として、医学教育部門と臨床医学教育研修部門が設立されました。その後、看護学教育研修部門と災害医療総合学習センターを加え、2020年からは医療手技教育研修開発センター、さらに2021年からは、保健科学部の開講に伴い、保健科学教育研修部門を加えた6部門が置かれ、それぞれ各部門が担う役割を果たし、学部教育・卒後教育の充実をはかり、よき医療人の育成を目指して取り組んでいます。

当センターは、設立15年が過ぎ、その時々々の要求に柔軟に対応し、活動内容が変化してきました。今後は、3学部6学科の医療系総合大学の教育に関する中心となることが期待されています。具体的には、本学における新たな教育システム導入の推進役と3学部の横の連携の要となることです。当センターは、本学の3学部の横断的な教育組織として、総合科学、生命科学、災害医療学、社会医学、臨床医学、看護学、診療放射線学、臨床検査学、作業療法学、理学療法学について、学部の枠を越え、学生からそれぞれの卒業後の医療人としての成長をシームレスに支援していきます。また、災害医療総合学習センターと医療手技教育研修開発センターは、従来の枠組みを越えた新たな教育の拠点と期待されています。

今後も当センターにご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

医療人育成・支援センター センター長 大谷 晃司





医学教育部門

医学教育部門は、医学生が6年間で十分な知識と基本技能、そしてプロフェッショナルとしての姿勢と思考を自律的に身に付けられるよう、新しいプログラムの企画・実践・支援、教育資源の管理、医学教育に係る提言を行っています。本学の医学教育全体を俯瞰して講座間、学部間で有機的につなぐ役割も担います。

I. 教育プログラムの企画と支援

新しい教育手法 (TBL、統合授業、反転授業等) の導入と実践
プロフェッショナル教育 (早期ポリクリ、地域実習、多職種連携教育) の企画実践

領域横断的な技能教育の実践 (医療面接、採血) と評価 (OSCE)

II. 教育資源の管理

模擬患者会運営、スキルラボ管理、FD、教育相談

III. 医学教育に係る提言

分野別認証評価、学生評価システム、入試、カリキュラム等

IV. 医学部入学への動機づけ事業の支援

出前講義、学校見学対応等

看護学教育研修部門

看護学教育研修部門では、将来について考えている中学生・高校生の皆様へのキャリア支援から、国家資格取得後の看護職に対する卒業後教育まで、福島県の看護職育成を幅広く支援しています。2023年から、看護学の卒業後教育は、「教育者主体の継続教育」から、一人ひとりが自ら学ぶ「学習者主体の生涯学習」という考え方に移行しました。あらゆる場で活躍するすべての看護職が、自身の専門家としてのキャリア形成を、自らの責任において自ら考え、選び、継続していく時代になりました。

本部門でもこの方針と地域の実情を踏まえ、皆様のニーズに応えられるよう次の4つを柱として事業に取り組んでまいります。

I. 中学生・高校生を対象とした出前講義・学校見学

II. 看護学部在校生を対象とした就職ガイダンス

III. 看護職の実践能力向上のための支援

IV. 看護職の教育力・指導力向上のための支援

臨床医学教育研修部門

臨床医学教育研修部門は、卒業後教育の充実を主な役割として、下記事業を通して、地域医療に必要な知識・技術の習得・向上のため、臨床研修医や指導医等の人材育成を支援しています。

特に、臨床研修の充実により、県内臨床研修医採用数を増加させることは、県内の医師確保につながることから、福島で日本トップクラスの臨床研修を提供し、第一線で働く医師を育てるため、県内20の臨床研修病院をネットワーク化し、福島医大だけでなく県全体の臨床研修内容のレベルアップにも努めています。

2018年度の4年生から始まった臨床実習 (BSL) の72週化にあわせ、BSLの内容の改善や評価のIT化を担っています。センター創立15年が過ぎ、臨床研修を見据え、学部の臨床教育へ活動範囲が広がってきています。

さらに専門医制度による専門医研修支援を行っています。県内各病院での学部教育・臨床研修に関する講習会や臨床研修指導医養成講習会の開催などを通じて、大学の枠を越え、福島県全体の臨床医学教育の向上も目指しています。

主な事業

I. 臨床研修・専門医研修の充実

II. 医療・福祉・地域医療体験プログラムの提供

III. 各種講習会・セミナー開催による医師生涯教育の支援

IV. 福島県臨床研修病院ネットワークの統括

V. 福島県地域医療支援センターとの共同事業

保健科学教育研修部門

保健科学教育研修部門は、2021年4月の保健科学部開設に伴い設置されました。

本部門では、理学療法士、作業療法士、診療放射線技師、および臨床検査技師を目指す学生が、高い倫理観と専門知識、そして確かな技術やコミュニケーション能力を身に付けられるよう、教育環境の整備や学習支援を行っています。さらに、研修会の開催などを通じて、地域医療を担う医療従事者の資質向上支援にも取り組んでいます。

災害医療総合学習センター

福島でしかできない実践的な教育

災害医療総合学習センターは、災害医療や放射線被ばく医療の知識や技術を持ち、それを実践できるエキスパート (医師・看護師・診療放射線技師など多様な医療人) を育てるための教育と、その研修体制確立を主な役割としています。

医療手技教育研修開発センター

献体遺体を用いた手術手技研修 (Cadaver Surgical Training : CST) の普及・発展のために、2020年4月に設置されました。

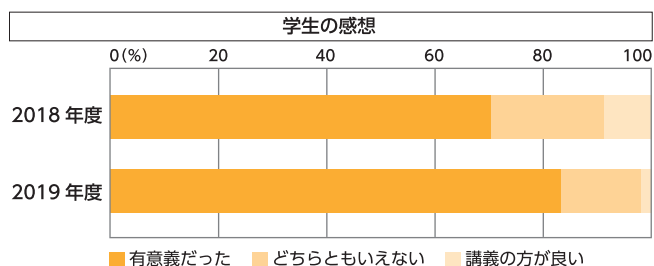
実践的な医療手技の向上に寄与できるように、ドライラボ、ウェットラボ、アニマルラボを連携させ、総合的な医療手技のトレーニング環境の構築に取り組んでいます。

医学教育部門

医療人育成・支援センターの医学教育部門は、国内外の医学教育に関する研究成果や情報を踏まえて、福島医大の医学教育上の課題の抽出、教員への問題提起、現状に則した形での新しい教育方略の導入、教育の環境整備、講座横断的な授業の運営を担当しています。

新しい教育手法の導入 ～症候論 TBL～

2018年度からTBL (team-based learning) を症候論の授業に取り入れました。TBLは事前学習を前提としたアクティブラーニングの一形態です。授業では、一般外来の初診患者診察を想定してチームで診断を考えます。チーム内、チーム間、講師－チーム間での議論は学生の満足度を高め、また、講師陣のやりがいを刺激します。



FD (Faculty Development)

FDは、教員同士で教育上の課題の解決方法を模索したり、新しい教授方法を共有したりする機会です。TBL 導入に際してはFDで模擬授業を行い、導入のメリットと運営上の課題を検討しました。



大学見学・出前講義

中学校や高等学校からの要望により、生徒や保護者の大学見学の受入、および、本学の教職員を派遣する出前講義を行っています。医学や医療に関する多彩な話題や体験の提供により、医療人を志す中学生・高校生の興味関心を高める機会となっています。



医療コミュニケーションの実践教育と模擬患者の会

正しい診断には患者さんから必要な情報を得ることが必要で、治療には患者さんの理解を得なければなりません。それには、短時間で行われる医療面接で信頼関係を結ぶことが不可欠です。同年代以外との接触の乏しい医学生が様々な場面設定で幅広い年代の方々と相手に医療面接を学べるように、2009年に福島医大模擬患者の会が結成されました。「模擬患者」とは、医療面接の演習で患者役を担当して下さる一般の方々のことです。現在約50名の方々が模擬患者として登録され、医学教育部門が企画・運営する医学部1年生の医療コミュニケーション演習と4～5年生の医療面接実習、4年生と6年生の臨床実習前と後のOSCE (客観的臨床能力試験) にご協力下さっています。



クリニカル・スキルス・ラボラトリー(スキルラボ)

「知っていること (know how) は、やって見せられること (show how) を意味しない」との考えに基づき、臨床手技の訓練施設「スキルラボ」を整備しています。

スキルラボとは？

スキルラボの略称で親しまれているクリニカル・スキルス・ラボラトリーは、医療人が診療技能を修得するための施設です。患者さんの苦痛や羞恥心を伴う医療手技を、現場を模した環境でモデルやシミュレータを用いて練習できます。失敗を恐れず何度でも練習できるため、医学生、看護学生、研修医、病院スタッフが活発に利用し

ています。

本学のスキルラボは、2009年4月27日にオープンしました。現在、スキルラボは、きぼう棟4階西、アドバンス(4号館5階)、ベーシック(8号館2階)、手術室の4カ所に設置され、授業・講習会・実技試験等に幅広く活用されています。

スキルラボ・きぼう棟

2016年度まで主に医学部生と研修医が利用していたスキルラボ・アドバンスのシミュレータを、きぼう棟4階西に移動しました。これにより、臨床手技の練習を臨床現場の近くで行えるようになりました。更に、これまで使用予約に応じて毎回出し入れしていたシミュレータが目的ごとの部屋に常設されているので、事前申込の上、スキルラボに行けばいつでも気軽に使えるようになりました。

○きぼう棟4F西。面積 324㎡。

超音波室		心電図室		内視鏡室		内視鏡室		男子宿直室		女子宿直室		女子宿直室	
EV	心エコー	超音波診断装置	腹部ファントム	心電図	12誘導心電計	管理室	直腸内視鏡	消化器内視鏡	気管支内視鏡	男子宿直室2	男子宿直室1	女子宿直室2	女子宿直室1
電子錠 (カードリーダー)				発信専用内線電話				電子錠 (カードリーダー)				非常扉	
階段		トイレ		備品室		学生勉強部屋							
外科系手技室		基本手技室2		穿刺手技室		レクチャールーム2		基本手技室1		小児救急室		腹部診察室	
気管切開	縫合	腹腔鏡下手術	ガウン・フェイスシールド	導尿	前立腺指診	腰椎穿刺	心電図	動脈採血	静脈採血	新生児挿管	小児救急	腹膜モデル (2種類)	ホワイボード
成人救急室		レクチャールーム3		成人・小児		ホワイボード		成人・小児		ホワイボード		シムマン (高機能患者モデル)	



スキルラボ・アドバンス

医療面接・診察撮影装置と広いオープンスペースを利用して、2週間毎に、医学部4～5年生が模擬患者さんとの医療面接実習を行っています。それ以外の日には、オープンスペースは学内外の方々を対象とした様々な講習会会場や4年生の臨床実習前OSCEの練習会場としても利用されます。

○4号館(医学部総合科学系研究棟)5階。面積 310㎡。

スキルラボの利用状況

スキルラボが開設された2009年度には学内外へのPR企画(臨床手技の講習会、オープンキャンパスでのイベント、FDでのシミュレータ・デモンストレーションなど)が多数行われ、初年度として3,800名の利用がありました。スキルラボ利用者協議会が設けられ、シミュレーション教育の授業活用、特に医学部臨床実習(BSL)での利用が増え、2023年度以降は、毎年、延べ10,000名以上に利用されています。

現在、医学部臨床実習では、4～6年次全科必修プライマリーコース64週と6年次選択科アドバンスドコース8週で行われており、「心臓・肺の聴診」「腰椎穿刺」「前立腺指診」「小児のBLS」「気管切開」「採血手技」「医療安全」など、18診療科32手技のシミュレーション教育プログラムが実施されています。

スキルラボ・ベーシック

ベッドサイドでの患者の診察・処置・ケアが大人数で学習できるようにレイアウトされた学習スペースで、主に看護学生や新人ナースなどがフィジカルアセスメントや採血手技を学習しています。

○8号館(看護学部棟)2階。面積 480㎡。



スキルラボ・手術室

全身麻酔に伴う呼吸・循環の変化、急変対応を高性能シミュレータで学習するスペース。

○附属病院2階麻酔科外来の回復室に設定。面積 約12㎡。

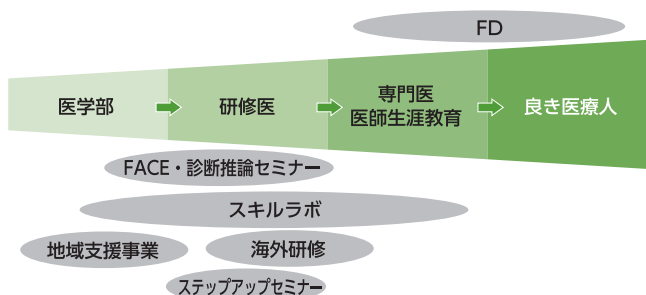
臨床医学教育研修部門

臨床研修・専門医研修

次世代の担い手となる、良き医療人を育成するために ～充実した臨床研修と教育支援体制～

福島県立医科大学附属病院では、豊かな知識と確かな医療技術を身につけ、患者さんへの温かなまなざしを持った医師を養成すべく、全国から多くの研修医を受け入れています。医師臨床研修制度においては「EBM (Evidence-Based Medicine) を実践できる研修」を、一般病院等では「救急医療やcommon disease」を学ぶことができるようにするなど魅力的な研修体制を構築しています。さらに、2018年4月からスタートした専門医制度にも対応しており、卒後5～7年間の専門医取得までの一貫した研修体制も整備しました。

臨床医学教育研修部門は、医療人として社会で活躍する人材を養成し、トータルに支援する機関として、卒前教育から臨床研修、医師としての生涯教育に至るまで様々な取組を行い、「良き医療人」を育てています。(下図参照)



臨床研修の理念と基本方針

臨床医学教育研修部門は、優れた医師としての基礎を築くために附属病院臨床医学教育研修センターと共に最適な研修プログラムの充実に努め、研修医が有意義な研修生活を送ることができるよう支援しています。

【臨床研修の理念】

全人的な医療を実践することで、住民の健康を支える医師の育成を目指し、将来の専門性につながる臨床研修を行う。

【基本方針】

- ①医師としての人格を涵養し、プロフェッショナルな姿勢を身につける
- ②医学・医療に求められる社会的ニーズを理解する
- ③日常診療で頻繁に遭遇する疾病や病態に適切に対応できるよう、プライマリ・ケアの基本的な診療能力（態度、技能、知識）を身につける
- ④チーム医療の一員として果たすべき役割を理解し実践する

臨床研修医の全体像

	臨床研修	専門医研修 (専門研修プログラム)
病院での身分	臨床研修医	専攻医・病院助手 助手
大学との関係	大学院生(併願可) 大学院研究生(併願不可)	大学院研究生(併願可)
	1年目 2年目 3年目 4年目 5年目 6年目 7年目 8年目 9年目以降	
		医学博士号取得

臨床研修の概要 研修期間：2年間

きめ細やかなサポートと、多様なニーズに対応

当院では、臨床研修を重視し、研修内容の充実に努めています。きめ細やかな研修サポートのためにメンター（相談員）制度を導入するとともに、多様なニーズに応えるため、プライマリケアから将来のキャリアに応じた研修まで、自分に合ったローテートを自由にプランニングできる「フレキシブルプログラム」、福島県立医科大学附属病院と協力病院の双方で研修する「たすきがけプログラム」、将来小児科・産婦人科を目指す研修医のために、専門科目に重点をおいた「小

児科・産婦人科・周産期プログラム」を用意しています。なお、研修開始以降でも、規定の範囲内で研修科目を変更することが可能です。どのプログラムも大学での研修だけではなく、協力病院での研修を適宜行っており、それぞれの病院のよいところを吸収できるように配慮しています。

救急研修においては、高度救命救急センターやドクターヘリによる研修だけでなく、県内の救急病院との連携により、一次・二次救急の研修も可能です。

専門医研修（専門研修プログラム）の概要

医師のキャリアを見据えた幅広い一貫した教育の推進

2018年にスタートした現行の専門医制度において、福島県立医科大学附属病院では、19ある全ての基本領域で基幹施設として専門研修プログラムを運用しています。

当院ではサブスペシャリティ領域も充実しており、基本領域との連動研修も可能となっております。

各人が希望する専門医資格が取得できるよう、基本領域の各プログラム責任者等と相談の上、最適な研修計画に基づき研修を行います。

また、原則として各学会の認定施設となっている連携施設でも研

修を行うことができますので、専門医資格取得に必要な症例数等を確保することができます。

更に当院の専門医研修プログラムでは、併願により本学の大学院生、大学院研究生の身分を兼ねることができ、医師として勤務しながら、大学院教育を学べます。大学院修了時には医学博士（PhD）が授与され、専門医との同時資格取得が可能です。

当院では、医師のキャリア全般に関する一貫した教育を支援します。

看護学教育研修部門

I. 中学生・高校生を対象とした出前講義・学校見学

看護学部広報委員会の協力のもと、2025年度は、出前講義8件(全て高等学校)、大学訪問2件(中学校・高等学校各1件)を実施しました。今後も、参加される生徒や先生方からのご意見・ご感想を大切に、本学における看護学教育の魅力を発信し続けてまいります。

II. 看護学部在校生を対象とした就職ガイダンス

県内の医療機関等のご協力のもと、看護学部3年次生を対象とした就職ガイダンスを実施しました。2025年度は学内の会議室を会場に、対面で開催しました。医療機関等の皆様および看護学生の双方にとりまして、より広く県内の医療の現状を共有し合う機会になったと考えています。



月 日	内 容	参加対象
2/6(金) 13:00 ～17:30	就職ガイダンス ・ 県内の主要な医療機関等 民間病院等 13施設、ほか県立病院 ・ 本学附属病院、会津医療センター附属病院 ・ 保健師(県庁、相双地域)	本学 看護学部 3年次生

III. 看護職の実践能力向上のための研修会

2025年度は、地域医療を担う看護職を主な対象とした研修会を1回開催いたしました。昨年度に引き続きWeb開催とし、オンデマンド配信も併せて実施したことで、多くの方々にご視聴いただくことができました。

医療現場において、モニター心電図は看護職にとって身近にある医療機器の1つです。しかし、その看護実践への活用に自信が持てない看護学生、看護職は少なくないと考えます。2024年度に「心電図の基本を知って、臨床実践に活かしませんか」をテーマに研修会を開催したところ、大変多くの方々にご参加いただきました。そこで今年度も、シリーズ第2弾として研修を企画したところ、看護師、看護学生をはじめ、救急救命士、医師など、多職種の方々にご参加いただきました。



- テーマ 『いつもと違う』を見抜く 看護師が知っておきたい心電図変化
- 日 時 2026年3月9日(月) 17:30～18:30
- 対 象 県内医療福祉施設の看護職およびその他の職員、大学院生・学部生、テーマに関心のある方
- 講 師 東雲 紀子氏
(福島県立医科大学附属病院看護部、慢性心不全看護認定看護師)
- 参加者 オンライン 46 アクセス。オンデマンド 46 アクセス。
(延べ 92 アクセス)

IV. 看護職の教育力・指導力向上のための研修会

2025年度は、福島県看護協会との共催により、専任教員および臨地実習指導者を対象としたフォローアップ研修を開催いたしました。少子化が進むなか、看護職の育成とともに、看護教育者・指導者の確保と育成もまた大きな課題となっています。本研修は、広大な面積を持つ福島県全域の看護職育成における多くの課題を共有するとともに、その解決に取り組む仲間存在を再認識する貴重な機会となりました。

2026年度は、今年度の評価を踏まえ、福島県看護協会主催、福島県看護学校協議会および本センター看護学教育研修部門の共催により、同様の研修会を開催する予定です。所属する組織は異なっても、福島県の看護職育成に責任と情熱を持って取り組む志は同じであることを、今後も参加者の皆様と共に確認し続けていきたいと思います。



- テーマ 専任教員と臨地実習指導者のフォローアップ研修
- 日 時 2025年9月6日(土) 13:00～16:00
- 内 容 「人を育てることの難しさ」や「看護教育の現状」をテーマに、講義と分科会を実施
- 講 師 大野薫氏(福島県看護協会 教育・事業課 課長)、
黒田るみ氏(福島県立医科大学医療人育成・支援センター
看護学教育研修部門長)
- 参加者 27名(専任看護教員8名、臨地実習指導者18名/保健師1名、
助産師3名、看護師23名)

message

社会の要請や医療現場の変化に適応しつつ、人間のもつ 温かさ・優しさの提供を忘れない看護職の育成・支援を目指します

看護学基礎教育課程においては、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正に伴い、2022年度より改正カリキュラムが導入されました。さらに2024年には、看護学教育モデル・コア・カリキュラムが改訂されるなど、社会が求める看護職像は刻々と変化しています。看護職の人材育成には、こうした社会の要請を踏まえるとともに、その人個人の能力を引き出し育むという、両面からの支援が必要になります。

看護職は本来、支援を必要とする人々の24時間の生活を支えるために、自身の持てる力を提供する専門職です。情報化・機械化が進む現代においても、その変化に適応しつつ、人間のもつ温かさ・優しさを提供できる看護職の育成と支援を行なってまいります。

医療人育成・支援センター 看護学教育研修部門長 黒田るみ



保健科学教育研修部門

医療人としての礎を築く、実践的な臨床技術教育

保健科学教育研修部門は、2021年4月の保健科学部開設に伴い設置されました。理学療法士、作業療法士、診療放射線技師、および臨床検査技師の4職種を養成する本学部では、学部全体および各学科において、高度な専門性と実践力を養うための創意工夫を凝らした教育を展開しています。

・臨床技術基礎演習

本演習は、入学直後の1年生を対象とし、4学科合同の集中講義形式で開講しています。医療接遇をはじめ、高齢者・障がい者体験、患者移動法、感染制御、心電図の計測と判読、および応急手当法などを網羅しています。これらは学科の枠を超え、医療人に共通して求められる基礎的な医科学技術および普遍的知識として習得するものです。学生からの評価も非常に高く、医療系大学での学びに接したことを深く実感できる内容となっています。



・臨床実習

医療人としての実践力を養う上で、臨床実習は極めて重要な役割を担います。本学部では、各学科のカリキュラムに基づき、1年次から4年次まで段階に応じた数多くの実習科目を編成しています。福島県内の医療機関や介護・福祉施設等のご協力のもと、学生が質の高い実習経験を積めるよう、教員一同、教育環境の充実に尽力しています。

・OSCE（客観的臨床能力評価試験）

各学科の特性に応じ、主に3・4年次においてOSCEを実施しています。本試験の実施にあたっては、模擬患者（SP）のボランティア組織「HOPEの会」のご協力を仰いでいます。現在、県内各地より60名を超える方々にご登録いただいております。定期的なSP養成講座の開催を通じて、より実践的かつ客観的な臨床能力評価体制を構築しています。

県内医療技術者への教育機会提供にむけて

本学部で養成する各医療職種が、地域医療において果たすべき役割と貢献について理解を深めるため、年度ごとに研修会の企画および実施に取り組んでいます。在学中の「卒前教育」と、免許取得後に専門職として社会で活躍する段階での「卒後教育」を円滑に接続し、一貫性のある教育体系を構築することは、教育機関における極めて重要な課題です。本部門では現在、今後ますます増加する卒業生に対し、有益な卒後教育を提供するための具体的な方策について検討を進めています。最適な研修テーマの選定や、より効果的な教育手法の探求を通じ、高等教育機関として地域医療の発展にいかなる役割を果たし得るか、今後も継続的に取り組んで参ります。

message

多職種が連携し、地域に貢献する専門医療技術者の育成・支援を目指して

保健科学部は第二期卒業生を世に送り出し、専門医療技術者の育成体制は着実にその実績を積み重ねております。これまで各学科が展開してきた創意工夫に満ちた教育により、優れた人材を地域医療の核心へと継続して輩出できていることは、我々の大きな喜びです。

本部門では、在学中の「卒前教育」から、免許取得後の「卒後教育」までを質の高いプログラムで繋ぎ、一貫性のある支援体制をさらに強固なものとして参ります。理学療法士、作業療法士、診療放射線技師、および臨床検査技師の4職種が、それぞれの専門性を発揮しながら有機的に連携し、地域の中で多職種連携の要として活躍できる医療技術者を育成することが我々の使命です。

今後も、卒業生が歩むキャリアに寄り添い、学部全体および各学科への最適な育成支援の在り方を探究し続けます。関係各位のご指導を賜りながら、地域医療の発展に寄与する医療技術者の研鑽を、組織を挙げて支援して参ります。

医療人育成・支援センター 保健科学教育研修部門長 曾根 稔雅



災害医療総合学習センター

災害医療総合学習センター (Education Center for Disaster Medicine) は、東日本大震災及び原子力災害により被害を受けた県内医療体制の再生や放射線の影響等に係る教育、研修体制の充実、人材確保を図るため 2012 年 5 月に福島県立医科大学医療人育成・支援センター内に設置されました。当センターでは、災害医療に関する知識や技能の習得にとどまらず、今後福島で長く続く放射線災害と向き合っていく医療人の育成も行っています。

教育

・BSL (臨床実習)

本学医学部5・6年生に対する臨床実習 (BSL) において、放射線被ばく医療の基礎知識を提供するのみならず、傷病者対応や実生活における放射線リスクの相場観習得を目標に講義・実習を行っています。福島第一原発事故後に我々が直面した放射線に関する課題を、臨床実習における模擬患者演習へ応用し、震災後の放射線問題をより身近に、そして主体的に考えて頂けるよう留意しています。



地域貢献

・福島災害医療セミナー

年に2回開催する本セミナーでは、福島第一原子力発電所事故対応にあたる実務担当者を中心に、多彩な背景を持つ講師陣がオムニバス形式で福島事故の経験に基づく講義・演習をWEB配信します。本セミナー受講者を対象に、福島第一原子力発電所視察コースも年1回開催しています。原子力事業所立地県・隣接県に関わらず、広く全国の皆様に、福島事故に関する最新情報をお届けすることが本セミナーの願いでもあります。

オンラインセミナーの例

11月29日 (金)

時刻	時間	形態	概要	講師	所属
17:50-18:00	10		オリエンテーション		
18:00-18:30	30	講義	放射線の基礎知識	大塚 隆	福島医大
18:30-19:00	30	講義	放射線による健康影響と福島第一原発事故	佐藤 久寿	福島医大
19:00-19:05	5	質疑応答			
19:05-19:10	5	休憩			
19:10-19:55	45	講義	原子力災害時の健康課題	坪倉 正治	福島医大
19:55-20:00	5	質疑応答			
20:00-20:40	40	講義	小児甲状腺検査の概要	志村 浩己	福島医大
20:40-20:45	5	質疑応答			
20:45-20:50	5	意見交換			
20:50-21:00	10		明日のお知らせ		

11月30日 (土)

時刻	時間	形態	概要	講師	所属
8:55-9:00	5		オリエンテーション		
9:00-9:40	40	講義	災害時のメンタルヘルス	前田 正治	福島医大
9:40-9:45	5	質疑応答			
9:45-9:50	5	休憩			
9:50-10:40	50	講義	放射線リスクコミュニケーション	田嶋 倫明	福島医大
10:40-10:45	5	休憩			
10:45-11:35	50	講義 意見交換	福島原発事故に 대응した医療者の気持ち (志賀原典との違い)	長谷川 有史 熊谷 敏史	福島医大 福島県立医科大学 福島県立医科大学 福島県立医科大学
11:35-12:00	25		意見交換会		

message

災害復興に貢献できる多様な立場のエキスパートの教育・研修体制を確立するために当センターは全力を尽くします。

本センターは、原子力事業所立地県・隣接県の如何に関わらず全国から災害医療・放射線被ばく医療を学びたいと希望するあらゆる地域や職種の皆様をセミナーに受け入れております。また、国立台湾大学、Wurzburg大学、韓国原子力医学院、陸上自衛隊化学学校とも協定を結び、医療関係者・大学関係者を受け入れております。

本学は国の高度被ばく医療支援センター、原子力災害医療・総合支援センターに指定されており、災害・被ばく医療科学共同大学院が設置され、放射線災害に関連する教育が重要な教育基盤となっております。福島事故の経験と反省をもとにした我々の活動が震災復興の一助となり、育った人達が災害医療の優れた担い手となることを願っています。

災害医療総合学習センター センター長 長谷川 有史





総合科学教育研究センター

Center for Integrated Sciences and Humanities

message

メッセージ

リベラルアーツの学びの場

総合科学教育研究センターは2008年4月、本学の総合科学教育をより効果的かつ統合的に行うことを目的に、医学部と看護学部の総合科学分野を専門とする教員をまとめ、人文社会科学系領域と自然科学系領域の2領域から構成される組織として設立されました。2021年4月に保健科学部が発足して以後は、構成人員も大幅に増え、三学部の総合科学教育を横断的に担当することになりました。そして2023年4月より、当センターは3領域（人文・社会科学領域、数物・情報・統計科学領域、生物・化学領域）からなる体制へと改められ、総合科学教育のさらなる充実を目指すことになりました。当センターは、医学部、看護学部、保健科学部のすべての教養（リベラルアーツ）教育を担当する全学部的な拠点としての役割を担っています。

リベラルアーツ教育は、専門教育への単なる準備教育ではありません。リベラルアーツは、本来「人の精神を自由にする幅広い基礎的学問・教養」を意味し、現在では「幅広い視野に立ち、物事を多面的に捉え、自分で考える能力を身につけるための教養」であると理解されています。ICTが急速に発達し、グローバル化が進む現代社会において、自ら考え、自ら課題を設定する力を涵養することが、大学の教養教育においても強く求められています。

当センターに所属する教員は、各々の多様なバックグラウンドを生かしつつ、新しいリベラルアーツの学びの場を提供したいと考えています。学生の皆さんには、リベラルアーツの講義や実習を通じて、横断的で洞察的なものの見方を身につけ、将来の学修に活かしていただきたいと思います。



総合科学教育研究センター長 松岡 有樹

message

医療の共通言語としての生物学・化学を身につけよう

生物・化学領域は主に生物学と化学を担当する教員が属しています。担当する科目は、医学部では基礎自然科学、発生生物学、進化学、医用化学Ⅰ、Ⅱ、生物学実習、化学実験など、看護学部では自然科学(生物、化学)、保健科学部では生物学Ⅰ、Ⅱ、化学Ⅰ、Ⅱ、自然科学実験などですが、その他にも本学大学院での教育や他大学・専門学校の教育にも関わっています。

生物・化学領域は、リベラルアーツを構成する領域の中でも、医学・看護学・保健科学の専門科目に直結する内容を含んでおり、ここで学ぶ多くの知識は医療の共通言語と言えます。昨今の分子生物学や生化学の急速な発展により、医療に携わる者には、生物・化学領域に関する幅広い知識と高度な技術を習得することが求められています。当領域で設定している多くの講義や実習、演習を通じて、これらの知識・技術を幅広く学んでいただきたいと思います。

センター長(兼)生物・化学領域長 教授 松岡 有樹



message

未来の医療者に必要な視座の移動、異質の理解、己の理解

人文・社会科学領域は、外国語、哲学、歴史学、心理学、倫理学、社会学、医学教育を専門とする教員で構成されています。これらの学問は、「真実は一つであり観察可能である」との前提に立ち客観的事実にのみ認識の根拠を求める自然科学とは異なり、「複数の真実があり、真実は人によってあるいは人々の間で構築される」との前提の上に成り立っています。人々の寿命が延び、多くが身体的精神的問題を抱えながら社会との繋がりを長く保つ現代において、“病むことの当事者”である患者やその家族が望む幸福は、必ずしも医学的に最善の判断と一致しません。医療者は治癒を唯一解とする医学的視座に固執せず、社会的文脈や個人の価値観を踏まえて事象を捉える必要があります。それを可能にする知を、私達は人文・社会科学に求めるのです。

人文・社会科学領域長 教授 亀岡 弥生



message

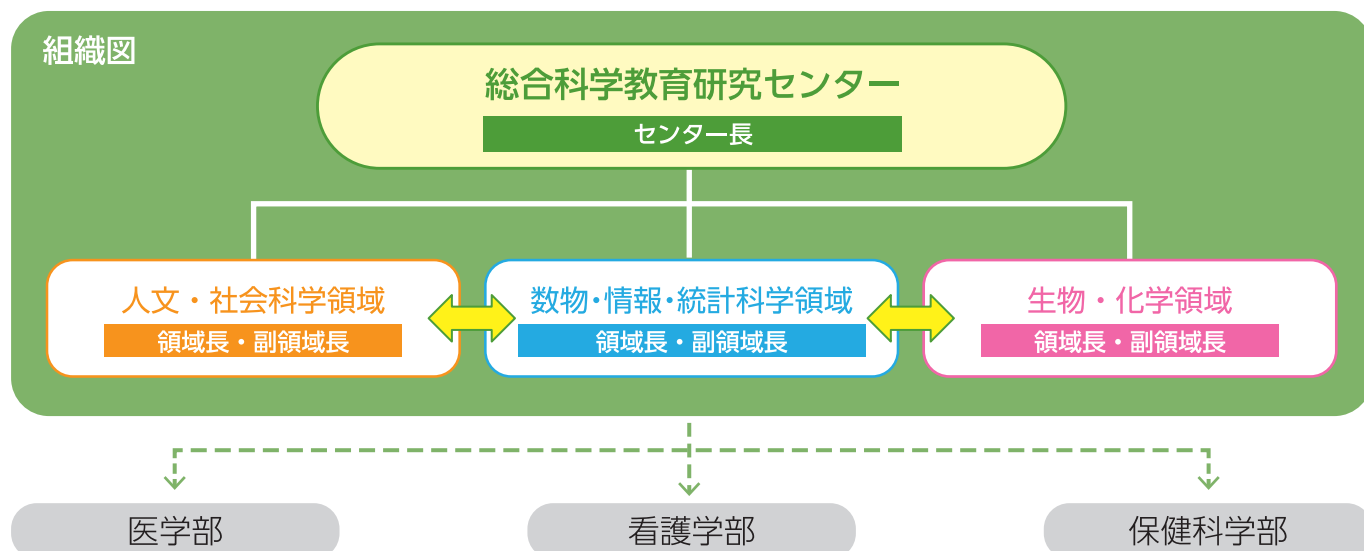
医療を学ぶための基盤となる学識の習得を目指して

数物・情報・統計科学領域は数学、物理学、情報学、および統計学などを専門とする教員によって構成されています。情報処理や統計科学、これらの基礎である数学、多くの診断装置の基盤である物理学は医学において重要な学問分野です。本領域では、各分野において高い専門性を有する教員が、それぞれの学問分野の発展に努め、かつ医学・看護学・保健科学を学ぶための基盤となる学識を身に付けるための教育に取り組んでいます。また、学内外からの参加者を対象とした各種研修会を開催するなど、多様な活動を行っています。それぞれの教員の専門性を生かしつつ、広い意味での医学における総合科学教育の実践と社会貢献を目指します。

数物・情報・統計科学領域長 教授 安部 猛



組織図



数理情報学分野

The Section of Mathematics and Informatics

数物・情報・統計科学領域



教授 中村 信裕 NAKAMURA Nobuhiro

数学、統計学、情報リテラシーをはじめ、種々の生命現象への数理的アプローチや数学的な解析方法の教育と、論文作成のための統計解析方法の指導を担当しています。また4次元トポロジーや数理ファイナンスなど、幾何学や確率解析学を基盤とする分野の研究を行っています。

言語学分野

Linguistics

人文・社会科学領域

教授 藤平 明彦アンドリュー Akihiko Andrew Tohei

学生が日本で暮らすさまざまな外国人(英語を母国語としない人も含む)との交流に慣れるために、コミュニケーション・アプローチの研究を行っています。短いスピーチ、スキット、ディスカッション、発表などを用いて、学生同士ができるだけ多くの英語を使う機会を設け、今まで身につけた英語を土台にして、新しいフレーズや医療用語も使えるように指導しています。

分子細胞生物学分野

The Section of Molecular and Cellular Biology

生物・化学領域



教授 松岡 有樹 MATSUOKA Arika

医学を学ぶ上で、最も重要な基礎科目の一つである生物学に関する教育を担当しています。生物を構造・機能・エネルギーの3つの観点から捉え、「ヒトの生物学」を重点的に教えています。また研究面では、ヘムタンパク質の構造・機能および分子進化などがテーマです。突然変異タンパク質の機能解析やX線結晶構造解析を用いて研究を進めています。

医療法学分野

The Section of Medical Law

人文・社会科学領域



准教授 中島 範宏 NAKAJIMA Norihiro

医療は医学等の諸学問の成果を社会実装したものです。したがって、医療者は社会における医療の役割や法制度についても幅広く学ぶ必要があります。法学は堅苦しい印象かもしれませんが、楽しく理解できるように指導します。また統計解析等の社会医学研究と法学研究の双方向から医療政策的課題の解決に取り組んでいます。

先端化学分野

The Section of Advanced Chemistry

生物・化学領域



教授 田辺 真 TANABE Makoto

化学技術の発展に伴い、新しい薬剤や医療材料が生み出されています。また、私たちの体は化学物質で構成され、その働きは化学法則が支配しています。化学知識の学びは、医療人として幅広い教養を深めます。有機化学・無機化学・物理化学を基盤とし、高分子化学・元素化学・ナノ物質化学などの複合分野を含めて、「医学、看護学との深い関わり」を解説する先端化学教育を目指します。

医療統計学分野

Medical Statistics

数物・情報・統計科学領域



教授 安部 猛 ABE Takeru

臨床研究およびヘルスケアリサーチにおいて、医療統計学の理解・実践は不可欠です。当該分野の教育・研究では、基礎的理論の学習に加え、研究デザインの策定、機械学習の活用、倫理的対応まで、幅広い知識と豊富な経験値の習得を目指します。

数理物質科学分野

The section of Mathematical and Material Physics

数物・情報・統計科学領域



教授 開 康一 HIRAKI Koichi

医学に用いられている診断技術はその多くが物理学の知見を基盤としています。物理学を学ぶことで医学や医療をより深く理解できます。私の専門分野であるNMR(核磁気共鳴)や物性物理学などの研究を行うとともに、医学分野における物理学教育の確立とMRI技術開発に貢献することを目指しています。

言語学分野

Linguistics

人文・社会科学領域



教授 中山 仁 NAKAYAMA Hitoshi

専門は英語学(英語を対象とする言語学)です。特に言語使用とコンテキストの関係を扱う分野である語用論を研究しています。現在は、発話解釈理論に基づいて、従来の文法の知識だけでは説明が困難な言語現象について解明を進めています。また、英和辞典の編纂を行い、研究の成果を教育や社会に還元する活動を行っています。

行動科学領域 (医学教育)

The section of Behavioral Science (Medical Education)

人文・社会科学領域



教授 亀岡 弥生 KAMEOKA Yayoi

医療技術の進歩が患者さんの人生に複雑な問題を投げかけるこの時代、行動科学、医療倫理、文化人類学は、医療者教育に欠かせない科目となっています。文化人類学的な視点で患者さんの生活を捉える授業や、低学年時に学んだ行動科学と医療倫理の知識を応用して実症例の医学的課題への対応を考える授業を担当しています。

行動科学分野 (心理学)

The Section of Behavioral Science (Psychology)

人文・社会科学領域



教授 三澤 文紀 MISAWA Fuminori

「心理学」等の科目を担当しています。医療職者は、実に様々な人々と多くの機会に接することになり、当然、人の「こころ」にふれる場面に数多く遭遇します。「心理学」等の授業では、人の「こころ」の理解には実に様々な考え方があること、そして「こころ」に向き合う方法も数多くあることを紹介しています。

生命倫理学 Bioethics

人文・社会科学領域

教授 本多 創史 HONDA Soshi

19世紀から20世紀初頭にかけての遺伝理論とその社会的応用に関して、歴史学や思想史の知見に基づき研究をおこなっています。併せて、20世紀後半から21世紀にかけて急速に発展してきた生命技術について、それをどのように用いることが倫理的に妥当なのかについても考察しています。

英語、言語学 English, Linguistics

人文・社会科学領域

教授 安田 尚子 YASUTA Takako



漫画の言語とフォーマットを用い、書き言葉と話し言葉の違いを理解し習得できる英語ライティングの研究をしています。キャラクターの性格を反映させた表現を分析し、ビジュアル情報と共に用いることで、より情報伝達に効果的なライティングを実践しています。また実際に社会貢献できるプロジェクト型英語教育を目指しています。

化学 Chemistry

生物・化学領域



教授 佐々木 道子 SASAKI Michiko

有機合成化学を専門としており、極めて不安定で従来発生させることが不可能と考えられてきた化学種を独自の手法によって捕捉することを基盤とし、これまでに例の無い形式の反応を開発すること、そして、それらの反応の機構(反応における結合形成と切断の順序、エネルギー変化)を明らかにすることを目的に研究を行っています。

遺伝統計学 Statistical Genetics

数物・情報・統計科学領域

准教授 柴田 恭子 SHIBATA Kyoko

大規模遺伝子発現データを用い、ケース・コントロール間の発現差を統計的に解析し、疾患シグニチャーと逆相関する既承認薬を同定する研究を行っています。安全性が確立した薬剤の新規適応を体系的に探索し、効率的な創薬につなげることが目的です。

総合科学教育研究センタートピックス

「キッズラボ」の開催



附属病院で入院加療しながら医大校で学ぶ小学生～中学生を対象に、センター所属教員がそれぞれの専門性をいかした実験や観察等の授業を行い、子どもたちの自然科学への興味と関心が育つ機会を提供しています。

ニュースレターの発行



センター紀要



総合科学教育を横断的に学べる充実した施設



講義棟 (6号館)



化学・微生物・免疫学実習室 (12号館)



LL教室 (8号館)

02

研究成果

本学が目指す将来像

本学の特色を生かした独創的な研究を実施し、その成果を県民はもとより広く社会に還元するとともに、高い倫理性を備えかつ高度な研究能力をもつ研究者が育成される研究拠点となる。

高度な医療人の集う日本トップレベルの臨床研究・治験拠点となり最先端の医療を県民に提供するとともに、福島県全体の医療水準を向上させる臨床研究・治験ネットワークの中核的研究拠点となる。



乳腺外科学講座

若年のBRCA遺伝子変異保有乳癌患者における
リスク低減手術と生存率との関連:国際コホート研究

研究グループ/研究者: 乳腺外科 岡野舞子・大竹徹、腫瘍内科 佐治重衡
研究代表者: Matteo Lambertini
研究グループ: BRCA BCY Collaborationに参加する5大陸109施設



医学部
乳腺外科学講座
講師
岡野 舞子

概要 論文掲載雑誌: 「The Lancet Oncology」 (2025年5月)

これまで、乳癌の既往歴を有する若年のBRCA遺伝子変異保有者におけるリスク低減手術の効果に関する確定的なエビデンスはなかった。本研究では、乳癌既往歴のある若年BRCAキャリアにおいて、リスク低減乳房切除術(RRM)またはリスク低減卵管卵巣摘出術(RR-SO)、あるいはその両方の手術と生存転帰との関連を、大規模な国際コホートで検討した。

BRCA BCY Collaborationは、国際的な後ろ向きコホート研究であり、5大陸109施設が参加している。

2000年1月1日から2020年12月31日までに、40歳以下で浸潤性乳癌と診断され、BRCA1またはBRCA2(あるいは両方)の病的変異を有する女性が対象で、合計5,290名の患者が組み入れられた。日本からは本学附属病院と郡山市の星総合病院からの患者26名の情報が登録された。本研究の結果、若年で乳癌の診断を受けたBRCAキャリアにおいて、RRMおよびRRSOはともに全生存率を有意に改善した。今後、高リスクの患者さんの意思決定に重要な影響を与える結果となった。

詳細及びお問い合わせについては、研究成果情報ページをご覧ください。 <https://www.fmu.ac.jp/research/results/seika/2025/20250507.html>

心臓血管外科学講座

マルファン症候群における補助人工心臓離脱後の
巨大左心室仮性動脈瘤

研究グループ/狩野安里、五十嵐崇、今坂堅一
福島県立医科大学附属病院 心臓血管外科学講座



医学部
心臓血管外科学講座
主任教授
今坂 堅一

概要 論文掲載雑誌: 「European Heart Journal」 (2026年1月)

我々は、マルファン症候群を有し、複数の高度な心血管手術歴を持つ36歳女性の症例を報告する。

患者は当初、重度の大動脈弁逆流症および胸部大動脈瘤に対し、大動脈基部温存術および部分弓部置換術を施行された。

1年後、急性DeBakey IIIb型解離を発症し、保存的治療が選択された。その後、逆流の再発、進行性心不全、さらには電気的ストームを来したため、大動脈弁置換術およびfrozen elephant trunkを用いた全弓部置換術、さらに左鎖骨下動脈のextra-anatomical bypass(左鎖骨下動脈バイパス)が施行され、続いて中枢型体外膜型人工肺(ECMO)管理が行われた。持続する低心拍出症候群に対しては、Nipro-Toyobo製体外設置型両心補助人工心臓への移行が必要となったが、後に回復を得て離脱した。左心室流入カフは感染なく縫合閉鎖された。術後、バイパスからの逆行性エンドリークを認め、追加のステントグラフト留置および鎖骨下動脈コイル塞栓術が施行された。

3年後、胸部圧迫感を主訴に受診した。CTでは巨大な左心室仮性動

脈瘤(7.4 × 8.5 cm)が認められた。手術所見では、補助人工心臓流入カフが左心室心尖部から離脱し、3 × 2 cmの欠損孔を形成していた。左前側方開胸により、二重層のウシ心膜パッチを用いて欠損部を閉鎖した。術後経過は良好で、第11病日に退院した。1年後の経過観察では再発を認めていない。補助人工心臓植込みに関連した仮性動脈瘤の発生はきわめて稀であり、これまで散発的な症例報告や小規模シリーズに限られている。

本症例は、生命を脅かし得る重大な合併症の存在を示すとともに、結合組織疾患を有し、複雑な心血管再建術および機械的循環補助を受ける患者において、持続的かつ高度な警戒が不可欠であることを強調するものである。

マルファン症候群に対する血管あるいは僧帽弁変性の報告は多数あるものの、補助人工心臓植込み後の心筋組織合併症の報告はありません。この意味で当論文は貴重な症例報告と言えます。

詳細及びお問い合わせについては、研究成果情報ページをご覧ください。 https://www.fmu.ac.jp/research/results/seika/2025/20250618_29.html

若年発症肺腺がんの一部にBRCA2やTP53遺伝子の 遺伝的要因が関与することを解明 ～日本人の若年発症肺腺がんを対象とした 初の大規模ゲノム解析の成果～



附属病院がんゲノム
医療診療部
教授
齋藤 元伸

研究グループ／本学研究者：呼吸器外科 山浦匠・鈴木弘行、がんゲノム医療診療部 齋藤元伸

研究代表者：白石航也、河野隆志

研究グループ：全国8施設からなる研究コンソーシアム

全研究者：Cho H, Shiraishi K, Sunami K, Momozawa Y, Yoshida T, Matsumoto S, Matsuda K, Saito M, Goto A, Honda T, Mochizuki A, Torasawa M, Daigo Y, Shimizu K, Kunitoh H, Yoshida Y, Hirata M, Shimada Y, Ueki M, Ono H, Gotoh M, Igawa YS, Tateishi A, Yamaguchi Y, Higashiyama RI, Machida E, Iwasaki M, Kawai Y, Yasuda H, Hamamoto J, Imoto I, Matsushita H, Takata S, Aoi T, Kaneko S, Kuchiba A, Shimomura A, Fukami M, Hattori K, Ozaki K, Asano Y, NCBN Controls WGS Consortium; Project BJ, Takano A, Kobayashi M, Miyagi Y, Tanaka K, Suzuki H, Yamaura T, Yoshida T, Goto Y, Horinouchi H, Miyazaki Y, Ito H, Nagashima T, Ohtaki Y, Imai K, Minamiya Y, Okubo K, Inazawa J, Shiraishi Y, Tokunaga K, Kamatani Y, Yatabe Y, Goto K, Tsuboi M, Watanabe SI, Ohe Y, Murakami Y, Matsuo K, Hamamoto R, Kohno T.

概要 論文掲載雑誌：「Journal of Thoracic Oncology」（2025年6月15日）

肺腺がんの若年発症例と非若年発症例を比較した結果、若年発症例ではTP53遺伝子、BRCA2遺伝子に生まれつき変異している生殖細胞系列病的バリエーションが多くみられることが明らかとなりました。また、BRCA2遺伝子のバリエーションを有する肺腺がん症例では、乳がんや卵巣がんなどでみられる相同組み換え修復機構が破綻している特徴が観察されました。これにより、既存の分子標的薬（PARP阻害剤）が有効である可能性が示唆されました。さらに、DNA修復に関わるALKBH2遺伝子

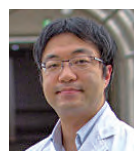
の生殖細胞系列病的バリエーションが、若年発症肺腺がんの原因の一部となることが示唆されました。

40歳以下で発症する肺腺がんは、進行期で発見される場合が多く、予後も不良であることが知られています。今後、遺伝性腫瘍の患者さんが抱える課題等を共有し、遺伝医学の知見を踏まえた新しいがん医療を築く必要性が、本研究により示されました。

詳細及び各お問い合わせについては、研究成果情報ページをご覧ください。 https://www.fmu.ac.jp/research/results/seika/2025/20250602_3.html

糖尿病内分泌代謝内科／糖尿病内分泌代謝内科・総合内科学講座

尿中タイチンを用いた2型糖尿病に おけるサルコペニア発症予測： 日本人前向きコホート研究



医学部
糖尿病内分泌代謝
内科学講座
准教授
田辺 隼人



医学部
糖尿病内分泌代謝
内科学講座
主任教授
島袋 充生

研究グループ／田辺隼人^{1,2}、滝口善規¹、堤理恵³、城間かおり¹、兵藤瑞紗³、和泉優奈³、野村和弘³、松尾雅文³、阪上浩³、島袋充生^{1,2}

1) 福島県立医科大学 糖尿病内分泌代謝内科学講座

2) 福島県立医科大学 糖尿病内分泌代謝内科・総合内科学講座

3) 徳島大学大学院 医歯薬学研究部 代謝栄養学分野

4) 神戸大学大学院 科学技術イノベーション研究科

概要 論文掲載雑誌：「Diabetes Care」（2025年8月25日）

福島県立医科大学、徳島大学、神戸大学の共同研究チームは、2型糖尿病患者において「尿中タイチン」が将来のサルコペニア発症を早期に予測できるバイオマーカーとなり得ることを、前向きコホート研究により明らかにしました。本研究成果は、米国糖尿病学会が発行する国際的医学雑誌「Diabetes Care」に掲載されました。

サルコペニアは「加齢や慢性疾患によって筋肉量・筋力・身体機能が低下する状態」であり、フレイル（虚弱）や転倒、要介護のリスクを高めることが知られています。糖尿病では、代謝異常や慢性炎症の影響によってサルコペニアの発症が加速することが知られていますが、その発症を予測する信頼性の高いバイオマーカーは確立されていませんでした。

共同研究チームは、筋肉の構造を支える巨大なタンパク質である「タイチン」に着目しました。タイチンは筋線維の収縮や構造維持に不可欠な成分であり、筋損傷や萎縮が生じると血液中に放出されて尿中に排出されます。これまでタイチンの尿中濃度は、筋ジストロフィーや拡張型心筋症など比較的小規模な疾患のバイオマーカーとして知られていましたが、糖尿病などcommon diseaseでの筋損傷やサルコペニアとの関連性は不明でした。

本研究では、福島DEMコホートに登録された2型糖尿病でサルコペニアのない444名を対象に、尿中タイチン濃度を測定し、その後約3年間にわたって毎年サルコペニアの評価を行いました。サルコペニアの診断は、骨格筋量・握力・歩行速度の3

つの要素を用いたアジアサルコペニア診療ガイドライン2019(AWGS2019)に基づいて判定されました。

追跡期間中、41名(9.2%)が新たにサルコペニアを発症、そのうち尿中タイチン濃度が高い群でサルコペニア発症率が高いこと、尿中タイチン濃度が独立した予測因子であることが示されました（標準偏差ごとの調整ハザード比1.37、95%信頼区間：1.05-1.77）。サルコペニアの構成要素のうち、特に筋力（握力）低下とタイチンが強く関連していることがわかり、早期の筋機能低下を反映している可能性が示唆されました。

さらに、時間依存性ROC解析では、1年後のサルコペニア発症予測能は、尿中タイチン単独でAUC=0.80と良好であり、年齢・性別・BMIなど臨床情報の追加でAUC=0.94まで精度が向上しました。また、年齢や肥満度、血糖コントロール状態、腎機能の違いにかかわらず、一貫して尿中タイチンのサルコペニア予測能が高いことも確認されました。

本研究は、2型糖尿病をもつ方々の「筋力低下の兆し」を、尿を用いた簡便かつ非侵襲的な方法で早期に捉えることが可能であることを示し、今後の臨床応用に向けた重要な一歩となる成果です。今後は、多施設での大規模研究による外部検証や、タイチン測定を用いた適切な予防、介入戦略、そしてこれらによる、サルコペニアの発症予防効果の検証が期待されます。

詳細及び各お問い合わせについては、研究成果情報ページをご覧ください。 https://www.fmu.ac.jp/research/results/seika/2025/20250602_5.html

放射線健康管理学講座

COVID-19のmRNAワクチンの初回接種および追加接種後の抗体価の長期分析により、ブレイクスルー感染のリスクがある個人を特定できる

放射線健康管理学講座
主任教授
坪倉 正治

研究グループ／Hyeongki Park、中村直俊、宮本翔、佐藤好隆、Kwang Su Kim、北川耕咲、小橋友理江、谷悠太、島津勇三、趙天辰、西川佳孝、小俣文弥、川島萌、阿部暁樹、齊藤良佳、野中沙織、瀧田盛仁、山本知佳、森岡悠、加藤勝洋、佐合健、八木哲也、川村猛、杉山暁、中山綾、金子雄大、横川理沙、合原一幸、児玉龍彦、上山晟史、田村友和、福原崇介、渋谷健司、鈴木忠樹、岩見真吾、坪倉正治・名古屋大学、福島県立医科大学、国立健康危機管理研究機構、千葉大学

概要 論文掲載雑誌：「Science Translational Medicine」(2025年9月18日)

【本研究のポイント】

- ・2,526名のワクチン接種者からなる福島ワクチンコホートの縦断データを解析し、COVID-19 mRNAワクチン注1)の追加接種注2)後の血中IgGスパイク(S)抗体価注3)動態に、「耐久型」「脆弱型」「急速低下型」という3つの特徴的な抗体応答パターンが存在することを明らかにした。
 - ・「脆弱型」「急速低下型」の集団に分類される人は早期にブレイクスルー感染注4)を経験していた。
 - ・ブレイクスルー感染を経験した人は、経験しなかった人に比べて、(感染前の)追加接種後100日以内の血中IgA(S)抗体価注5)が有意に低かった。
- 名古屋大学大学院理学研究科の岩見 真吾 教授の研究グループは、福島県立医科大学の坪倉 正治 教授らとの共同研究により、COVID-19 mRNAワクチンの初回2回接種から1回目の追加接種後における血中IgG(S)抗体価の変動を解析し、「耐久型」「脆弱型」「急速低下型」という3つの特徴的な抗体応答パターンが存在することを明らかにしました。さらに、脆弱型と急速低下型の人々では、他の型に比べて早期にブレイクスルー感染を経験していることも判明しました。また、ブレイクスルー感染を経験した人では、追加接種後100日以内における血中IgA(S)抗体価が、感染せずに済んだ人に比べて有意に低いことが示されました。

現在流行中のSARS-CoV-2変異株や、将来出現し得る新たな変異株への備えと、社会生活の維持を両立させるためには、COVID-19ワクチンの追加接種が不可欠です。限られた医療資源を有効に活用し、より効果的なワクチン接種体制を構築するためには、戦略の最適化が重要となります。

本研究結果により、ブレイクスルー感染のリスクが高い集団を特定し、追加接種の優

先対象とすべき人々を明らかにしました。また、低いIgA(S)抗体価がブレイクスルー感染リスクの高い人々を予測するバイオマーカーとして使用できる可能性も示しました。今後、こうした高リスク集団を早期に特定できるようになれば、より適切なタイミングでの追加接種が可能となり、感染リスクの低減につながると期待されます。

なお、本研究で用いた解析手法は、さまざまな種類のワクチン接種に応用が可能であり、柔軟性の高さから、将来のパンデミックやポストコロナ時代における個人および集団レベルの免疫強化政策の立案に貢献することが期待されます。

本研究結果は、2025年8月18日午前3時(日本時間)付で国際学術雑誌「Science Translational Medicine」に掲載されました。

【用語説明】

- 注1) COVID-19 mRNAワクチン：新型コロナウイルスSARS-CoV-2に対して用いられた、ウイルスの設計図の一部に由来するmRNAを投与する新しいタイプのワクチン。新型コロナワクチンの一つ。
- 注2) 追加接種：ワクチンの初回接種で得られた免疫を、追加の接種によって再び強化すること。時間の経過とともに低下するワクチンの効果を高め、症状を伴う感染(発症)予防や重症化予防の効果を維持・向上させる。
- 注3) 血中IgG(S)抗体価：血液中に含まれる、ウイルス表面のスパイクタンパク質(S)に結合し、ウイルスの働きを抑えるIgG抗体の量を示す値。ワクチン接種や感染によって作られ、この数値が高いほど、体内にウイルスに対する免疫が働いていると考えられる。
- 注4) ブレイクスルー感染：ワクチン接種を完了した人が、ワクチンによって誘導された免疫の壁を越えて、ワクチンで免疫した同じ病原体(ウイルス)に感染すること。ワクチン接種を完了しても、感染そのものを抑制する免疫の不足や時間の経過による減少のために、感染する場合がある。一方で、新型コロナワクチン接種により、感染しても発症や重症化するリスクが下がることが知られている。
- 注5) 血中IgA(S)抗体価：主に鼻や喉などの粘膜で働くIgA抗体の血液中での量を示す値。粘膜のIgA(S)抗体はウイルスの体内への侵入を防ぐ初期防御の役割を担っており、血中IgA(S)抗体価は粘膜IgA(S)抗体価のバイオマーカーとして感染予防効果との関連が注目されている指標の一つ。

詳細及び各お問い合わせについては、研究成果情報ページをご覧ください。https://www.fmu.ac.jp/research/results/seika/2025/20250618_2.html

福島国際研究教育機構 (F-REI) との連携

福島国際研究教育機構 (Fukushima Institute for Research, Education and Innovation。以下、F-REI) は、2023年4月に国が浪江町に新たに設立した特殊法人です。福島をはじめ東北の復興を実現するための夢や希望となるものとするともに、日本の科学技術力・産業競争力の強化を牽引し、経済成長や国民生活の向上に貢献する、世界に冠たる「創造的復興の中核拠点」を目指しています。

本学とF-REIは2023年4月5日、包括的な連携の下、研究開発のほか、人材育成、人材の交流、施設・設備の相互利用など双方の資源を有効的に活用した協働活動を推進することを目的に、基本合意書を締結しました。



F-REIにおいては①ロボット、②農林水産業、③エネルギー、④放射線科学・創薬医療、放射線の産業利用、⑤原子力災害に関するデータや知見の集積・発信の5つの分野で研究に取組むこととしており、現在は主に外部委託等により研究が実施されております。本学においてはこれまでの知見を生かし、「放射線科学・創薬医療」と「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」の分野において、次の3つの研究・事業を受託し、取組みを進めております。

第4分野 放射線科学・創薬医療

「福島復興を加速する多機関連携による RI 医薬品の開発」

本学を代表機関としたオールジャパンの体制で、バイオマーカーおよび候補化合物の探索、RI(Radioisotope)標識化合物の設計・合成などの研究を通じてがんの画期的なRI診断・治療薬を開発するとともに、F-REIの将来を担う専門人材の育成・確保を行っております。



「放射性医薬品研究・開発における規制要件の調査研究」

放射線取扱および放射性医薬品開発に関する遵守すべき複雑な国内外の法令を網羅的に把握し、放射性医薬品の研究・開発を促進するにあたっての国内特有の課題への対応を検討するため規制要件の調査研究を行っております。

第5分野 原子力災害に関するデータや知見の集積・発信

「次世代甲状腺検査法および人材育成法の開発」

県民健康調査の一つである甲状腺検査の経験をもとに、人工知能技術を活用しながら、次世代の甲状腺検査法の開発を行っております。



03

診療

福島県立医科大学附属病院
会津医療センター

message
メッセージ

県民とともに歩む病院～健康を支える医療、心温まる医療を目指して～

当院の基本理念は「健康を支える医療・心温まる医療を目指して県民と共に歩む」です。この基本理念のもと、当院は県内で唯一の特定機能病院として、高度で専門的な医療を提供し、他の医療機関では対応が難しい患者さんや重症な患者さんの治療を担います。一方、高度医療に加え、患者さんが安心できる親身な対応に努めること、そして医療安全と医療の質の向上を図ることも重要です。患者さんの一人ひとりの声に耳を傾け、医療サービスの充実とわかりやすい説明・情報提供に努めてまいります。

当院のもう一つの重要な役割は、医療人材の育成と地域医療への貢献です。将来の福島県の医療を担う人材を確保するため、高い倫理観のもと、人の命と人権、プライバシーを尊重し、県民の未来を支える誠実で高い専門性を備えた人材の育成に努めていきます。特に、若手医師の育成や県内の病院への医師派遣に加え、高度な知識と技術を備えた看護師をはじめとする医療スタッフの育成を通じて、地域医療の充実に貢献してまいります。

約650名の医師、約950名の看護師をはじめ、医療技術職員、事務職員など、すべての職員が、心と力を合わせて、患者さん一人ひとりに心の通う医療を提供できるよう、研鑽を続けてまいります。今後ともご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



福島県立医科大学附属病院病院長 藤森 敬也

附属病院の概要

福島県立医科大学の歴史をさかのぼると、明治初期に創設された白河仮病院の医術講義所にその原点を見出すことができます。それ以後、大学は決して順風満帆の時ばかりではなく廃止の憂き目を見たこともありましたが、教職員の努力や県民の皆さまの支えのおかげで、昭和27（1952）年に医科大学（新制）の設置認可があり、附属病院としての新しい歴史を刻むことになりました。その後も、インターン反対闘争や大学紛争など幾多の波を乗り越え、昭和63（1988）年に附属病院が福島市杉妻町から光が丘に移転、現在に至っております。

本院は、医科大学附属の総合病院として、39診療科・778床の施設を有し、先進医療の充実や診療体制の整備に努めております。こうした中、1日の平均入院患者数581名（令和7年度・速報値）、1日の平均外来患者数は1,506名（令和7年度・入院中外来受診者を除く。速報値）を数え、県民の皆さまに広く利用されております。附属病院ではこれからも地域を照らし、多様化する医療に対する県民の皆さまの期待に応えてまいります。



基本理念

「当病院は、健康を支える医療・心温まる医療をめざして県民と共に歩みます。」

私たち当病院に働くすべての職員は、医療人としての誇りをもって、互いに協力して県民の健康な暮らしの確保と病（やまい）克服のお手伝いをします。

基本方針

- 1 私たちは、高い倫理観のもと、命と人権とプライバシーを尊重し、患者さん一人ひとりと心の通い合う安全な医療を提供します。
- 2 私たちは、患者さん一人ひとりのニーズにこたえる最高水準の医療、先進的な医療を提供します。
- 3 私たちは、県民の未来を支える誠実で、優秀な医療人を育成します。
- 4 私たちは、地域との連携を重視し、新しい医療、より良い医療を創造します。
- 5 私たちは、日々進歩する医療の成果を県内、全国、そして世界へ発信します。

附属病院組織機構図

令和8年4月現在

附属病院

医療安全管理部、感染制御部、医療情報部、患者サポートセンター、ふたば救急総合医療支援センター、災害医療部、臨床研究管理部、病院経営戦略部、臨床医学教育研修センター

診療科（39科）

循環器内科、血液内科、消化器内科、リウマチ・膠原病内科、腎臓・高血圧内科、糖尿病・内分泌代謝内科、脳神経内科、呼吸器内科、漢方内科、腫瘍内科、総合内科、呼吸器外科、消化管外科、肝胆脾・移植外科、乳腺外科、小児外科、甲状腺・内分泌内科、甲状腺・内分泌外科、心臓血管外科、脳神経外科、整形外科、形成外科、産科、婦人科、小児科、小児腫瘍内科、眼科、皮膚科、泌尿器科・副腎内分泌外科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、心身医療科、放射線科、放射線治療科、核医学科、麻酔・疼痛緩和科、病理診断科、歯科口腔外科、救急科、リハビリテーション科

中央診療施設（32施設）

検査部、放射線部、手術部、集中治療部、総合周産期母子医療センター、病理部、輸血・移植免疫部、内視鏡診療部、リハビリテーションセンター、救命救急センター、臨床腫瘍センター、臨床工学センター、人工透析センター、痛み緩和医療センター、甲状腺・内分泌診療センター、脳疾患センター、人工関節センター、遺伝診療部、こども医療センター、移植医療部、心臓血管センター、小児・AYAがん長期支援センター、がんゲノム医療診療部、生殖医療センター、先端的低侵襲手術センター、呼吸器センター、炎症性腸疾患センター、希少がん・サルコマセンター、ドクターズアシスタントセンター、栄養管理部、材料部、臨床研究教育推進部

内部組織

中央採血室

性差医療センター

臨床研究センター

診療支援部

看護部

薬剤部

運営・管理部（病院管理課、医事課〔経営企画室（課内室）、医療連携・相談室（課内室）〕）

誰もが利用しやすい病院をめざして

大学病院としては、診療・研究・教育という機能を三位一体で進めながら「7対1看護体制の完全実施」「診療予約の機能的改善」「よりよい新医療情報システムの構築」などが積極的に整備されています。これらを背景として、大学病院では医師、看護師、薬剤師、事務局、そしてさまざまな特殊技能をもつ各種技師が一つのチームとして患者さんの病に立ち向かっています。

また、体の不自由な運転手限定駐車場を確保（おもしろい駐車場制度）するなど、来院の方が利用しやすい病院づくりを進めています。大学病院では、医療従事者、患者さんとその家族がともに手を携えて病氣とたたかい、よりよい医療を構築していこうと努力を重ねています。



医療体制の充実

脳卒中・心臓病等総合支援センター

一 地域の命を守る“支援のハブ”一

当センターは、脳卒中・心臓病に係る福島県全体の医療水準向上を目指し、専門的な支援と情報発信を行う拠点として設立されました。以下の4つの柱を中心に、県民の皆さまの健康を支えています。

◆1 相談業務

在宅医療や介護、支援制度の案内などに、スタッフが丁寧に対応し、不安の軽減と適切な機関への橋渡しなどを行います。お問い合わせは、平日 8:45～17:00 電話 024-547-1045 まで。



◆2 地域住民への情報提供

脳卒中・心臓病の予防や早期受診の重要性などを、講演会やイベントなどを通してわかりやすく発信し、日頃から健康を守るための知識を得られるよう、啓発活動を展開していきます。

◆3 医療機関等への研修会・勉強会

多職種が最新の医療知識や技術を共有できる研修を実施し、地域全体で質の高い医療を提供できる体制づくりを支え、医療従事者のスキル向上に貢献していきます。

◆4 情報資料の提供

住民向けの啓発資料などを作成・提供し、誰もが必要な情報にアクセスできる環境を整え、地域医療の底上げを図っていきます。



患者サポートセンター

地域の医療機関からの紹介患者さんをスムーズに受け入れる調整窓口業務を行うとともに、入院中の患者さんやその家族からの相談に対応しながら、必要に応じて地域の医療機関や福祉機関と連携して在宅療養や転院を調整し、切れ目のない医療・福祉サービスの提供を目指しています。

また、入院前面談を通して、入院前から患者さんの身体的、精神的、社会的問題を把握し、多職種が連携した支援を行っています。

さらに、診療科を超えた病床の一元管理を行い、効率的に病床を活用することで、患者さんの治療が遅延なく行われるよう取り組んでいます。



看護部

看護部は、「県民の健康を守るため豊かな人格と感受性を持ち、質の高い看護を提供します」を理念としています。

看護単位は24単位、新たに福島医大式看護システムの看護提供体制をとり、患者さんへのベッドサイドケアの充実をはかり、患者さんやご家族の思いを尊重した温かみのある看護を提供しています。

新人の教育体制はプリセプター制をとり、病院・看護部・所属全体で指導・支援をしています。また、特定の看護分野においては、優れた知識と技術を持つ「専門看護師、認定看護師、特定行為に係る看護師」が多数在籍し、教育や看護実践モデルとして活躍し、看護の質向上をめざしています。



小児外科

私たちは新生児から16歳未満の小児の手術を行います。その疾患の多くは体表や内臓の先天的な形成異常です。当科では年間およそ300件弱の様々な手術を行っています。小児外科の手術では、手術時期、手術法、一期的手術か多段階手術か等について、その病態や患児の全身状態を考慮した綿密な治療戦略を練る必要があります。また小児特有の未熟な生理機能を考慮した丁寧な周術期管理を行わなければなりません。術後の数十年にわたるQOLを考慮しつつ、傷は小さく、

低侵襲な手術を行うというのが私たちの基本理念です。このため腹腔鏡や胸腔鏡（補助下）による手術を積極的に行っています。また胸・腹部の悪性腫瘍の手術、外傷の治療、また肝臓移植などの高度医療を関連する各部署と連携を取りながら行っています。

こどもたちの笑顔のために、またそのこどもたちが成長し、この地域を支える大人になっている姿を思い描きながら、診療に励んでいきたいと思っています。



都道府県がん診療連携拠点病院

当院は、平成19(2007)年1月から厚生労働大臣より「都道府県がん診療連携拠点病院」の指定を受け、我が国に多いがん（肺がん、胃がん、肝がん、大腸がん、乳がん等）について、高度な医療を提供するとともに、地域のがん医療に従事する医師、看護師などを対象とした

がんに関する研修を行っています。がん診療を統括する中央部門として臨床腫瘍センターが設立され、各部門が診療科の垣根を越えて連携し、きめ細かな医療の提供を目指しています。

日本医療機能評価機構認定病院

病院機能評価は、公益財団法人日本医療機能評価機構が病院組織全体の運営管理及び提供される医療について評価する第三者評価です。当院は、平成18(2006)年12月に認定を受けた後も更新を繰り返しており、令和5(2023)年12月に4回目の認定を受けました。

当院が受審した「一般病院3」は、高度の医療の提供、高度の医療技術の開発・評価、高度の医療に関する研修を実施する病院等を対象とする機能種別であり、「患者中心の医療の推進」「理念達成に向けた組織運営」等の観点に基づく全ての評価項目において「適切に行われている」または「一定の水準に達している」との評価を受けました。

今後も地域の皆様から信頼される大学病院であり続けるため、病院機能の向上に継続して取り組んでまいります。





ドクターヘリの運航について

東北初となるドクターヘリが、平成20(2008)年1月から運航を開始しています。ドクターヘリとは、救急専門の医師と看護師が同乗して救急現場へ駆けつけ、救急隊と協力してすばやく適切な救急処置を行いながら患者さんを最適な病院へ早急に搬送するものです。ヘリコプターは時速約200キロですので、福島県立医科大学から会津若松市までわずか15分で到着することができます。

運航は365日で県内全域を対象としています。出動は消防の救急司令室の要請に限定していますので一般の方からの直接要請はお受けできませんが、令和7(2025)年度は、347件の出動がありました。これらの活躍のほかにも、平成20(2008)年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震、平成23(2011)年3月11日に発生した東日本大震災では、現場派遣及び重症患者さんの搬送業務などを行いました。また、平成25(2013)年3月には、山形県ドクターヘリ、平成25(2013)年10月には、新潟県ドクターヘリ、平成26(2014)年6月には茨城県ドクターヘリ、平成29(2017)年4月には宮城県ドクターヘリと広域連携協定を締結し、それぞれの基地病院から概ね100km圏内において、互いに互に出動できるようになりました。ドクターヘリの今後の活躍にご期待ください。

ドクターヘリの特徴

ドクターヘリは現在46都道府県で57機(令和8(2026)年3月現在)が運航しており、運航スタッフは操縦士、整備士、そしてCSと呼ばれる運航管理者の3名が1チームとなり、365日休むことなく交代で待機し出動に備えています。

出動要請のホットラインを受けると3分程度で離陸準備を完了。関係するスタッフに対して一斉に出動指示を出す体制となっています。福島県ドクターヘリには、操縦士、整備士、医師、看護師、患者さんなど最大6名の搭乗が可能です。機内にはストレッチャー1台と多くの医療機器が備え付けられています。

ふたば医療支援

未曾有の原発事故による惨事を受けて、本県の復興事業を担う柱の一つとして、原発避難地域の医療の再建は本学の歴史的使命です。そこで本学は、双葉地域の帰還住民、原発作業員、復興事業等に従事する作業員の健康を守るとともに、医療面での不安を解消し帰還を促進することを通じて、双葉地域の復興を医療面から支えます。

平成 28 年 4 月、双葉地域の二次救急医療の確保と広域的な総合医

療支援を目的として、本学は、「ふたば救急総合医療支援センター」を設置しました。平成 30 年 4 月に「福島県ふたば医療センター附属病院」が富岡町に開院されたことから、ふたば医療センター附属病院に対する医師派遣、遠隔診療等の支援のほか、多目的医療用ヘリを担当する医師の派遣を通じて、双葉地域の医療体制整備へ向けて全面的に支援しています。

ふたば救急総合医療支援センターの主な取組み事業内容

福島県ふたば医療センターの支援

- 医師の派遣調整と診療支援
- ふたば医療センターと連携し、地域医療に関心を持つ学生の受入れや人材の育成を支援
- 双葉地域で開催される研修会・講習会等を支援

双葉地域の住民等への医療支援

- 未治療者・重症化予防の個別指導
基礎疾患を有していながら管理が十分にできていない、あるいは医療に結び付いていない住民の健康の悪化・重症化予防対策の支援
- 認知症の早期診断・対応の支援
双葉地域8町村が設置する認知症初期集中支援チームへのサポート医の派遣、チーム員会議の開催支援
- 広報紙の発行
双葉地域8町村と県内避難者に対して、ふたば医療センターの取組と生活習慣病等の予防について情報発信

双葉地域での多目的医療用ヘリの運航を支援します

平成30年10月より、多目的医療用ヘリの運航を開始しました。ふたば医療センター附属病院を運航基地とし、双葉地域の救急現場や浜通りの医療機関を中心に運航しています。

格納庫や通信室を福島県立医科大学附属病院内に設置し、ドクターヘリとの役割分担により効果的な運用を行っています。

運航内容

- ①双葉地域で発生した救急患者への対応（ドクターヘリの対象とならない比較的軽症の患者搬送を担当します）
- ②浜通りの医療機関と高度専門的な治療が行える医療機関との間の広域的な患者搬送
- ③専門の医師、医療スタッフや医薬品、医療資機材の搬送

運航の効果

- ①双葉地域での救急医療の質の向上
- ②医療機関への搬送時間の短縮による患者の重症化防止や移動中の負担軽減



多目的医療用ヘリ



多目的医療用ヘリの格納庫

福島県ふたば医療センター附属病院と本学の関わりについて

双葉地域の二次救急及び必要な医療の確保のため、ふたば医療センター 附属病院に対して、福島県立医科大学は以下の支援を行います。

①教員派遣

ふたば医療センター附属病院に対して、ふたば救急総合医療支援センター及び学内支援講座から教員を派遣し、24 時間体制の診療を支援します。

②診療支援

ふたば医療センター附属病院から高度・専門医療を必要とする患者を受け入れるとともに、画像診断を含めた遠隔診療支援を行うことにより、質の高い医療の提供を支援します。

③人材育成

ふたば医療センター附属病院と連携して、学部学生教育、医師・医療スタッフの育成を支援します。

福島県ふたば医療センター附属病院概要

地域住民や復興事業従事者の安心を医療の面から支え、双葉地域の復興に貢献します。住民等の健康を守る医療・信頼される医療をめざし、地域住民とともに歩みます。

3つの安心を医療面から支えます

住民が安心して帰還して生活できる

復興事業従事者が安心して働ける

企業等が安心して進出できる



病院概要

診療科: 救急科・内科

所在地: 双葉郡富岡町大字本岡字王塚817-1

病床数: 30床 全室個室

医療スタッフ: 医師、看護師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、社会福祉士

提供する医療など

福島県立医科大学の全面的バックアップにより地域に必要な医療を提供します。
また、福島県立医科大学の双葉地域での健康増進支援等の活動を引き継いで行います。

診療

24時間365日対応します。

- ・一次救急、高度医療や専門医療を必要としない二次救急
- ・休日夜間など地域の医療機関が開院していない時の急病
- ・かかりつけ医からの紹介

高度な医療や専門医療が必要な場合、適切な病院に多目的医療用ヘリなどで搬送します。回復後に継続した治療が必要な場合、ふたば医療センター 附属病院で治療を継続します。医療スタッフが協働して安心・安全な医療を提供します。

在宅復帰支援

在宅で療養が継続できるように入院中に個別的な支援を行います。
患者さんやご家族の思いに沿った支援をマネジメントします。

在宅診療

地域の医療機関からの依頼により、訪問診療及び訪問看護を行います。お一人お一人の在宅療養を支えます。



救急入口



初療室

きぼう棟 1F



玄関ホール・総合案内

行きたい先の外来や窓口等が、優しい色づかいとアルファベットで分かりやすく整理されており、患者さんやそのご家族なども移動しやすい玄関ホール。総合案内でもご案内しています。



リハビリテーションセンター

医師・看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士がおり、患者さんの機能維持・回復のためにリハビリを実施しています。



コーヒーショップ

玄関ホールの一角にあるコーヒーショップ。病院利用者、職員、医大生など、幅広い利用があります。



放射線部 X 線撮影室(子どもルーム)

室内には、緊張している小児患者さんの心を和らげてくれるイラストがいっぱい。福島西高等学校デザイン科学科の生徒の皆さんに描いていただきました。



内視鏡診療部(きぼう棟4F 東へ移動)

上部・下部消化管、胆膵などの内視鏡検査・治療を中心に、安全かつ効率的で高度な診療を目標にしています。

- A1 循環器内科／心臓血管外科
- A2
- B1
- B2 消化器内科
- B3 リウマチ・膠原病内科／総合内科
- B4 心身医療科
- C1 患者サポートセンター／医療連携・相談室
- D1 整形外科
- D2 緩和ケアセンター
- E1 リハビリテーションセンター(循環機能訓練室)(言語聴覚室)
- E2 リハビリテーションセンター(運動・呼吸機能訓練室)
- F1 放射線受付
- F2 呼吸器内科
- G1 G2 X線撮影室
- H 高エネルギー放射線治療棟
- I MRI棟
- J1 CT室
- J2
- L PET検査室・核医学室
- W1 中央採血室





壁画は、『草木が芽吹き、新しいいのちが生まれる春。キビタキの森でも長い冬が終わりを告げ、あたたかな春風が吹きはじめ、キビタキ達も春の訪れに喜び、森を飛びまわり、小鳥たちも自分で飛ぶのが上手になってきた。』そんな喜びに満ちた福島県の春の森の風景を表現しています。また、東日本大震災のような災害が起きた場合、ここはトリアージスペースになるほか、酸素等も配置した治療室にもなります。

みらい棟 2F



患者さんが安心してがん治療を受けられる環境を整えています。専門スタッフが安全管理に万全の体制で取り組み、治療中も少しでも前向きな気持ちになれるようサポートを心がけています。



医療相談員が患者さんや家族に対する各種相談
に応じています。当院で治療を行っていない方でも、
来所のほか、電話での相談も可能です。
電話相談受付時間／平日8:30～17:00
TEL024-547-1088(直通)



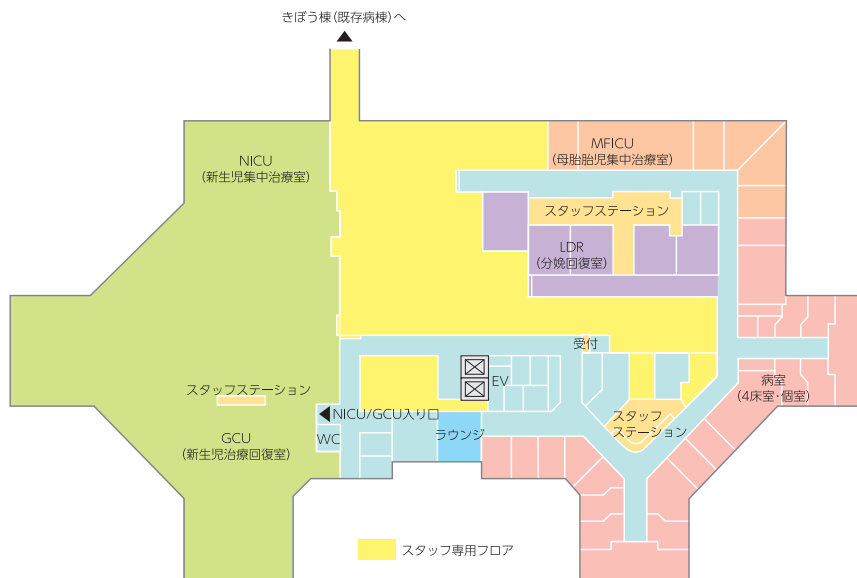
感染症などの疾患はもちろん、
新生児・未熟児、小児集中治療、
循環、神経・発達、血液・悪性腫
瘍、腎臓・アレルギー・代謝・内
分泌、小児外科疾患など、幅広い
分野の診療に取り組んでいます。

みらい棟 3F

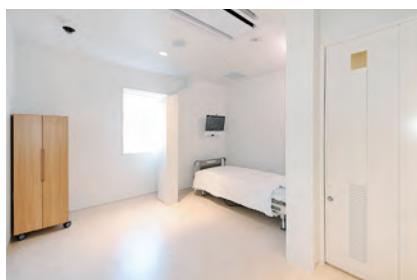


総合周産期母子医療センター

母胎・胎児部門と新生児部門からなり、部門間でカンファレンスを行いながら、医療の質の向上と円滑な運営・維持管理に努めています。

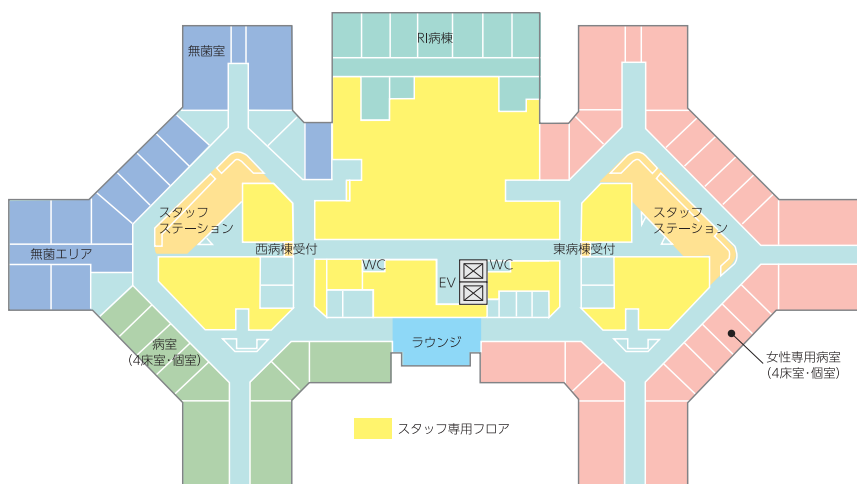


みらい棟 4F



R1病棟

放射性薬剤を投与して悪性腫瘍等の治療を行うR1病棟を備え、治療に専念できる環境で高度な医療を提供します。



みらい棟 5F

小児病棟 プレイルーム

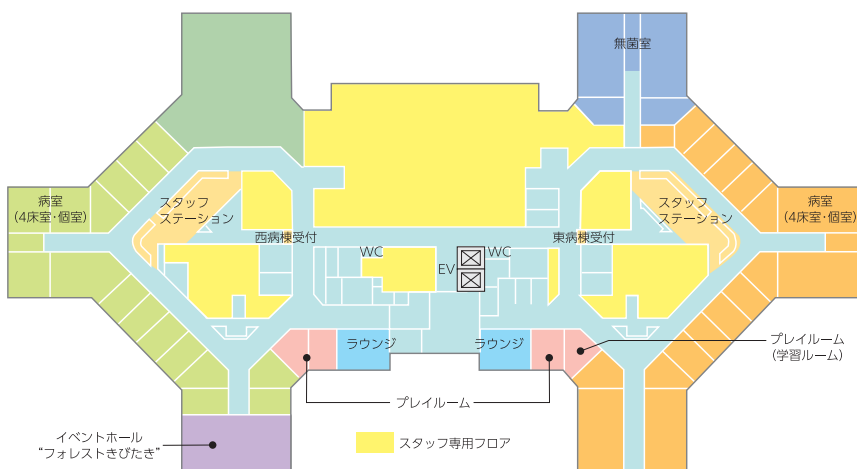
森の中でさまざまな生き物たちが遊んでいる様子が描かれています。ここでは子供たちも森の仲間と一緒に森の時間を過ごします。



こどもたちが、部屋を覗いただけで、ワクワクするような楽しめる空間づくり



“学びの空間”入院しながらも年齢に合わせて勉強に集中できる環境整備



イベントホール“フォレストきびたき”



特別室

先進的な医療を提供し、
会津地域全体の医療を支える

会津医療センター

会津医療センターは、福島県立医科大学の施設として開設しました。
診療・教育・研究機能を備えた施設として、地元の医療機関との機能分担、
相互補完、連携を行いながら、会津・南会津地域の医療を支えています。



県立会津総合病院と県立喜多方病院は会津地域全体の医療を支える
福島県立医科大学会津医療センターとして生まれ変わりました。

診療科目

総合内科／漢方内科／漢方外科／循環器内科／
血液内科／消化器内科／糖尿病・内分泌代謝内
科／腎臓内科／呼吸器内科／感染症内科／心身
医療科／消化器外科／呼吸器外科／整形外科・
脊椎外科／眼科／皮膚科／泌尿器科／耳鼻咽喉
科／放射線科／麻酔科／病理診断科／歯科／リ
ハビリテーション科／緩和ケア科／心臓血管外
科／救急科
(附属病院:26診療科)※院内標榜の診療科を含む
附属研究所:漢方医学研究室鍼灸部

当院は公益財団法人日本医療機能評価機構
の認定を受けております。2015年に初回の
認定を受け、2025年に更新いたしました。
同機構は患者様が適切で質の高い医療を安心
して享受できるよう、第三者機関として医療
機関の評価を行っており、当院がこの基準を
達成していることが認められました。
今後も医療の質・安全の向上を目指しなが
ら、地域医療に貢献してまいります。



【医療・教育・研究を支える拠点】

「会津医療センター」は、大学施設として
先進的な医療を提供し、学生・研修医の教
育・研究の場となります。また、感染症対策・
へき地医療支援などの政策医療に取組むと
ともに、地域医療機関との連携・協力により、
会津地域全体の医療を支える機能を果たし
ます。

【専門領域に特化した高度な医療の提供】

「会津医療センター」には、「漢方医学セン
ター」、「血液疾患治療センター」、「最先端内
視鏡診断治療センター」、「脊椎・脊髄先進医
療センター」などを設置し、専門領域に特化
した高度な医療を提供します。また、がん患
者に快適な療養環境を提供する「緩和ケア病
棟」を設置しました。

【大学附属施設としての研究機能】

「会津医療センター」には附属研究所を設
け、民間企業等との提携による医工連携研究、
会津エリアを広くカバーする臨床疫学研究な
ども力を入れます。また、松平・保科氏
により設置された御薬園での生薬栽培の歴史
も踏まえ、「漢方医学研究室」を設置し、生
薬の栽培や鍼灸治療の研究を行います。

基本理念

高度な先進医療の研究・開発に取り組み、人間性豊かな優れた医療人の育成に努め、子どもからお年寄り
まで全ての患者さんに安全で質の高い医療を提供し、新しい地域医療の創造に貢献します。

会津医療センターの目標

私たちは、基本理念を実現するために、
次のことを目指します。

- 1 命と人権とプライバシーを尊び、高い倫理観のもと、患者さん中心の心温まる医療を提供します。
- 2 患者さん一人ひとりのニーズにこたえ、安心できる最高水準の医療、先進医療を提供します。

- 3 人々の命と未来を支える誠実かつ優秀な医療人を育成します。
- 4 地域の医療・研究・産業の力を統合し、新しい医学・医療を創造します。
- 5 日々進歩する医学・医療について、県内、全国、そして世界へ情報を発信します。

患者さんの権利と お願い

会津医療センターは福島県立医科大学の一部門であり、診療とともに教育、研究を行う機関としての役割を担っており
ます。会津医療センターの附属病院である当院は、患者さんの尊厳を尊重するとともに、患者さんに安全で質の高い医療を
提供するため、「患者さんの権利とお願い」を定めています。

○患者さんの権利

1. 患者さんは、良質で安全な医療を公平に受ける権利があります。
2. 患者さんは、病気のことや治療について、理解しやすい言葉や方法で十分な説明を受ける権利があります。
3. 患者さんは、自分の意思で検査や治療方法を選択し、望まない医療を拒否する権利があります。
4. 患者さんは、自分が受けている診療内容について、患者さんと主治医の間で最善の治療かどうかを相談し判断するために、別の医師の意見を求める権利があります。
5. 患者さんは、自らの個人情報とプライバシーを守る権利があります。また、自分が受けている医療を知るために、診療記録の開示を求める権利があります。
6. 当院は、教育機関としての使命を担っています。患者さんには、教育・研

究に関しては十分な説明を受けたうえで、自ら参加を決定または拒否する権利があります。

○患者さんへのお願い

1. 良質で安全な医療を受けられるように、ご自身の健康に関する情報をできるだけ正確にお話ください。
2. 理解できない医療内容は、ご自身が納得できるまでお尋ねください。
3. ルールとマナーをお守りいただき、他のすべての患者さんが快適な環境で医療をうけられるよう、ご配慮ください。
4. 患者さんが継続性のある適切な医療を受けられるよう、地域医療機関との機能分担や連携の推進を図りますので、ご理解とご協力をお願いします。
5. 当院は、教育機関としての使命を担っています。医療人の育成にご理解とご協力をお願いします。

**会津医療センター長**
大田 雅嗣 OHTA Masatsugu

最新の医療を提供、地域医療機関と連携し、会津医療圏の医療を支えます。
学生・研修医への教育体制を強化し、将来、地域を支える医療人を育てます。
臨床研究の成果を質の高い医療へ還元します。

会津医療センターは診療・教育・研究の機能を有する福島県立医科大学の会津キャンパスとして、2013年5月に開設されました。2026年には開設13年を迎え、会津医療圏での医療体制の強化に大きく貢献してきました。医療を取り巻く様々な環境のなかで、人口減少、少子高齢化などの問題に向き合い、これからの地域医療のあり方を考えていきます。診療・教育・研究を包括する「地域医療の福島モデル」を今後も実践し、会津地域の皆さまの健康長寿に寄与できるよう、職員一丸となって取り組んでまいります。

- 附属病院各診療科が先進的な医療を提供します。漢方医学センター、血液疾患治療センター、最先端内視鏡診断治療センター、脊椎・脊髄先進医療センターを設置し専門領域に特化した治療を提供しております。難治性疾患等に対する全人的治療を目的とし、緩和ケアセンターを運用しています。
- 福島県立医科大学医学部・看護学部・保健科学部の学生、当センターで研修を受ける初期研修医、専攻医への指導体制を強化し、将来の医療の担い手を育ててまいります。我が国で類を見ない鍼灸研修制度により卒後教育として現代医学も踏まえた高い臨床能力を有する鍼灸師の育成を行っています。
- 他大学、民間と共同し、人工知能を用いた画像診断の開発に取り組んでいます。漢方医学研究所では薬用植物の栽培を支援し、生薬の地産地消を実践しています。

**病院長**
横山 斉 YOKOYAMA Hitoshi

会津医療センターは、福島県立医科大学の附属病院として開設以来10年余を迎え、この間、日本の医療を取り巻く環境は大きく変化してきました。とりわけ地域医療においては、高齢化の進行、医療需要の増大、医療資源の偏在といった課題が顕在化しており、持続可能な医療提供体制の再構築が求められています。

本センターは、「地域医療支援」と「高度医療・教育・研究」を両輪とするハイブリッド型大学病院として、これらの課題に対応してきました。単に高度医療を提供するだけでなく、地域全体の医療機能を俯瞰し、医療機関同士の連携を強化することで、限られた資源を最大限に活用する役割を担っています。近年では、救急医療の逼迫や急性期病院における「出口問題」への対応が重要な課題となっています。当センターでは、重症救急を担う医療機関との役割分担のもと、中等症・軽症患者の受け入れを担う体制を整備するとともに、新たに救急科を設置し、地域救急の安定化に貢献しています。

また、医療DXの活用にも積極的に取り組んでおり、へき地医療機関とのオンライン診療支援や遠隔医療連携を実装しています。これにより、医師不足地域においても継続的な医療提供を可能とし、新たな地域医療モデルの構築を進めています。

さらに、当センターの特徴の一つである漢方医学を含む統合医療の実践は、患者一人ひとりに寄り添った医療の実現に寄与しています。総合内科を中心とした全身管理の視点と専門診療科の高度な技術を融合することで、質の高い医療を提供しています。

今後は、2040年を見据えた医療提供体制の再設計に向け、地域との連携を一層深化させるとともに、オンラインと対面を組み合わせた柔軟な医療体制へと進化していきます。当センターは、地域に根ざした大学病院として、広大な会津地域の医療を支え続けるとともに、全国に発信可能なモデル構築に取り組んでまいります。

総合内科学講座

Department of General Internal Medicine

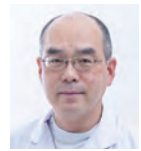


教授 鎌田 一宏 KAMATA Kazuhiro

あらゆる内科疾患における診断と初期治療を担当します。疾患の種類や程度によっては迅速に各科専門医や専門病院に紹介し、適切な治療の手助けを行います。高齢者では多くの疾患が併存することがよくあります。このような場合は当科が中心になり専門医と協力し治療にあたります。また地域医療では総合的な診療能力を持った医師が必要ですので、そのような医師の育成にも取り組んでいます。総合内科と専門診療科が連携することにより、効率性が良く質の高い医療を提供することができます。

漢方医学講座

Department of Japanese Traditional (Kampo) Medicine



教授 田原 英一 TAHARA Eiichi

漢方は古代中国に起源を発し、1500年の歳月を経て日本化された伝統医学で、湯液（漢方薬）治療と鍼灸治療が主な分野です。病気を持つ生体の漢方医学的病態（証）を主に五感を用いて推定し、その証に対応した治療の効果により診断を確定する、治療学主体の医学です。西洋医学と異なる病態把握法と治療手段（漢方薬、鍼灸手技）の両面を活かして臨床に貢献し、東西両医学を融合した医療体制の構築を目指しています。外来、入院を含む診療体制の整備、臨床実績の蓄積、卒前・卒後から教員養成まで種々の段階における教育、漢方薬の品質や地産地消を目指した研究、鍼灸の臨床研究などを実践中です。

循環器内科学講座

Department of Cardiovascular Medicine



教授 鶴谷 善夫 TSURUYA Yoshio

循環器内科の診療領域は、虚血性心疾患などの心血管疾患、不整脈、心不全、高血圧など多方面にわたっており、治療手段も、一般療法や薬物治療、各種のデバイスを用いた高度先進治療などやはり多岐にわたります。その中で医療根拠を基礎としながら、適切な治療を提供することで、会津地域の医療の発展に貢献したいと考えます。研究面では、高齢化が進み、かつ広大な面積を有する会津地域という特性を考慮し、医工連携を通じて患者様の疾病管理に役立つ手法の確立を目指したいと思っております。医療の継続には後進の育成が重要であり、教育面にも力を注いでまいります。

消化器内科学講座

Department of Gastroenterology



教授 富樫 一智 TOGASHI Kazutomo

小腸・大腸内科では、画像強調内視鏡(BLI/NBI)・ダブルバルーン内視鏡・カプセル内視鏡・大腸3D-CT検査を用いて、小腸から肛門にいたる消化管疾患の診断治療を行っています。2022年度からは、消化器内科と協力して、消化器疾患全般の診療も担当します。最近では、若年患者の多い潰瘍性大腸炎・クローン病にも力を入れて取り組んでいます。研究面では、国内外の医療機関との多施設共同研究を行い、2020年度は7編の英語原著論文を出版しました。特に、会津大学との共同研究(AIによる自動診断装置の開発)は全国的にも注目され、科学研究費の獲得に至っています。

血液内科学講座

Department of Hematology



教授 角田 三郎 TSUNODA Saburo

血液疾患は発症時から様々な全身症状を伴い、あらゆる臓器の障害を伴います。また、急性白血病や悪性リンパ腫等、生存に関わる重篤な疾患が多く、速やかに診断をつけ、速やかに治療を開始する必要があります。そのあと長期間の治療を要します。患者さんには身体的にも精神的にも大きなストレスが加わり、積極的な全身管理、精神的サポートが必要となります。そのため医療者と患者、家族との関係は濃厚となります。発症から転帰まで、病状の推移、合併症、副作用、感情の起伏を受け止め、私たちスタッフとともに、病氣と、その人生に与える影響を深く洞察していきましょう。



教授 高木 忠之 TAKAGI Tadayuki

消化器内科は会津の地域医療を支えることを基本に、小腸・大腸内科の先生方とともに、上部・下部消化管疾患や肝胆膵疾患まで、すべての消化器疾患を対象に診療・教育・研究を行っています。

消化器疾患は、さまざまな病態や悪性腫瘍などが多く存在する領域です。適切な診断・治療を行うのみならず、消化器内視鏡を用いた早期発見に寄与する新たな診断法や、治療困難例に対する内視鏡治療法開発に取り組む、会津医療圏に提供することで貢献してまいります。

会津医療圏は非常に広大であり、地域の病院やクリニックとの連携を密にすることが重要であり、会津地域全体での消化器診療の充実とレベルアップにも貢献できるよう精進してまいります。

糖尿病・内分泌代謝・腎臓内科学講座

Department of Endocrinology, Metabolism, Diabetology and Nephrology



教授 橋本重厚 HASHIMOTO Shigeatsu

糖尿病、代謝疾患、高血圧、そして腎疾患は、生活習慣が密接に関与し、放置すると脳・心血管合併症、骨粗鬆症、腎不全、認知症などを引き起こし、生命予後や QOL に大きな影響を及ぼします。一方、これら生活習慣病の中には、原発性アルドステロン症やサブクリニカルクッシング症候群のように根治可能な内分泌疾患が少なからず潜在しており、これらを早期に見つけて診断し、正しい治療に導くことも重要です。当科では、最新のエビデンスと基礎的研究から得られた知見に基づき、患者様一人一人の生活背景や個々の合併症を考慮し、全人的な医療提供を行っています。会津地方は日本でも有数の高齢化が進んだ地域で、生活習慣病の治療は大きな社会的・医学的課題です。当科では、基礎・臨床研究を通じて、その発症機序の解明・予防法の確立・治療法の改良と開発を目指しております。

精神医学講座

Department of Neuropsychiatry



教授 川勝 忍 KAWAKATSU Shinobu

高齢化社会に伴い、認知症の増加、高齢者のうつ病と自殺の問題などが大きな社会問題になっておりますが、会津地区も例外ではありません。当科では、専門医による高度な診察とともに MRI や SPECT などの最新の画像診断機器を駆使して、認知症の早期診断、鑑別診断を行っています。家族性アルツハイマー病の DIAN-J 研究や前頭側頭葉変性症の FTLD-J 研究など全国的な研究にも参加しております。その他、精神科疾患全般の臨床にも力をいれており、緩和ケアチーム、緩和ケア病棟も含めた心身医療を得意分野としております。

呼吸器外科学講座

Department of Thoracic Surgery



教授 樋口 光徳 HIGUCHI Mitsunori

呼吸器外科では、肺癌をはじめとする胸部悪性腫瘍を中心に、縦隔腫瘍、感染性疾患、嚢胞性疾患に対する外科治療を行っています。診断から手術、化学療法、緩和医療まで一貫して関わり、胸部腫瘍に対する総合的な診療を提供しています。

近年はロボット支援手術が普及しており、当科でも最新のダヴィンチシステムを導入し、低侵襲で精度の高い手術を実施しています。

会津地域は広域かつ高齢化率が高く、呼吸器疾患診療において多くの課題を抱えています。地域医療機関との連携を強化し、地域で完結する質の高い医療の提供を目指しています。

整形外科科学講座

Department of Orthopaedic Surgery



教授 白土 修 SHIRADO Osamu

整形外科は、骨・関節・神経(脊椎・脊髄)・筋肉など「運動器」と呼ばれる器官の病気や外傷を診断し、治療する診療科です。会津医療センターでは、特に脊椎・脊髄疾患の治療・研究に重点を置くため、「整形外科・脊椎外科」と呼称し、「脊椎・脊髄高度先進医療センター」を併設します。高齢化社会の進む会津地方の特徴から、腰部脊柱管狭窄症、側弯症、頸髄症、骨粗鬆症、圧迫骨折、椎間板ヘルニアなどが主たる対象疾患です。当然、一般的な関節疾患・外傷もカバーし、手術からリハビリテーションまで、臨床研究から基礎研究へと幅広い活動を行い、「会津から世界への発信」が究極の目標です。



教授 岩淵 真澄 IWABUCHI Masumi

整形外科・脊椎外科では日常診療の他に、骨粗鬆症に対する院内多職種による活動を展開しております。会津地域は高齢社会が進んでいることから、骨粗鬆症性骨折予防の重要性を認識した我々は、2015年に「骨粗鬆症専門ケアチーム」を立ち上げました。骨粗鬆症に関する業務を専門的に行うためのスタッフである日本骨粗鬆症学会認定骨粗鬆症マネージャー8名が中心となり活動を展開しております。主な活動内容としては、1. 骨粗鬆症マネージャーによる骨粗鬆症患者発見のための検診外来である「ほね元気外来」の運営、2. 入院患者さんに対する骨粗鬆症早期発見のための介入、および、3. 骨粗鬆症診療に関する地域連携活動、です。特に、入院中に介入を受けた患者さんの、その後の骨粗鬆症性骨折発生率は現在まで1人も起きていないという実績を上げています。今後は、県内でも最も高齢化率の高い奥会津地域(金山町、三島町、昭和村)の骨粗鬆症の早期発見のための取り組みを、「奥会津在宅医療センター」および県立宮下病院と連携して行っていく予定です。

呼吸器内科学講座

Department of Pulmonary Medicine



教授 久米 裕昭 KUME Hiroaki

長引く咳や痰、感染性肺炎、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患(肺気腫)、非感染性肺炎(間質性肺疾患、薬剤性肺炎、好酸球性肺炎)、肺結核症などの主要な呼吸器疾患、アレルギー疾患、感染症の診断、管理・加療、および胸部異常陰影に対する精査を実施しています。レントゲンや CT だけでなく、可逆性試験を含む肺機能検査、喀痰検査、呼気中一酸化窒素(NO)濃度測定、気道過敏性試験、気管支鏡など多岐にわたる検査を用い、質と安全性の高い医療の提供を目指しています。そして、有意義な医療連携に基づいて会津地域の皆様の健康維持に貢献できるように努めてまいります。

消化器外科学講座

Department of Gastrointestinal Surgery



教授 坂本 渉 SAKAMOTO Wataru

消化器外科科学講座は 2025 年 4 月に講座再編により生まれた新しい講座です。

診療科としても消化器外科とするために現在申請を進めております。

食道癌・胃癌・大腸癌・胆道癌・肝癌といった悪性腫瘍から胆石・ヘルニア・痔疾患といった良性疾患まで、幅の広い診療とともに、各疾患の specialist を揃えて、会津にいながら全国レベルの質の高い専門診療・内視鏡手術を提供できる体制が整っています。

また大学の附属病院として、手術教育にも力を入れており、会津から全国で活躍できる質の高い消化器外科医の輩出を目指しております。



教授 遠藤 俊吾 ENDO Shungo

大腸・肛門疾患の診断と治療を担当しています。切除不能の大腸癌に対する抗がん剤治療や大腸癌による腸閉塞に対する大腸ステント治療を行っています。また、大腸がん検診や人工知能を用いた大腸 CT による大腸がん診断など外科の枠を超えて、研究を行っています。今まで蓄積してきた技術や知識で会津の大腸癌の診断・治療を進化させたいと考えます。



緩和ケア科 Palliative care

准教授 竹重 俊幸 TAKESHIGE Toshiyuki

癌によってつらい思いをされている患者さんに、「体調を整えるには手術・抗がん剤・放射線治療ではなく、心の支えとケアが重要です。」このことを理解していただき、前向きな緩和医療(がん以外の原因に対する治療)を行ない、少しでも長く穏やかに過ごせるようにスタッフ一同努めております。そのスタッフ(主治医、担当医、看護師、管理栄養士、理学・作業療法士、鍼灸師)は毎日交互に病棟でお世話させていただいており、患者さん・ご家族が存在感の喪失や孤独感・不安感などを抱えていてもそれを解消し、お家にいるような感じで療養していただけるように心がけております。

耳鼻咽喉科学講座

Department of Otolaryngology



教授 小川 洋 OGAWA Hiroshi

私どもは聴覚に関わる診療を得意としております。鼓膜穿孔に対する鼓膜再生療法、耳硬化症に対するアブミ骨手術、真珠腫性中耳炎に対する手術療法、骨固定式補聴器の埋め込み手術、人工内耳手術、顔面神経麻痺に対する顔面神経減荷術などを内視鏡、顕微鏡を駆使して行っています。補聴器装用、管理も重要な領域として補聴器外来を設け対応しています。鼻の領域では難病指定されている好酸球性副鼻腔炎に対する手術療法、薬物療法に力を入れています。手術はナビゲーションシステムを導入し、内視鏡下に安全、確実な操作を心がけています。難治性アレルギー性鼻炎に対しては内視鏡下の粘膜下下鼻甲介手術、鼻中隔矯正術を組み合わせ対応しています。われわれの施設で対応できる病態は限局的ではありますが、全国標準の治療を会津地区に提供できるようスタッフ一同さらに成長したいと思っております。

麻酔科学講座

Department of Anesthesiology



教授 村山 隆紀 MURAYAMA Takanori

麻酔科では、手術室において手術を受けられる患者さんに対する全身麻酔の施行を中心に診療活動を行っています。当麻酔科の診療目標は、迅速かつ円滑な麻酔の開始、安定かつ合併症のない麻酔中の全身管理、迅速かつ明瞭な麻酔からの覚醒、そして穏やかな術後経過および周術期合併症の予防ないし軽減です。これらを通して術後早期離床から始まる術後回復促進に寄与できるよう日々努力を重ねております。今後も手術需要増加への対応と麻酔診療の質の維持の両立を目指し活動を続けていきます。

放射線医学講座

Department of Radiology and Nuclear Medicine



教授 歌野 健一 UTANO Kenichi

1895年のレントゲンによるX線の発見以来、放射線医学は飛躍的な進歩を遂げてきました。現代医療に放射線医学は欠かせないものとなっており、多くの診療科において、放射線検査により診断を行っています。また、近年では放射線検査を応用したIVR (Interventional Radiology) により、疾患によっては外科的治療にも匹敵する治療効果をあげています。放射線科医は、一般的に表に出ることが少なく縁の下のような存在ですが、当院でも最新の機器を用いて、正確な診断とよりよい治療に貢献しています。

病理診断学講座

Department of Diagnostic Pathology



教授 鈴木 理 SUZUKI Osamu

病理学は様々な疾患の原因を明らかにする、医学において重要な学問のひとつです。病理診断科では、様々な疾患における病理診断を行っています。病理診断では生検や手術材料について、病理組織標本を作製し、顕微鏡にてどのような病気であるかを検討します。病理診断は患者様の治療内容に直結するため、病理診断科は非常に重要な部門のひとつです。病理学に立脚した診療・教育・研究に力を入れていきたいと思っています。また、的確な病理診断を提供することに努めていきたいと考えています。

漢方医学研究室

Japanese Traditional (Kampo) Medicine Laboratory



教授 鈴木 雅雄 SUZUKI Masao

鍼灸は約1400年前に日本へ伝来し、以降日本独自の発展を遂げた伝統医療の一つです。

近年、各分野での研究が大幅に進んだことで、鍼灸のメカニズムが解明されています。

鍼灸治療は症状をターゲットにした治療法のため、患者様が有する様々な症状に対して個別に治療方針を提案することが出来ます。

当部門では患者様がお困りの症状に対して鍼灸治療を外来で提供しています。

会津医療センタートピックス

― 地域全体を支える医療モデルへの挑戦 ―

会津医療センター総合内科では、高齢化・過疎化に加え、医療従事者の偏在と高齢化が進行する会津地域において、地域全体を一体として支える新たな医療提供体制の構築に取り組んでいます。

本地域では、高齢化・人口減少に加え、医療従事者の偏在と高齢化が同時進行しており、従来型の「各医療機関が個別に完結する医療提供体制」の維持が困難になりつつあります。

救急需要の増加はその一側面に過ぎず、本質的には、限られた医療資源（人材・時間・設備）を地域全体の中でどのように再配置し、急性期・回復期・在宅・介護施設を含めた医療機能をどのように連携・最適化していくかが重要な課題となっています。

その中で当科では、個々の医療機関単位ではなく、「地域全体を一つの医療システムとして捉える」という視点から、院内診療体制の再構築と同時に、地域全体を見据えた医療提供の最適化に取り組んでいます。

その1つが、喜多方市の有隣病院との連携です。当院では有隣病院の電子カルテを院内から閲覧可能とし、週1回のオンラインカンファレンスにおいて入院患者の診療方針を共同で検討しています。さらに、当科医師が日常的に現地へ赴き、半日単位で病棟管理を担う体制を構築しており、単なる支援にとどまらず、実質的な診療の一体化を実現しています。

また、急性期治療を当院で行った患者の一部については、有隣病院へ移行後も当科が継続して診療に関与し、その後の在宅医療・介護施設までを見据えた支援を行っています。これにより、救急搬送から急性期、回復期、そして在宅・施設まで、一貫した医療提供、すなわち患者の流れ（Patient Journey）に沿った診療体制の構築を進めています。

さらに、医療現場の負担軽減と情報共有の迅速化を目的に、Zoom社と連携した実証実験にも取り組んでいます。救急搬送時の電話連絡などの音声情報をリアルタイムでテキスト化・要約し、関係する医療スタッフへ同時に共有することで、院内の情報伝達の効率化と診療の質向上を図っています。

加えて、通院困難な地域住民に対しては、只見町の朝日診療所と連携したオンライン診療を開始し、地理的制約を超えた医療提供にも取り組んでいます。

これらの取り組みを通じて、当科は限られた医療資源を地域全体で最適に活用しながら、持続可能な医療体制の構築と、地域を支える総合診療医の育成に貢献していきます。



会津医療センタートピックス

地域医療における統合医療としての鍼灸

鍼灸は1400年前に日本へ伝来した伝統医療の一つです。

近年、世界的には近代西洋医療と伝統医療を合わせた統合医療の考え方が普及しており、両方の良い点を合わせた医療の展開が進んでいます。統合医療における鍼灸治療は、西洋医学による治療を補完し、全身の調整を担う重要な役割を果たしています。科学的な根拠に基づきながら、経穴（けいけつ）を刺激して自律神経や免疫系に働きかけます。副作用が少なく、慢性的な痛みや身体の不調に対して、自然治癒力を引き出すアプローチとして世界では広く活用されています。

本学では2013年5月から会津医療センター内に鍼灸院を設置しており、鍼灸を使って会津圏内の地域医療に貢献をしてきました。2024年8月からは本学の敷地内薬局2階に新たに鍼灸院（光が丘鍼灸院）を設置して、附属病院通院中の患者様や浜通り、中通り、県外からの患者様にもご利用を頂いております。当部門では、更なる地域医療に貢献をしたいと考えております。



会津医療センター内の鍼灸院

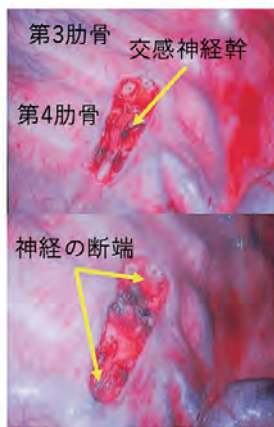


本学附属病院敷地内薬局の鍼灸院（光が丘鍼灸院）

手掌多汗症に対する胸腔鏡下交感神経遮断術

呼吸器外科では手掌多汗症に対する胸腔鏡下交感神経遮断術を行っています。東北地方でも限られた施設でしか実施されていない専門の治療であり、会津地域のみならず広い地域から患者さんを受け入れています。

本治療は高い有効性が期待できる一方で、代償性発汗などのリスクについても丁寧に説明し、十分な理解のもとで治療を行っています。患者さんの満足度は高く、日常生活の質の改善につながっています。



整形外科・脊椎外科 × (株) UTヘルステック

“通院不要”の脊椎術後リハビリへ

— 遠隔医療が拓く新しい社会復帰支援 —

腰部脊柱管狭窄症や椎間板ヘルニアなどの脊椎変性疾患において、術後の社会復帰には適切なリハビリテーションの継続が不可欠である。しかし、週数回の通院は高齢患者や遠隔地在住者にとって大きな負担となり、十分なリハビリ継続を妨げている。

整形外科・脊椎外科では医療用ソフトウェア企業と共同し、スマートフォンを用いた遠隔リハビリテーションシステムを開発している。本システムにより、患者は自宅にいながら医療機関と接続し、個別化されたリハビリ指導を受けることが可能となる。現在、日本初の医療機器プログラムとしての承認取得を目指し、臨床試験を予定している。

本取り組みは、通院制約を克服し、脊椎術後患者のADL・QOL向上および社会復帰を支援する新たな医療モデルを提示するものである。



AIが切り拓く消化管診断の新時代

会津医療センター消化器内科の研究グループ（富樫一智 主宰）は、2016年より会津大学（朱欣 上級准教授、現・東京科学大学 教授）と連携し、消化器内視鏡領域におけるAI技術の開発を推進してきました。

膨大な大腸ポリープ画像を深層学習させることで、ポリープのリアルタイム検出と悪性度評価を行うAI診断支援システムを開発しています（下図参照）。これらの成果は、英語原著論文10編として結実しました。

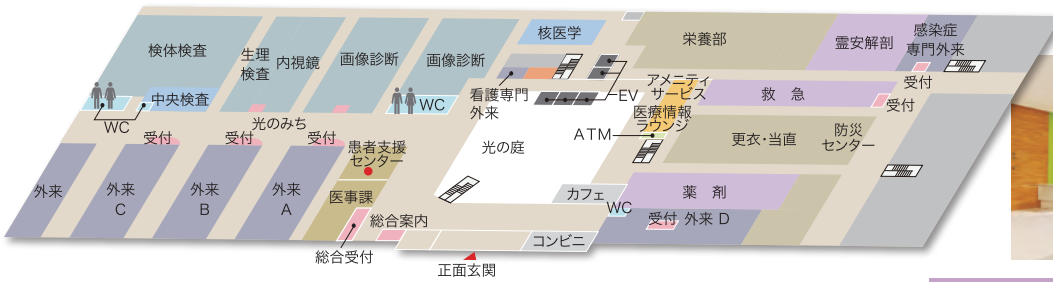
現在も共同研究は進化を続けており、「単純CTから大腸癌を検出するAI」「病理スライドから悪性度の高いポリープを診断するAI」「単純CTから潰瘍性大腸炎の病勢を評価するAI」など、診断の常識を塗り替える革新的プロジェクトが進行中です。

私たちは、AIと臨床の融合により、より早期かつ高精度な診断の実現を目指しています。



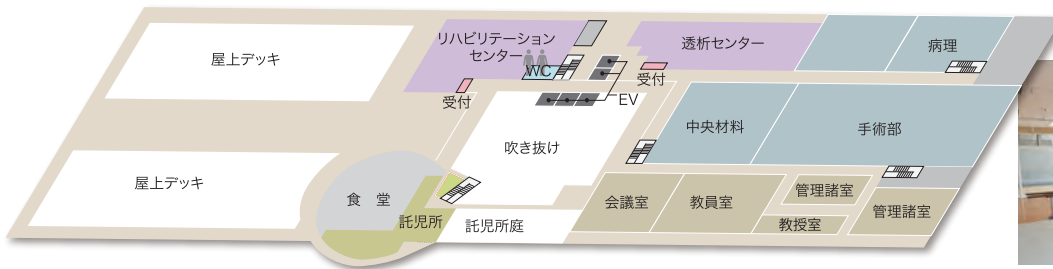
Gastrointest Endosc. 2023;98:90-99のgraphical abstractを改変引用

1F 訪れる患者様の導線を考慮した機能的な設計と安心感を与えるゆったりとした空間



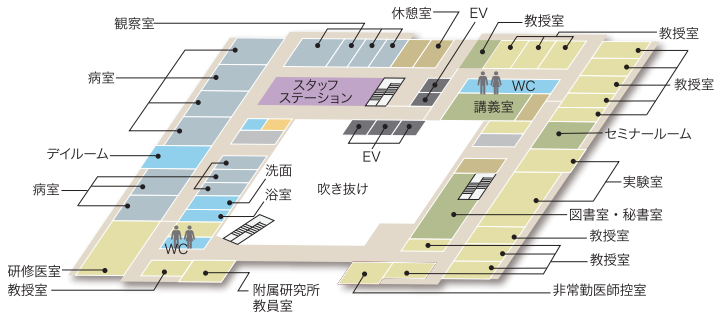
外来(A・B・Cブロック)受付、待合い空間(光のみち)

2F 光を多く取り入れ、大きな窓からは会津の四季の風景が患者様の気持ちをいやします。

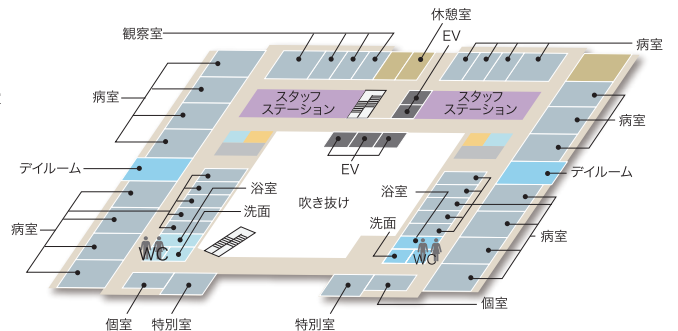


リハビリテーションセンター

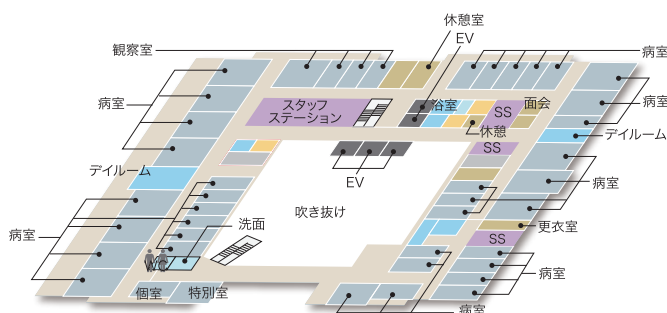
3F 南側に一般病棟、一般病床(34床)、北側に教育・研究施設を備えています。



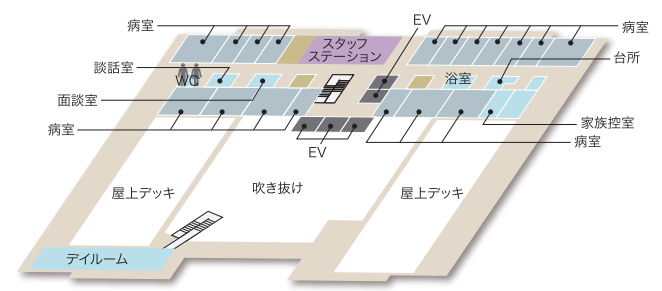
4F 南側に一般病棟、一般病床(42床)、北側に一般病床(42床)、血液内科の無菌病室を備えています。



5F 南側に一般病棟、一般病床(42床)、北側に混合病棟(22床)・一般病床(15床)を備えています。



6F 緩和ケア病棟(18床)を整備。温もりが感じられる色調とし、一般病棟とは施設全体の雰囲気を変えています。



04

健康の見守り

ふくしま国際医療科学センター

message メッセージ

福島復興を医療面から支え、震災で得た経験や教訓を世界と共有できる未来を目指します。

ふくしま国際医療科学センターは、福島県復興計画にも位置づけられ、地域社会を医療分野から再生・活性化し、その復興の姿を世界に向けて発信するための組織として設置されました。本センターは、県民の健康の見守り、先端研究の推進と産業復興、高度医療の提供という3つを柱とする組織です。

放射線医学県民健康管理センター、健康増進センターでは、東日本大震災及び原発事故後の県民の健康状態を長期にわたって見守り、県民の健康増進と健康寿命の延伸を目指しています。先端臨床研究センター、産学連携拠点施設では、新しい放射性薬剤の開発を目指し、研究開発や臨床試験を進めるとともに、医薬品関連産業分野の集積・振興に取り組んでいます。先端診療部門、甲状腺・内分泌センターでは、先進的な医療機器を用いて病気を早期に発見し、各分野が協力して高度で専門的な医療を提供しています。また、教育・人材育成部門では、各センターと部門を支え国際機関とも連携して次世代を担う医療人を育成します。

震災そして原発事故から得た経験や教訓を世界の人々と共有し、後世に残していかなければなりません。ふくしま国際医療科学センターに課せられた使命を達成できるよう、たゆまぬ努力を続けてまいります。



ふくしま国際医療科学センター センター長 亀岡 弥生

放射線医学県民健康管理センター

適切な支援と積極的な情報発信により県民の健康維持・増進の実現に貢献する

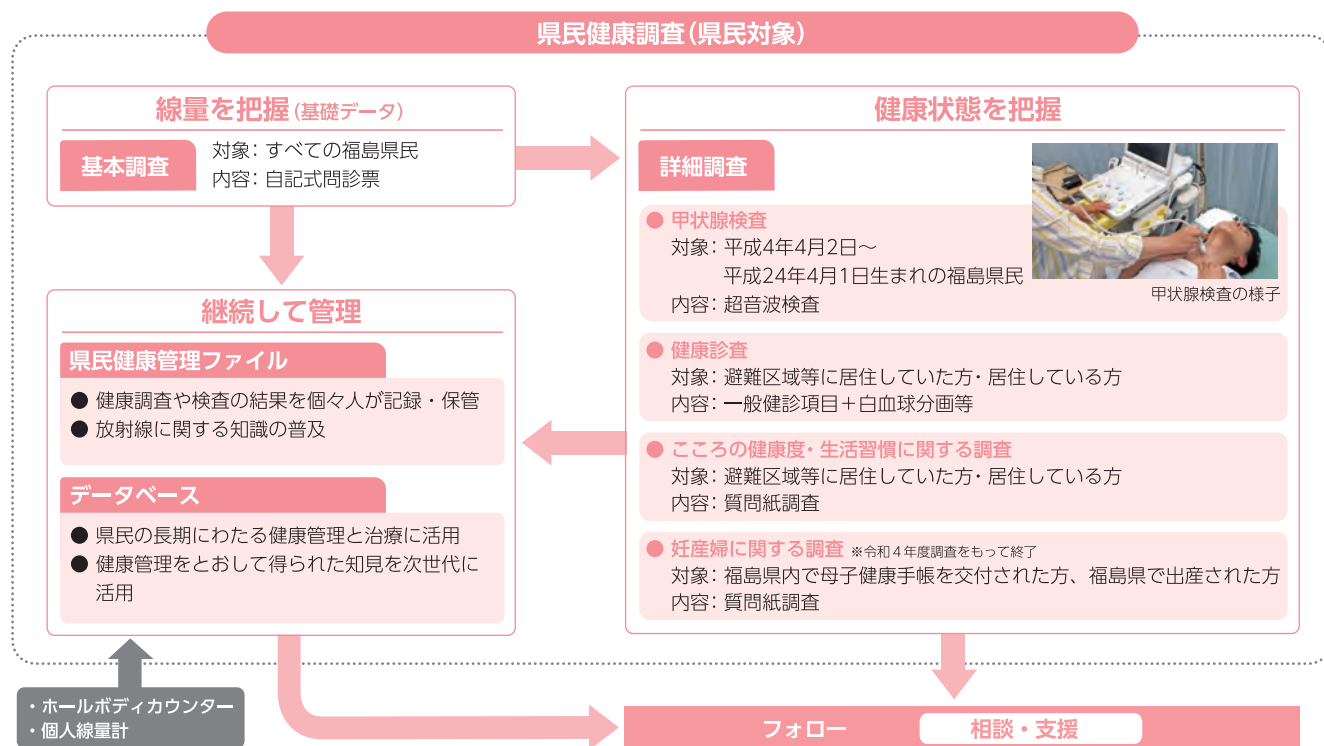
放射線医学県民健康管理センター
センター長 安村 誠司



東日本大震災に伴い発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射性物質の拡散や避難等の影響を踏まえ、福島県は県民健康調査を行ってきました。当センターは、福島県の委託を受けてこの調査の実施を担い、県民の健康状態の把握から適切な予防、治療や支援へとつなげ、長期にわたる県民の健康を見守っています。調査の実施に当たっては、国内外の大学や研究・行政機関、学術団体等の協力と支援をいただきながら、本調査の充実、発展に努めております。

調査開始から15年を経て、「適切な支援のために調査を行う」という原点に立ち返るとともに、令和5年度からスタートした福島国際研究教育機構(F-REI)が取り組む「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」に関する研究を通して情報発信にも力を入れていきます。

今後とも、県民の健康維持・増進の実現のために、本調査がより良い調査となるよう努めてまいります。



当センターでは、年次報告書の発行や国際シンポジウムの開催により、県民健康調査の現状と結果に対する理解促進に努めています。また、県内で開催される健康イベント等に出席し、調査結果に関する展示を行っています。



年次報告書



国際シンポジウム



イベント出展

先端臨床研究センター

サイクロトロンをはじめとする各種機器を用いて、新しい放射性薬剤の開発を目指す。

先端臨床研究センター
センター長 小島 祥敬



当センターは、放射性薬剤の製造・合成から非臨床試験、臨床研究・治験まで一貫して実施可能な研究施設として設立しました。県民へ安全安心な医療を提供する一環として、次世代の治療法である、Therapy(治療)とDiagnosis(診断)を融合させた Theranostics(セラノスティクス)を実現させるために、国内外の研究者、研究機関と連携し、新しい放射性薬剤の開発へ向けて研究活動を行っています。

また、その実現のため、国内で唯一、医療用放射性同位元素(核種)の製造に特化した中型サイクロトロンを導入し、がん細胞殺傷効果のあるアルファ線放出核種として注目されるアスタチン-211(^{211}At)を核医学治療に利用できる量と品質の両面で安定的に製造することに成功し、治療用薬剤の研究開発や臨床試験を進めています。

これまでの研究・開発をより発展させるため、2023年4月に国が浪江町に設立した福島国際研究教育機構(F-REI)と連携し、研究及びそれに携わる高度な人材の育成にも積極的に取り組むこととしております。今後も放射性薬剤と核医学に関する国内トップクラスの研究開発拠点として、県民の健康保持・増進へ貢献してまいります。



中型サイクロトロン(MP-30)



小動物用 PET/SPECT/CT



臨床用 PET-MRI

放射性薬剤の製造・合成

小型と中型の2台のサイクロトロンを保有しており、小型サイクロトロンでは、附属病院と連携したPET診断に用いる陽電子放出核種を、中型サイクロトロンでは、近年、核医学治療用の α 線放出核種として注目されているアスタチン-211(^{211}At)を製造しています。また、放射性薬剤製造用の実験室(ホットラボ)を5つ有しており、様々な放射性薬剤の研究開発を進めるとともに、ヒトに投与するための治験薬の製造・合成を行っています。

非臨床試験

200を超えるアイソレーション式飼育ケージを備え、特定の病原菌がない環境(SPF)など、高度な細胞・動物実験が実施できる環境を整備し、放射性核種を用いた薬物動態・薬効薬理試験を実施しています。

また、動物用PET/SPECT/CT装置[Inveon]を保有しており、小動物の体内の放射性薬剤分布の画像化が可能ことから小動物でセラノスティクスの検討が可能となっています。先進的なイメージング装置、高精度な測定装置を備えており、開発候補の放射性薬剤について、様々な手法を用いて評価しています。

臨床研究・治験

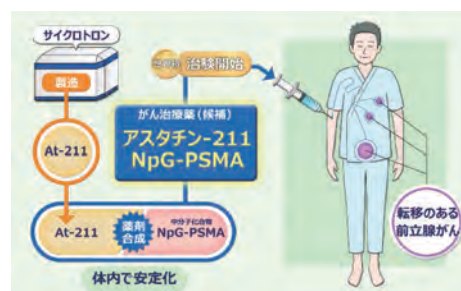
放射性薬剤の院内製造が可能のため、半減期が短い核種を用いた治療薬や、PETに用いる診断薬、合成機器等の治験・臨床研究等に取り組んでいます。

また、治療薬の治験等については、国内最大となる附属病院内のRI病棟(9床)を活用しており、治療と診断を一体化させた新たな治療戦略セラノスティクスの開発が可能となっています。

^{211}At -NpG-PSMAの医師主導治験を開始

当センターは、ホルモン療法等の既存の治療法が効かない去勢抵抗性前立腺がんを対象とした治療薬(候補)である ^{211}At -NpG-PSMAの医師主導治験を2025年9月に開始し、安全性や効果を検証しています。

^{211}At -NpG-PSMAは、中型サイクロトロンで製造したアスタチン-211(^{211}At)と ^{211}At ががん細胞まで運ぶ役割を持つ「標的化合物」(リガンド)を結合させたもので、 ^{211}At が放つ α 線によってがん細胞を狙い撃ちし、去勢抵抗性前立腺がんの治療効果を高めることが期待されています。また、 ^{211}At -NpG-PSMAには千葉大学と量子科学技術研究開発機構が特許を有するネオペンチルグリコール(NpG)という化学構造の導入により、体内で ^{211}At と標的化合物の結合が極めて安定するという特徴があります。



産学連携拠点施設

— 本学医療・産業トランスレーショナルリサーチセンター（TRセンター）は、令和8年4月1日から「産学連携拠点施設」になりました。 —

**産学連携の推進を通じて医薬品研究・技術移転・技術者養成等を支援・促進し、
医薬品関連産業分野の集積・振興を支援します。**

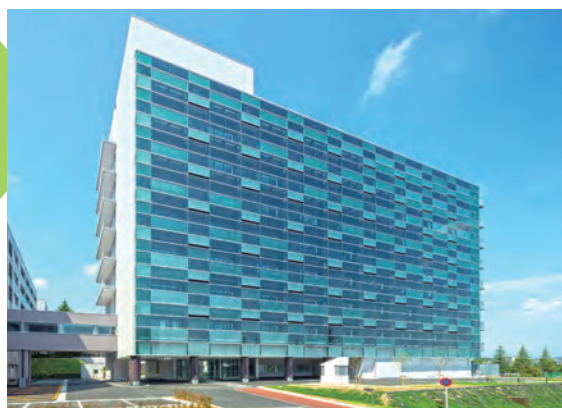
ふくしま国際医療科学センター
センター長 亀岡 弥生



東日本大震災からの復興に貢献するため、復興基金事業である「福島医薬品関連産業支援拠点化事業」（福島事業）によって、福島県内における医薬品関連産業集積の支援、新産業と雇用の創出を目指し、第1期、第2期復興・創生期間（平成23年度から令和7年度まで）において、本学医療・産業トランスレーショナルリサーチセンター（TRセンター）では「天然ヒト抗体遺伝クローニング」「タンパク質マイクロアレイ」の2つの基盤技術に係る研究開発に取り組んでまいりました。また、ベンチャー企業等の設立、災害医学・医療産業棟やTRセンター浜通りサテライトの南相馬市への設置などによって福島事業の成果の浜通り地域等への波及と研究機関・企業等の進出促進、雇用の拡大を図ることで福島県全体の復興に貢献してまいりました。

第3期復興・創生期間初年度となる令和8年度からは、企業・団体や学内講座等が幅広く利用できるようTRセンター施設を産学連携拠点施設に改編し、これまでの研究成果を活用して医薬品開発研究、技術移転、技術者養成、医薬品関連産業の集積・振興に貢献するとともに、本学中期目標・中期計画における産学連携、ベンチャー企業等の雇用の創出、地域経済寄与の成果目標の達成に向け取り組んでまいります。

災害医学・
医療産業棟
(産学連携拠点施設)



第3期復興・創生期間取組イメージ図



健康増進センター

科学的根拠に基づいた評価・分析により、 健康寿命の延伸・健康格差の縮小に貢献してまいります。

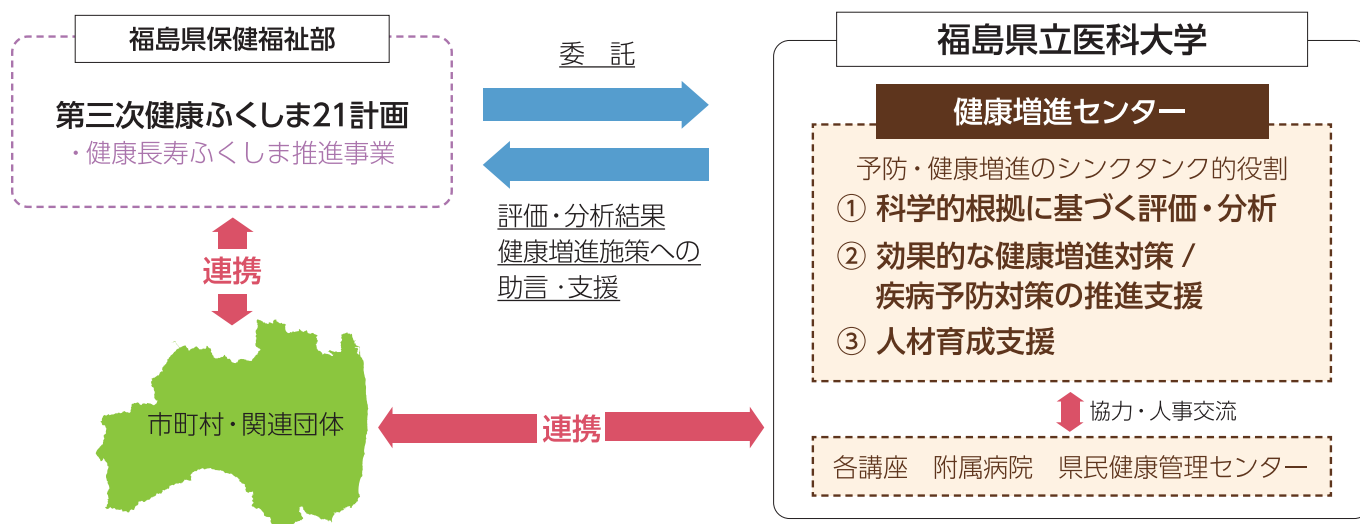
健康増進センター
センター長 島袋 充生



当センターは、「第三次健康ふくしま21計画」の基本目標である「健康寿命の延伸と健康格差の縮小」を実現するための各種施策等を実施するに当たり、予防・健康増進のシンクタンク的な役割を期待されています。具体的な事業としては、第1にFDB（福島県版健康データベース）に格納される特定健診など保健・医療・介護等のデータや脳卒中・急性心筋梗塞の発症登録のデータを科学的な根拠に基づいて評価・分析します。第2に評価・分析した結果を基に健康課題を「見える化」し、県や市町村の健康づくり施策への助言・支援等を行います。第3に本県の健康づくり活動を担う保健師・栄養士等の資質向上のための研修会や県と連携した公衆衛生医師の継続的確保と育成のための研修を行います。また、その他の事業として、県民の皆様に健康づくりの重要性を啓発する活動を実施します。

さらに、令和7年度からは食生活改善に向けた調査（BDHQ調査）及び栄養指導を行う人材の育成も行っています。

当センターでは、こうした事業を通して、県民の皆様の健康寿命に関わる疫病の予防と、健康増進に貢献したいと考えています。



健康増進センターでは、FDB（福島県版健康データベース）を活用し、特定健診のデータなどを分析した「年次報告書」、及び脳卒中・急性心筋梗塞の登録データなどを分析した「分析報告書」を作成しています。人材育成支援では、県及び市町村の保健事業担当職員を対象とした各種研修会を実施しています。また、本県の高血圧症予防の意識啓発のため尿ナトリウム比測定を実施するとともに、本県の健康課題に応じた動画コンテンツを制作し、健康増進センターのYouTubeチャンネルにて公開しており、県民の皆様に生活習慣の改善や健康増進のための情報発信を行っています。



県と市町村の保健事業担当者研修会



尿ナトリウム比測定



動画コンテンツ

甲状腺・内分泌センター

内科系と外科系の診療科の総合窓口として、
患者さんに最適な診療を提供してまいります。

甲状腺・内分泌センター
センター長 鈴木 悟



従来、内分泌系疾患の診断・治療については、内科系と外科系のそれぞれの診療科で診療を行ってきましたが、当センターはそれらの診療科による診療の総合窓口となる役割を担い、患者さんにとって最も適切な診療科が担当できるようにしています。内分泌系疾患の診療には、内科系として甲状腺・内分泌内科、糖尿病・内分泌代謝内科、外科系として甲状腺・内分泌外科、脳神経外科、泌尿器科・副腎内分泌外科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科をはじめとして多数の診療科が関わっています。これらの診療科の間で定期的なカンファランスを開催することなどを通して、情報共有を図っています。

このようにして各診療科目の専門家が集まり情報共有することで、患者さんにとっていちばん適切な診療が総合的に提供できるように努めています。

福島県の委託による県民健康調査甲状腺検査の結果、診療が必要とされた方の受け入れも多く行っています。先端臨床研究センターに整備されている先進的な機器を使った治療も当センターのスタッフを中心に行うことができます。



甲状腺・内分泌グランドカンファランス

先端診療部門

PICU(小児特定集中治療室)



“みらい棟”
3つの柱

1 救急・災害・被ばくに対応した医療

3 療養環境の充実

2 子どもと女性が安心できる医療

A「こども医療センター」の整備

- ・15歳未満の患者を受け入れ、診療科横断的に診療を行う施設
- ・小児の重症疾患に対応する治療体制を充実する

B「総合周産期母子医療センター」の拡充

- ・周産期（産前・産後）のハイリスクな母体・胎児や新生児に高度な医療を提供する施設
- ・安心して子どもを産み育てるための「母と子を守る医療環境」を充実する

C「生殖医療センター」の体制強化

- ・県内の不妊治療拠点病院としての機能を有する施設
- ・不妊治療に係る高度な医療を提供するとともに相談・支援体制を充実する

■5F こども医療センター

- ・平成29年6月よりPICU（小児特定集中治療室）4床の運用開始
- ・平成30年6月よりPICU 4床から6床に変更（2床増）
- ・平成30年10月より1病棟 51床に変更（8床減）
- ・令和元年11月より1病棟 53床に変更（2床増）

■3F 総合周産期母子医療センター

- MFICU 6床 東病棟 31床（主に産科）
- NICU 15床 GCU 12床

■2F 生殖医療センター

- ・平成31年4月より中央診療施設としてオープン
- ・県の要請を受け、不妊専門相談センターを設置

教育・人材育成部門

県民の皆様の健康を生涯にわたって支える人材を育成してまいります。

教育・人材育成部門では、持続可能な事業展開を実現するため、各センターと部門を支える優れた人材、災害、緊急被ばく医療、地域医療に資する次世代の医療人を育成してまいります。

臨床系講座

放射線健康管理学講座
甲状腺内分泌学講座
災害こころの医学講座
放射線腫瘍学講座
腫瘍内科学講座
放射線災害医療学講座

社会医学系講座

疫学講座
健康リスクコミュニケーション学講座

基礎医学系講座

放射線生命科学講座
放射線物理化学講座

大学院医学研究科修士課程 災害・被ばく医療科学共同専攻

震災に伴う原発事故による放射線災害と自然災害の複合災害に対応できる人材の少なさが明らかになったため、長崎大学と共同で、災害、被ばく及び放射線に関する教育を行うため大学院を開設しています。

05

各種センター

看護師特定行為研修センター/ 医療研究推進センター

ふくしま子ども・女性医療支援センター

臨床研究イノベーションセンター/ ダイバーシティ推進室

国際交流センター/ 地域医療支援センター



看護師特定行為研修センター

患者のために特定行為を実践する看護師を養成しています

看護師特定行為研修センターは、平成29(2017)年4月から、看護師の特定行為研修を開始しております。

この特定行為研修は、人口の高齢化に伴う医療需要の高まり、医療者の不足・偏在、医療の専門化・複雑化などを背景に、看護師が特定行為(21区分38行為)を実施できるよう、平成27(2015)年に施行された研修制度で、医師がその場にいないくても、看護師自身の判断の下、安全に診療補助行為を行えることを目的としています。

研修の概要としては、共通科目で基礎を学び、その後、選択した特定行為に応じた専門的な内容を学び、実習を通じて技術を身に付け

ます。研修を修了すると「特定行為研修修了証」が交付され、医師と協働しながら、特定行為を患者に提供することができるようになります。

今後も当センターでは、より多くの患者や家族が安心してその地域で暮らしていけるよう、看護師特定行為研修制度の更なる周知拡大・定着に向けて、福島県や県内の指定研修機関と連携しながら、特定行為研修、研修修了者のフォローアップ研修、指導者講習に取り組んでまいります。



医療研究推進センター



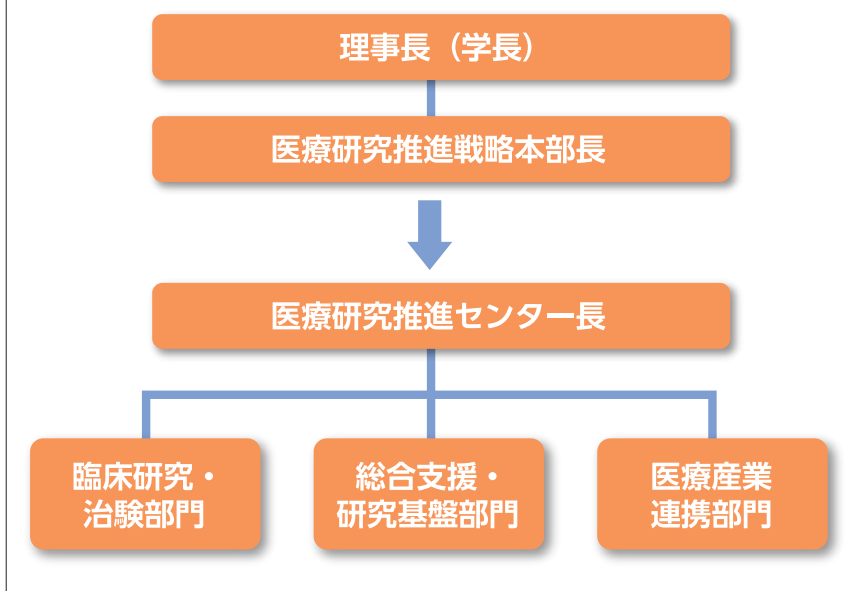
医療研究推進センター
センター長
佐治 重衡

基礎研究、臨床研究、臨床試験・治験を一元的に支援

当センターは基礎研究・臨床研究・治験・臨床試験などを一元的に支援することにより、本学における研究活動を戦略的に推進し、本学の発展や福島県の医療の進歩、福祉の向上に寄与することを目的に設置されております。

センターには、研究基盤の基礎的支援を担当する「総合支援・研究基盤部門」、臨床研究・治験に係る体制整備と支援を担当する「臨床研究・治験部門」、医療系の民間企業などとの連携支援を担当する「医療産業連携部門」の3部門を設置しており、医療研究推進戦略本部の決定に基づく各種支援などの取組の結果、外部資金(研究費)の獲得や臨床試験・治験の活性化など、本学の医療研究の発展に寄与しております。

○医療研究の推進体制



ふくしま子ども・女性医療支援センター

福島県の産婦人科・小児科医療のサポート事業を展開

本県は、産婦人科、小児科医が不足していましたが、震災により状況はさらに悪化しました。これに対し県は、「福島県に住む女性が安心して子どもを産み、育て、そして健康な一生を過ごすための医療支援を行う」ことを目的に、平成28(2016)年、ふくしま子ども・女性医療支援センター(以下センター)を医大内に開設しました。

センターのミッションは、産婦人科・小児科医療のエキスパートが福島県内で、産婦人科・小児科医療の支援と教育を通じて、医師のスキルアップと産婦人科・小児科医としての県内定着を目指すもので、わが国ではオンリーワンの施設です。

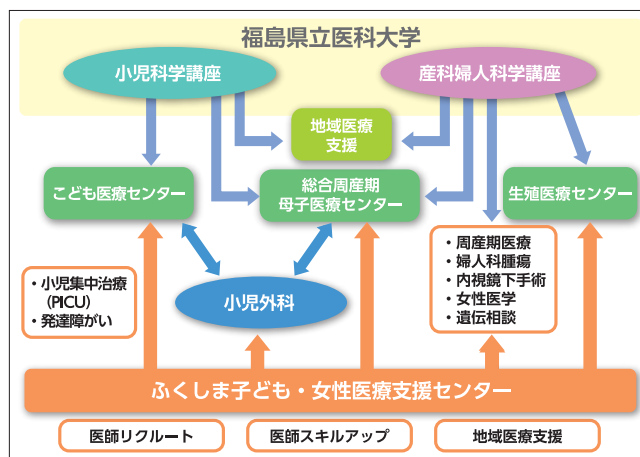
センター教員は、常勤5名、非常勤11名で、産婦人科医、小児科医、小児集中治療医、小児外科医であり、いずれも産婦人科・小児科医療のエキスパートで、福島の医療復興に熱意を持たれて赴任されてきましたので、県内でも高い評価を受けています。

センター設立以来、数十名の産婦人科医が福島県内で診療に従事することをサポートしてきました。また、産婦人科・小児科医療の質の向上として、産婦人科悪性腫瘍の腹腔鏡下手術の普及、生殖医療センターのサポート体制の整備、小児集中治療室の設立、発達障害児の診療の充実、小児外科診療の支援などを行ってきました。

我々センターは産科婦人科学講座、小児科学講座、小児外科と密接

な連携を取りながら、医師リクルートのみならず、医師スキルアップ支援、地域医療支援に携わっており、「福島県に住む女性が安心して子どもを産み、育て、そして健康な一生を過ごすための医療支援」を行っています。

ふくしま子ども・女性医療支援センター センター長 高橋 俊文



臨床研究イノベーションセンター

診療支援と研究者育成で福島をもっと健康に

2013年に設置された臨床研究イノベーションセンターは、福島県民の健康寿命を日本のトップレベルにすることを使命としています。



HPIはこちら

- 1 全国からリサーチマインドを持った優秀な若手臨床医が福島に集い活動しています。
- 2 福島県の医療機関への診療支援を通して、福島の地域医療に貢献します。
- 3 須賀川市、公立岩瀬病院企業団、いわせ総合診療アカデミーと協力して須賀川市健康長寿推進事業を展開しています。
- 4 臨床研究デザイン塾（通称、會津塾）を通し、全国の医療者へ臨床研究を学ぶ機会を提供しています。
- 5 質の高い研究を福島から世界へ発信しています。

ダイバーシティ推進室

ダイバーシティ推進室の取組について

本学における男女共同参画支援室は平成26年に設置され、男女共同参画事業をすすめてまいりました。令和4年新たにダイバーシティ推進室と名称を変え、医学部、看護学部、保健科学部、会津医療センター、全教職員、学生を対象として、性別にとらわれることなく、多様な人材が活躍でき、各人が能力を十分に発揮し、キャリア形成をすることができる環境を整備することを目的として、ダイバーシティ推進事業を展開いたします。

取組内容としては、女性教員の在職比率の向上、大学運営における女性参画の拡大、働きやすい環境の整備、研究支援員の配置、休暇・休業制度を利用できる環境整備、育児・介護支援、アンケート調査による実態把握、HPやレターによる情報発信、学生への教育、キャリアアップセミナー・スキルアップセミナーやFMUカフェの開催、ロールモデルの紹介など行っています。

現在は、医学部、看護学部、保健科学部、会津医療センターと各学部・センターに特有の課題に取り組むことができるように体制を強化しております。今後とも、多様な価値観を認め、持てる個性と能力を最大限発揮でき、働きやすい環境を築けるように推進室一同努めてまいります。



国際交流センター

協定校・機関一覧

本学が学術協力・交流に関する協定を締結している大学・研究機関等です。学生の派遣・受入、研究者交流や共同研究などを行っています。

協定の種類	機関名	機関名（英語）	国・地域名	当初締結年月日
部局 (保)	モンゴル国立医科大学看護学部 (MNUMS)	School of Nursing, Mongolian National University of Medical Sciences (MNUMS)	モンゴル	2026/5/13
全学	サンライズジャパン病院プノンペン	Sunrise Japan Hospital Phnom Penh	カンボジア	2025/10/27
全学	武漢大学	Wuhan University	中国	2025/6/12（再締結年月日） 1999/2/1（当初締結年月日）
全学	韓国原子力医学院 (KIRAMS)	Korea Institute of Radiological and Medical Sciences (KIRAMS)	韓国	2025/2/25
部局 (医)	ハーバード T.H. Chan 公衆衛生大学院	President and Fellows of Harvard College acting through Harvard T.H. Chan School of Public Health	米国	2024/9/24
部局 (医)	ユリウス・マクシミリアン大学ヴェルツブルク（ヴェルツブルク大学）	Faculty of Medicine of the Julius-Maximilians-University Wurzburg	ドイツ	2023/10/19
部局 (医)	国立台湾大学医学院	National Taiwan University College of Medicine	台湾	2022/12/29
全学	フランス原子力防護評価研究所（CEPN）	Nuclear Protection Evaluation Centre	フランス	2021/3/30
全学	原子力安全・放射線防護機関 (ASNR)	French Authority for Nuclear Safety and Radiation Protection (ASNR - Autorité de Sûreté Nucléaire et de Radioprotection).	フランス	2021/3/8
部局 (医)	シンガポール国立大学医学部	National University of Singapore acting through its Yong Loo Lin School of Medicine	シンガポール	2021/1/21
全学	国立北西医科大学 ※現在交流停止中	North-Western State Medical University named after I.I. Mechnikov	ロシア	2018/3/5
部局 (医)	オハイオ州立大学 放射線腫瘍学講座	Ohio State University Department of Radiation Oncology	米国	2017/6/26
全学	ホーチミン医科薬科大学	University of Medicine and Pharmacy, Ho Chi Minh City, Vietnam	ベトナム	2016/8/17
全学	マウントサイナイ・アイカーン医科大学	The Icahn School of Medicine at Mount Sinai	米国	2014/2/1
全学	ゴメリ医科大学 ※現在交流停止中	Gomel State Medical University	ベラルーシ	2013/9/6
全学	ベラルーシ医科大学 ※現在交流停止中	Belarusian State Medical University	ベラルーシ	2013/9/5

武漢大学と国際交流協定を再締結

2025年6月、中国・武漢大学と学術交流に関する覚書（MOU）を再締結しました。1999年の協定締結以来、武漢大学は本学にとって最も長い歴史を持つ協定校であり、25年以上にわたり学生・研究者の相互派遣を中心に活発な交流を続けてきました。

東日本大震災や福島第一原発事故、新型コロナウイルス感染症の流行といった困難な時期にも、両大学は支援物資を贈り合うなど温かい友情を育んできました。

今回の再締結は、こうした長年の信頼関係を改めて確認する機会となりました。調印式はオンラインで行われ、本学の竹之下誠一理事長兼学長と武漢大学の袁玉峰副学長が署名をし、今後は医学・臨床研究から臨床実践まで幅広い分野で協力を深め、両大学が医学・医療の発展に一層貢献していくことが期待されています。



ハーバードT.H.Chan 公衆衛生大学院 「ウィンター・セッション 福島フィールドトリップ」

ハーバードT.H. Chan公衆衛生大学院による「ウィンター・セッション福島フィールドトリップ」では、同大学院生15名が約3週間にわたり福島復興、放射線防護、医療制度のレジリエンスなどを学びました。初日は本学を表敬訪問し、キャンパス・病院ツアーに参加しました。最終日に本学で行った成果報告会では、地域復興、災害弱者支援、情報伝達の改善など“Build Back Better”の視点から多角的な提言が示されました。福島の経験を国際的に共有し、本学学生にとっても地域を新たな視点で捉える貴重な機会となりました。

国際原子力機関 (IAEA) 理事国大使が本学を視察

2026年1月20日、国際原子力機関（IAEA）理事国大使5名が本学を視察しました。本学とIAEAは2012年に協力覚書を締結して以来、放射線医学教育や災害医療等、教育研究を軸に連携を深めています。視察では、震災後の被ばく医療対応、県民健康調査、アスタチンを用いたがん治療薬研究、IAEAの「Rays of Hope」における日本アンカーセンターとしての本学の役割が紹介されました。大使らは本学の専門性と国際的貢献を高く評価し、今後の協力強化への期待が示されました。本視察は、福島の経験を世界へ発信する重要な機会となりました。

Sunrise Japan Hospital PhnomPenh と国際交流協定を締結

2025年10月、カンボジアのSunrise Japan Hospital PhnomPenhと学術交流に関する覚書（MOU）を締結しました。同院は「日本の医療をまるごと輸出する」という理念のもと設立された日本式総合病院で、質の高い医療提供と現地医療人材の育成に力を注いでいます。本学とはこれまで医療者派遣や共同研究を通じて交流を重ねており、今回の締結により国際的な連携がさらに強化されます。

調印式は本学で対面形式にて行われ、両機関の代表者が出席しました。同院の岡和田院長は福島への貢献への思いと、将来的な学術プロジェクトへの期待を述べ、竹之下理事長兼学長は同院の取り組みを国際医療連携の模範として称えました。

本協定を通じ、本学は「地域に根ざし、世界とともに歩む」理念のもと、国際性を備えた医療人育成とカンボジアの医療水準向上に貢献していきます。



台湾・LIBO Pharma Corp. 訪問団が本学を訪問

2026年3月10日、台湾のLIBO Pharma Corp.訪問団が本学を訪れ、国際共同研究の進捗確認と今後の協力強化について意見交換を行いました。本学とLIBO社は、世界初の免疫調整剤「NM-IL-12」を用いた共同研究を進めており、希少疾患治療や放射線起因疾患への応用が期待されています。今回の訪問では研究成果の共有や活発な議論が行われ、未来を見据えた協力体制の構築に向けて大きな一歩となりました。本学は今後も国際連携を通じ、地域と世界に貢献する研究・教育を推進していきます。

地域医療支援センター

地域医療支援センターは、地域医療の担い手である医師不足や地域偏在の解消を目的に設置されました。

福島県の地域医療の維持と充実のため、医療機関への医師確保支援や医師のキャリア形成支援等を通じて、医師の確保と定着を図る取り組みを行っています。



福島県立医科大学地域医療支援センター長
藤井 正純

福島県地域医療支援センターは、福島県と福島県立医科大学の連携のもと、県内の医師不足や地域偏在の解消を目指して設置されました。センターでは、医師不足の状況や地域ごとの課題を把握・分析し、その対応策を企画するとともに、医師が不足する医療機関への支援、医師のキャリア形成支援、県内定着の促進、そして情報発信や各種相談対応に取り組んでおります。

第一に、地域の医療を支えるため、県内医療機関からの多様な要請に応じた医師派遣の調整や、若手医師の育成環境の整備にも力を注いでいます。県外から招聘した指導医・専門医の先生方が、県内医療機関で診療を行いながら若手医師の教育にあたる仕組みも進められており、地域医療提供体制の強化と次世代を担う医師の育成の両立を図っています。

第二に、若手の定着・養成を図り未来を見据えて、研修医を対象とした地域医療症例検討会、医学部生を対象とした臨床研修病院見学、ふくしまの地域医療を学ぶセミナー、地域医療を考える懇談会、臨床実習の受入れなどを通じて、早い段階から地域医療への理解を深め、福島で学び、働く意義を実感していただけるよう支援を行っています。こうした積み重ねが、将来の県内定着と持続可能な地域医療につながるものと考えております。

福島県の地域医療を取り巻く環境は、人口減少や高齢化の進行などにより、今後も大きく変化していくことが予想されます。そのような中で、地域の医療機関、行政そして県民の皆さまと丁寧な連携しながら、現場の声に真摯に耳を傾け、一つひとつの課題に着実に取り組んでまいります。医師にとっても、医学生・研修医にとっても、そして地域の皆さまにとっても、信頼されるセンターであり続けられるよう努めてまいります。

今後とも、福島県地域医療支援センターの活動に、温かいご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

地域医療支援センターの取組

1 医師不足状況等の把握、分析及び対応策の企画等

医師不足、医師の地域偏在、診療科の現状等の把握を行い、対応策等を企画しています。

2 医師不足病院の医師確保支援に関すること

医師が不足する医療機関を支援すべく、医療機関への医師派遣の調整を行っています。

3 医師のキャリア形成支援と県内定着促進

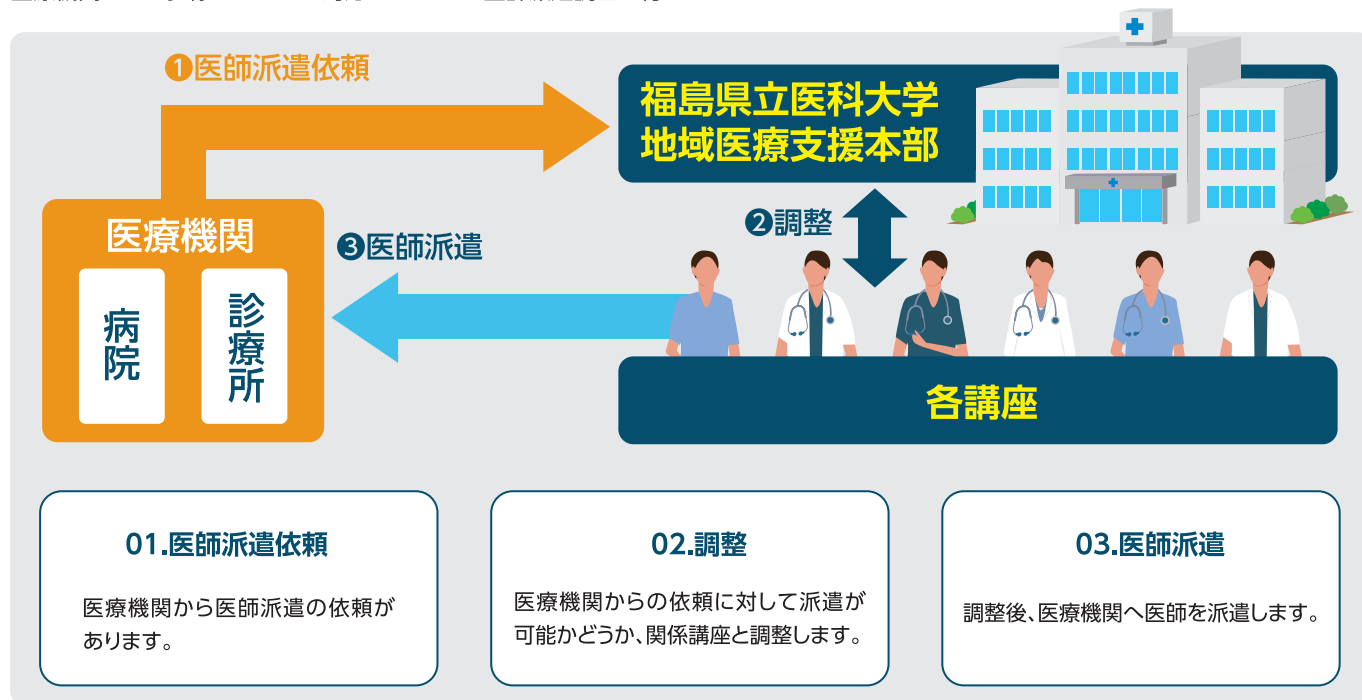
医師の県内定着につなげるべく、修学資金貸与医師への研修機会の確保、勤務先の調整等、キャリア形成に係る制度の構築と運用を行っています。また、県外から指導医・専門医を招へいし、県内の医療機関で若手医師の指導、相談対応等を行ってもらうことで、環境の整備を図っています。

4 情報発信と相談への対応

県内の医療事情や医師確保等の取組について情報発信するとともに、県内外の医師、医学生、高校生等からの相談に応じています。

医師確保の支援

医療機関からの多様なニーズに対応できるよう、医師派遣調整を行っています。



県外からの指導医・専門医招へい事業

県内の医療機関において若手医師の教育・指導を行う指導医・専門医を県外から招へいし、地域医療提供体制の強化及び若手医師の育成・キャリア形成の向上を図っています。

特任のアカデミックポジション(特任教授、特任准教授等)の称号が付与され、研究費も支給されます。

キャリア形成支援

医学部生や医師を目指す方を対象に講習会等を開催しています。

地域医療を志す方の興味関心を高める機会となっています。



地域医療を考える懇談会



ふくしまの地域医療を学ぶオータムセミナー



地域医療症例検討会

詳しくはホームページをご覧ください
<https://fmu-rmsc.jp/>



周産期・小児地域医療支援講座
Department of Perinatology and Pediatrics for Regional Medical Support
講座主任：細矢 光亮 教授：藤森 敬也、桃井 伸緒
研究テーマ：周産期・小児医療支援システムの構築と地域密着型後期研修プログラムの研究及び開発
設置期間：令和7年4月1日～令和12年3月31日
寄 附 者：須賀川市（鏡石町、天栄村、石川町、玉川村、平田村、浅川町、古殿町）、南相馬市

災害医療支援講座
Department of Disaster and Comprehensive Medicine
講座主任：藤井 正純 教授：入江 嘉仁、小柴 貴明、池上 之浩、柴崎 郁子 特任教授：小鷹 昌明、清水 昭、西川 光一、久保 肇、佐藤 勝重 特任准教授：庄司 敏、西村 哲郎
研究テーマ：災害医療に関する研究、被災地の医療ニーズの研究
設置期間：令和8年4月1日～令和13年3月31日
寄 附 者：(株)恒和薬品、(株)東芝、(株)東邦銀行、(株)福島民報社、一般財団法人福島民報教育福祉事業団、医療法人社団裕和会、ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)、協和発酵キリン(株)、安田泌尿器クリニック

地域救急医療支援講座
Department of Regional Emergency Medicine
講座主任：伊関 憲 教授：小野寺 誠
研究テーマ：地域救急医療体制の基盤強化
設置期間：令和6年4月1日～令和9年3月31日
寄 附 者：福島市

地域産婦人科支援講座
Department of Regional Medical Support for Obstetrics and Gynecology
講座主任：藤森 敬也 教授：本多つよし
研究テーマ：産婦人科分野における腫瘍及び若年発症の感染症に関する研究
設置期間：令和6年1月1日～令和9年3月31日
寄 附 者：いわき市医療センター

白河総合診療アカデミー
Satellite for Teaching And Research in General Medicine in Shirakawa General Hospital (Shirakawa STAR)
講座主任：福原 俊一 教授：宮下 淳 准教授：高田 俊彦 特任教授：清田 雅智、草場 鉄周、野口 善令、成田 雅 客員教授：前原 和平、Michael J.Klag、Thomas S.Inui
研究テーマ：総合診療領域の臨床研究 地域住民の疾病発症予防や健康寿命の延伸に資する研究
設置期間：令和7年4月1日～令和12年3月31日
寄 附 者：福島県厚生農業協同組合連合会

東白川整形外科アカデミー
Higashi-Shirakawa Orthopaedic Academy
講座主任：松本 嘉寛 教授：箱崎 道之
研究テーマ：地域における運動器疾患の診療に関する研究
設置期間：令和7年4月1日～令和9年3月31日
寄 附 者：福島県厚生農業協同組合連合会

スポーツ医学講座
Department of Sports Medicine
講座主任：沼崎 広法 特任教授：加藤 欽志、大歳 憲一
研究テーマ：スポーツ外傷・障害に関する研究
設置期間：令和7年4月1日～令和12年3月31日
寄 附 者：一般財団法人 脳神経疾患研究所

外傷学講座
Department of Traumatology
講座主任：高木 基行 教授：岡崎 裕司、峰原 宏昌、工藤 俊哉 特任教授：松下 隆、寺本 司、竹中 信之、澤口 毅 客員教授：渡部 欣忍
研究テーマ：1. 関節内骨折及び関節内骨折後変形治癒に対する新しい手術法の確立 2. 高齢者大腿骨近位部骨折に対する治療戦略の確立 3. 長管骨巨大骨欠損に対する治療における骨再生のメカニズム・修復過程の解析 - 小動物モデルを用いた基礎研究 -
設置期間：令和7年4月1日～令和12年3月31日
寄 附 者：一般財団法人 脳神経疾患研究所、医療法人社団 三成会 新百合ヶ丘総合病院

外傷再建学講座
Department of traumatology and reconstructive surgery
講座主任：松本 嘉寛 准教授：畑下 智
研究テーマ：外傷治療および再建治療に関する研究
設置期間：令和7年4月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：一般財団法人 温知会 会津中央病院

生体機能イメージング講座
Department of Biofunctional Imaging
講座主任：百瀬 敏光
研究テーマ：PET 用生体機能探索プローブの開発とその臨床応用ならびにマルチモダリティイメージングによる生体機能評価
設置期間：令和7年10月1日～令和12年9月30日
寄 附 者：一般財団法人 脳神経疾患研究所

多発性硬化症治療学講座
Department Multiple Sclerosis & Therapeutics
講座主任：金井 数明 教授：藤原 一男、黒田 宙 特任教授：田中 恵子、服部 信孝
研究テーマ：多発性硬化症（MS）、視神経脊髄炎（NMO）、自己免疫性脳炎などの臨床、画像、病態の解析及び治療法の開発並びに関連諸科との連携による総合的な医療・ケアシステムの構築
設置期間：令和7年10月1日～令和12年9月30日
寄 附 者：一般財団法人 脳神経疾患研究所

低侵襲腫瘍制御学講座
Department of minimally invasive surgical and medical oncology
講座主任：河野 浩二 教授：本多 通孝 准教授：河村 英恭 特任教授：今城 健人
研究テーマ：悪性腫瘍に対する低侵襲治療の開発と臨床的評価
設置期間：令和7年4月1日～令和12年3月31日
寄 附 者：一般財団法人 脳神経疾患研究所

心臓調律制御医学講座
Department of Advanced Cardiac Therapeutics
講座主任：石田 隆史 准教授：山田 慎哉
研究テーマ：不整脈疾患の病態解明と治療法の確立
設置期間：令和7年1月1日～令和9年12月31日
寄 附 者：アボットメディカルジャパン(株)、パイオトロニックジャパン(株)、日本ライフライン(株)

先端地域生活習慣病治療学講座
Division of Advanced Community Based Care for Lifestyle Related Diseases
講座主任：風間順一郎 教授：島袋 充生 特任教授：渡辺 毅、旭 浩一、風間 咲美、鈴木 恵子、大和 英之、寺脇 博之 准教授：木村 浩、田中 健一
研究テーマ：○地域にカスタマイズされた生活習慣病対策システムの構築 ○生活習慣病対策を目的としたコホート研究及び基礎研究 ○遠隔透析など遠隔通信技術を用いた先進型地域医療モデルを確立するための社会実験
設置期間：令和6年4月1日～令和11年3月31日
寄 附 者：南相馬市、公益財団法人湯浅報恩会 寿泉堂総合病院

癌集学的治療地域支援講座
Department of Multidisciplinary Treatment of Cancer and Regional Medical Support
講座主任：河野 浩二 准教授：中嶋 正太郎
研究テーマ：① 癌集学的治療の臨床的、基礎的研究 ② 癌診療や救急医療における地域のニーズに対する支援
設置期間：令和7年1月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：医療法人社団 恵周会 白河病院

エピゲノム分子医学研究講座
Department of Medical Epigenomics Research
講座主任：千葉 英樹 准教授：黒川 友博
研究テーマ：難治性疾患の発症・増悪を担うRNA エピゲノム因子の検索と同定
設置期間：令和4年1月1日～令和8年12月31日
寄 附 者：公益財団法人 ときわ会

アスタチン核種治療研究講座
Department of Drug Research for Astatine-211 Targeted Alfa Therapy
講座主任：鈴木 義行 教授：立崎 英男、高橋 和弘 特任教授：古本 由哉、山下 俊一、中野 隆史
研究テーマ：α線核種である At-211 を使用した核種内用療法である PSMA 治療薬の研究開発
設置期間：令和4年4月1日～令和9年3月31日
寄 附 者：株式会社沖縄臨床検査センター、一般財団法人 温知会、吉成昇

救急・生体侵襲制御学講座
Department of Emergency and Intensive Care Medicine
講座主任：伊関 憲 准教授：比留間 孝広
研究テーマ：救急・集中治療の重症患者に対する、侵襲の評価とその制御に関する研究
設置期間：令和4年4月1日～令和9年3月31日
寄 附 者：一般財団法人 脳神経疾患研究所

地域婦人科腫瘍学講座
Department of Regional Gynecologic Oncology
講座主任：添田 周 教授：藤森 敬也 准教授：古川 茂宣
研究テーマ：①福島県における婦人科腫瘍治療の標準化に向けたプロトコールの策定と治療登録システムの構築 ②女性骨盤外科学の確立のための、婦人科・消化器外科・泌尿器の外科解剖学の横断的解析 ③婦人科悪性腫瘍における腫瘍特異的発現タンパクについての基礎的検討と新規バイオマーカー及び新規治療方法の開発 ④婦人科悪性腫瘍における癌微小環境の解析と、新規治療方法の開発 ⑤再発婦人科悪性腫瘍についての臨床試験 ⑥婦人科腫瘍治療前後のヘルスケアシステム構築に向けた基礎および臨床研究 ⑦遠隔治療の導入にむけたロボット支援下手術の標準化およびプロトコール策定
設置期間：令和4年4月1日～令和9年3月31日
寄 附 者：一般財団法人 脳神経疾患研究所

地域支援視機能再建学講座
Department of Regional Vision Reconstruction
講座主任：向井 亮 教授：齋藤 昌晃
研究テーマ：地域再生を支える視機能再建のあり方に関する研究
設置期間：令和7年4月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：いわき市医療センター

地域先端循環器病治療学講座
Department of Community Cardiovascular Medicine
講座主任：石田 隆史 准教授：佐藤 崇匡
研究テーマ：○地域に適した循環器診療システムのネットワーク構築と拡充 ○地域ヘルスケア向上のための循環器病に関する医療知識の教育 ○循環器病対策を目的としたコホート研究 ○循環器病の基盤的理解と臨床応用の可能性を探索する基礎研究
設置期間：令和5年4月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：南相馬市

こころと脳の医学講座
Department of Mind and Brain Medicine (MBM)
講座主任：矢部 博興
研究テーマ：○地域全体を視野に入れたこころの医療の推進と人材育成 ○心や脳の病気の解明・診断技術開発および災害影響の調査研究
設置期間：令和5年4月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：公益財団法人 星総合病院

脊椎脊髄外科アカデミー
Department of research for spine and spinal surgery
講座主任：松本 嘉寛 准教授：加藤 欽志、渡邉 和之
研究テーマ：脊椎・脊髄疾患の新規診断・治療法の開発
設置期間：令和8年4月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：いわき市医療センター

いわせ総合診療アカデミー
Iwase Satellite for Teaching and Research (STAR) in General Medicine
講座主任：濱口 杉大 教授：佐々木 彰、桑原 篤憲
研究テーマ：○健康長寿コホート研究（須賀川スタディ） ○総合診療領域の臨床研究 ○患者報告アウトカム（PRO）研究 ○健康長寿に関連した因子に関する尺度開発・検証研究
設置期間：令和7年4月1日～令和12年3月31日
寄 附 者：公立岩瀬病院企業団

基盤連携型医療サービス共創学講座
Department of Digital Health Services Research
講座主任：風間 順一郎 教授：橋本 重厚 准教授：谷田部 淳一
研究テーマ：○心血管病予防のための家庭血圧測定、家庭心電測定の普及とそのデジタルサービス化 ○高血圧症を含む生活習慣病治療におけるオンライン診療の活用 ○PHRの利用促進と、医療情報ネットワークなど既存基盤との相互接続 ○農村部における PHR、家庭バイタル測定、オンライン診療の有効性に関する検討 ○都市 OS を活用した、デジタル医療コホート研究
設置期間：令和6年10月1日～令和9年7月31日
寄 附 者：イーメディカルジャパン株式会社、株式会社エフコム、ゲーム株式会社、TIS 株式会社、株式会社福島放送、医療法人社団 部坂耳鼻咽喉科医院、河内 美文、医療法人社団大志会

アートセラピー研究講座
Department of Research on Art Therapy
講座主任：下村 健寿 特命教授：挟間 章博 特任教授：勝田 新一郎
研究テーマ：アートセラピーの医学的効果の検証と臨床応用に向けた研究と検証
設置期間：令和7年4月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：株式会社福島民報社

先進統合脈管学講座
Department of Advanced and Integrated Angiology (AIA)
講座主任：今坂 堅一 教授：高瀬 信弥
研究テーマ：福島県北地域医療における持続可能な脈管系疾患に関する高度医療の提供と病連携モデルの構築とその実践
設置期間：令和7年4月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：社会医療法人福島厚生会

加齢性眼疾患治療学講座
Department of Age-related Eye Disease Therapeutics
講座主任：石龍鉄樹
研究テーマ：加齢性眼疾患の病態解明に関する研究
設置期間：令和7年6月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：公益財団法人湯浅報恩会 寿泉堂総合病院

糖尿病内分泌代謝内科・総合内科学講座
Department of Diabetes, Endocrinology, and Metabolism, General Internal Medicine
講座主任：島袋 充生 教授：濱口 杉大 准教授：田辺 隼人
研究テーマ：福島県の地域医療を担う糖尿病内分泌代謝内科医・総合内科医の育成と、糖尿病内分泌代謝内科における合併症・併存症および高齢者感染症、地域固有感染症に関する研究
設置期間：令和7年10月1日～令和12年9月30日
寄 附 者：公益財団法人仁泉会、伊達市

地域集学的がん治療学研究講座
Department of Regional Multidisciplinary Cancer Care & Research (R-CCR)
講座主任：伊関 憲 教授：濱田 和幸 准教授：渡部 晶之
研究テーマ：1. 会津地域におけるがんの集学的治療に関する臨床研究およびトランスレーショナル研究 2. 福島県内の地域医療機関とのがん診療と救急医療の連携推進
設置期間：令和7年10月1日～令和10年9月30日
寄 附 者：一般財団法人温知会 会津中央病院、一般財団法人太田総合病院

会津坂下腎栄養アカデミー
Aizubange Center for Nephrology and Clinical Nutrition
講座主任：風間 順一郎 教授：細島 康宏 准教授：蒲澤 秀門
研究テーマ：地域住民における腎臓病を含む生活習慣病の発症および進展阻止に向けた食や栄養に関する研究
設置期間：令和8年4月1日～令和11年3月31日
寄 附 者：福島県厚生農業協同組合連合会

地域心不全連携医学講座
Department of Community Heart Failure Medicine
講座主任：竹石 恭知 准教授：三阪 智史
研究テーマ：地域で診る包括的心不全診療の充実と拡充
設置期間：令和8年4月1日～令和10年3月31日
寄 附 者：社会医療法人福島厚生会

各種データ

福島県立医科大学附属病院 入院・外来患者数、手術件数

■入院・外来患者数

※令和7年4月～令和8年3月累計（入院中他科受診を含む。会津医療センターはのぞく。速報値）

診療科	入院		外来	
	延べ患者数	1日平均	延べ患者数	1日平均
循環器内科	11,321	31	18,546	77
血液内科	10,766	29	7,154	30
消化器内科	14,012	38	25,949	107
リウマチ膠原病内科	3,120	9	10,020	41
腎臓・高血圧内科	2,344	6	8,853	37
糖尿病内分泌代謝内科	2,675	7	11,490	47
脳神経内科	5,888	16	10,256	42
呼吸器内科	8,062	22	11,888	49
漢方内科	0	0	1,524	6
腫瘍内科	0	0	1,405	6
総合内科	624	2	860	4
甲状腺・内分泌内科	0	0	2,067	9
小児科	16,020	44	10,876	45
小児腫瘍内科	5,840	16	2,167	9
皮膚科	5,100	14	15,038	62
呼吸器外科	5,736	16	4,925	20
消化管外科	11,873	33	10,243	42
肝胆脾・移植外科	6,026	17	4,886	20
乳腺外科	4,213	12	12,889	53
小児外科	1,386	4	1,694	7
甲状腺・内分泌外科	842	2	3,712	15
心臓血管外科	5,804	16	3,404	14
脳神経外科	7,925	22	5,736	24
整形外科	19,687	54	21,787	90
形成外科	3,129	9	5,366	22
産科婦人科	181,82	50	33,990	140
眼科	9,474	26	32,171	133
泌尿器科	10,006	27	17,930	74
耳鼻咽喉科	6,655	18	10,813	45
心身医療科	6,784	19	19,820	82
放射線科	0	0	586	2
放射線治療科	0	0	10,760	44
核医学科	1,113	3	387	2
麻酔科	365	1	7,996	33
歯科	2,885	8	10,086	42
救急科	4,247	12	1,508	6
リハビリテーション科	0	0	5,663	23
放射線健康相談科	0	0	71	0
合 計	212,104	581	364,516	1,506

■手術件数（手術部）

※令和7年4月～令和8年3月累計

診療科名	件数
循環器内科	188
血液内科	6
消化器内科	124
腎臓・高血圧内科	0
呼吸器外科	227
消化管外科	454
肝胆脾・移植外科	254
乳腺外科	269
甲状腺・内分泌外科	141
小児外科	165
心臓血管外科	352
脳神経外科	313
整形外科	1,132
形成外科	285
産科婦人科	617
小児科	3
小児腫瘍内科	0
眼科	1,767
皮膚科	163
泌尿器科・副腎内分泌外科	444
耳鼻咽喉科・頭頸部外科	363
心身医療科	97
麻酔・疼痛緩和科	9
歯科口腔外科	143
救急科	36
その他	7
合 計	7,559



職員数

(令和8年4月1日現在 学長1人、教員814人、職員1,855人 合計2,670人)

	学長	副学長	教員						事務・技術系職員					合計
			教授	准教授	講師	助教	助手	小計	事務職員	技術職員	技能職員	労務職員	小計	
学長	1													1
副学長		10												10
医学部			60	37	58	108	159	422	4	51	0	1	56	478
生命科学・社会医学系			12	10	12	22	4	60	0	19			19	79
臨床医学系			45	23	43	78	153	342	3	25			28	370
総合科学系								0					0	0
附属生体情報伝達研究所			2	3	2	5		12		3			3	15
附属放射性同位元素研究施設				1				1		2			2	3
附属実験動物研究施設			1			1		2		1		1	2	4
附属死因究明センター								0		1			1	1
総合内科・総合診療医センター					1	1	2	4					0	4
附属教育評価室						1		1	1				1	2
看護学部			11	6	16	8	2	43					0	43
保健科学部			18	11	11	18	1	59					0	59
別科				1	1	3	1	6					0	6
寄附講座			28	16	9	6	34	93					0	93
大学院			2					2					0	2
総合科学教育研究センター			11	9	4			24					0	24
医療人育成・支援センター						5	2	7					0	7
看護師特定行為研修センター			1					1		2			2	3
医療研究推進センター			1	1				2					0	2
広報コミュニケーション室			1					1					0	1
地域医療支援センター			1					1	1				1	2
ふくしま子ども・女性医療支援センター			3	2				5					0	5
事務局			0	1	0	0	1	2	255	51	11	0	317	319
局長・次長								0	5				5	5
総務課								0	31	11			42	42
双葉中核の病院整備準備室								0	4				4	4
学術情報室								0	2	6			8	8
企画財務課								0	20				20	20
医療研究推進課								0	23				23	23
教育研修支援課								0	31				31	31
保健科学部事務室								0	16	2			18	18
大学健康管理センター				1			1	2		1			1	3
病院管理課								0	16				16	16
医事課 (医療連携・相談室、経営企画室)								0	35	13	11		59	59
復興推進課 (F-REI 連携室)								0	12				12	12
健康調査課 (甲状腺検査室)								0	60	18			78	78
附属病院			5	11	7	11	21	55	14	1,147	1	0	1,162	1,217
病院長			1					1					0	1
医療安全管理部				1			1	2	2	3			5	7
感染制御部								0		4			4	4
医療情報部								0					0	0
患者サポートセンター				1				1	1	14			15	16
災害医療部								0	3	2			5	5
臨床研究管理部								0	2				2	2
ふたば救急総合医療支援センター			1	2	1		2	6					0	6
診療部			2	3	2	1	7	15		5			5	20
検査部							1	1		46			46	47
放射線部								0		49			49	49
手術部						1		1					0	1
集中治療部				1		4		5					0	5
総合周産期母子医療センター				1	1	1	7	10					0	10
病理部								0		10			10	10
輸血・移植免疫部								0		14			14	14
内視鏡診療部				1		3	1	5		3			3	8
リハビリテーションセンター								0		29			29	29
救命救急センター								0	1				1	1
臨床腫瘍センター					1			1		1			1	2
臨床工学センター								0		19			19	19
脳疾患センター					1			1					0	1
生殖医療センター						1	2	3	2	2			4	7
材料部								0		1	1		2	2
臨床研究教育推進部					1			1					0	1
性差医療センター				1				1					0	1
臨床研究センター								0	1	6			7	7
看護部								0	1	892			893	893
薬剤部								0	1	47			48	48
がんゲノム医療診療部			1					1					0	1
ふくしま国際医療科学センター								0					0	0
放射線医学県民健康管理センター			4	4	1	1	3	13					0	13
健康増進センター				2	1		1	4	2	2			4	8
甲状腺内分泌センター													0	0
先端臨床研究センター			4	3	1	1	2	11					0	11
臨床研究イノベーションセンター						1	2	3					0	3
会津医療センター			20	3	16	15	6	60	18	293	2		313	373
合 計	1	10	170	107	125	177	235	814	294	1,546	14	1	1,855	2,670

附属学術情報センター(図書館・展示館)



附属学術情報センター



福島駅前キャンパス図書室

附属学術情報センターは、図書館、展示館そして、情報教育および情報ネットワークの機能を持っています。

図書館は光が丘キャンパスを本館、福島駅前キャンパスを分室とし、医学・看護・保健科学等医療分野の専門的資料を中心におおよそ24万4千冊の蔵書、7,600種の雑誌、13,000タイトルの電子ジャーナル、12,000タイトルの電子ブック(令和8年3月末現在)を所蔵し、最新の情報を提供しております。

令和6年に改装された展示室では、これまでに収集・蓄積された標本類、考古資料、本学の歴史と概要、東日本大震災時の対応、教育・研究・診療に関する最新情報を展示しており、企画展も開催しております。

また、全学に整備された学内LANを通じ、電子メール、Web閲覧、グループウェアの利用などの情報サービスを提供しています。

附属学術情報センター(光が丘キャンパス)

階数	
2	図書館 閲覧室・情報検索室・情報管理室・個室 展示館 展示室
1	図書館 書庫・閲覧室・自由閲覧室・個室

福島駅前キャンパス図書室

階数	
2	ラーニングcommons・グループ学習室・閲覧室

5号館(福利厚生棟)



5号館(福利厚生棟)



食堂



学生ホール

5号館には、学生ホール、談話室、食堂などがあり、学生生活や学生活動をサポートしています。

階数	
2	学生ホール・第7、第8講義室
1	食堂・教育研修支援課

講 堂



講堂



ホール

座席数500のホールを中心に控室や小会議室などがあります。照明や音響設備も充実しており、学内行事等に利用されています。

7号館(光が丘会館)

医学部卒業生より寄附された同窓会館です。大会議室、小会議室などを完備しています。学術総会や同窓会など、福島県立医科大学のさまざまなイベントの会場として幅広く利用されています。

階数	
2	大会議室・小会議室
1	同窓会事務室・売店 ブックセンター



売店

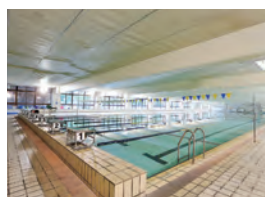


ブックセンター



7号館(光が丘会館)

体育館・運動施設



プール



体育館



武道館



テニスコート



野球場



体育館外観

体育館には、体育室、プール、柔道・剣道場および各個室を備えています。屋内の50mプールは温水可能な施設となっています。また、陸上競技場は400mトラックのほか、各種競技のための設備が整備されています。このほか、野球場や弓道場、アーチェリー場、テニスコートなど各種設備が充実しています。

階数	
3	武道館 柔道部・剣道部・剣道部・空手部・写真部・基礎医学研究会・ゴルフ部 山岳部・アーチェリー部・ラグビー部・軽音楽部・混声合唱団管弦楽団 スピードスケート部・ギター部・ウインドアンサンブル
2	体育館 バスケットボール部・スキー部・囲碁部・赤十字奉仕団 バレーボール部・バドミントン部・ワンダーフォーゲル部・卓球部 水泳部・ソフトテニス部・硬式庭球部・漕艇部・準硬式野球部 サッカー部・陸上競技部・ハンドボール部
1	プール

12号館(新実習棟)

平成26年度より学生が広いスペースで日々実習に励んでいます。

階数	
3	化学・微生物・免疫学実習室
2	物理学・多目的実習室
1	組織学・病理学実習室



12号館外観

1号館(管理棟)

福島県立医科大学の運営をはじめ、経営企画などを行っています。

	階数	
理事長室 副理事長室 ふくしま国際医療科学センター長室	3	企画・管理運営担当理事室 経営・内部統制担当理事室 総務課 企画財務課 地域医療支援センター
復興推進課 ふたば救急総合医療支援センター	2	医療情報部 総務課(大学管理)
総務課 (管財、施設)	1	医学部長室 病児病後児保育所「すくすく」 第一カンファランス



1号館(管理棟)

キャンパスマップ

福島県立医科大学は、福島市の中心部から車で約20分の丘陵地にある「光が丘キャンパス」と、JR福島駅東口から徒歩で約5分の「福島駅前キャンパス」の2つのキャンパスがあります。

光が丘キャンパス

●学部・研究棟

- ①2号館(臨床医学系研究棟) ②3号館(生命科学・社会医学系研究棟)
- ③4号館(総合科学系研究棟) ④8号館(看護学部棟)
- ⑤8号館WEST ⑥10号館(医学部附属研究施設)
- ⑦12号館(新実習棟)

●共有施設

- ⑧5号館(福利厚生棟・講義棟・実習棟)
- ⑨6号館(講義棟) ⑩11号館(臨床講義棟)
- ⑪講堂 ⑫附属学術情報センター
- ⑬体育館 ⑭野球場
- ⑮テニスコート ⑯弓道場
- ⑰アーチェリー場 ⑱陸上競技場

●附属病院

- ⑲附属病院 ⑳心身医療科病棟
- ㉑北外来棟 ㉒高エネルギー放射線治療棟
- ㉓MRI棟 ㉔放射線災害医療センター
- ㉕9号館(医療研修センター) ㉖手術室棟

●ふくしま国際医療科学センター

- ㉗災害医学・医療産業棟 ㉘環境動態解析センター棟
- ㉙先端臨床研究センター棟
- ㉚ふくしま いのちと未来のメディカルセンター棟

●その他の施設

- ㉛1号館(管理棟) ㉜学部警備室
- ㉝7号館(光が丘会館(同窓会館)) ㉞鎮魂の碑
- ㉟実験動物慰霊の碑 ㊱焼却炉
- ㊲旧汚水処理施設 ㊳すぎのこ園(託児所)
- ㊴よしみ荘(看護師宿舎) ㊵ヘリポート
- ㊶救命設備棟 ㊷I&H光が丘薬局

●駐車場・自転車置場

- ㊸外来駐車場 ㊹駐車場 ㊺外来駐車場
- ㊻駐車場 ㊼駐車場 ㊽駐車場
- ㊾自転車置場 ㊿自転車置場 ㋀駐車場



●ヒポクラテスの樹

医聖ヒポクラテスが木陰で医学を教えたという伝説から「ヒポクラテスの樹」とも呼ばれるプラタナス(すずかけ)の木です。医療系大学のシンボルツリーとして知られていますが、福島県立医科大学のプラタナスは伝説発祥の地・ギリシアのコス島生まれの由緒ある木です。



8号館



5号館



ふくしま いのちと未来のメディカルセンター棟



ヘリポート



福島駅前キャンパス



福島県立医科大学 保健科学部



エントランスホール



日常生活活動実習室



分析化学検査実習室

明治 4. 8.10	白河仮病院開院。	平成 11.10.30	医学部附属看護学校 50 周年記念式典挙行。
// 4. 9.	病院内に医術講義所開設。	// 13. 3.31	医学部附属看護学校廃止。
// 5. 2.27	須賀川に移転し、福島県病院と改称。医術講義所は須賀川医学所に。	// 13.12.20	大学院看護学研究科設置認可。
// 5.10.	県立須賀川病院と改称。	// 14. 4. 1	大学院看護学研究科開設 (入学定員 15 名、収容定員 30 名、修業年限 2 年)。
// 6. 4.21	福島県公立須賀川病院と改称。	// 16. 4. 1	大学院医学研究科を再編整備 (5 研究課程を 4 専攻に再編。入学定員を 27 名から 37 名に増員)。
// 7. 2. 2	須賀川医学所へ、後に東京市長などを歴任した後藤新平 (1857-1929) が入学。	// 18. 4. 1	福島県が公立大学法人福島県立医科大学を設立。公立大学法人福島県立医科大学は福島県立医科大学を設置。
// 8. 1.	須賀川医学所は須賀川医学講習所と改称。		法人に役員会を設置。
// 12. 5.	福島県公立須賀川病院の支病院は福島県立福島病院、同須賀川病院、同若松病院、同平病院に独立。		医学部附属病院が大学附属病院となる。
// 12.10.20	須賀川講習所は須賀川医学校と改称。	// 20. 1.28	附属病院 4 階東病棟に整備した救命救急センター運用開始。
// 15. 1.22	須賀川医学校を福島に移転。福島医学校開校。		ドクターヘリ運航開始。
// 23. 3.31	福島県立福島病院が廃止され、三郡 (信夫・伊達・安達) 共立福島病院となる。	// 20. 4. 1	一部事務職を除き職員全員法人職員となり、完全法人化する。
大正 14. 4. 1	三郡共立福島病院は公立福島病院と改称。		法人組織にトランスレーショナルリサーチ (T R) センターを新設。
昭和 19. 1.10	福島県立女子医学専門学校設立認可。		医学部学生入学定数増 (80 名を 95 名に増員)。
// 19. 4. 1	公立福島病院は福島県立女子医学専門学校附属医院となる。		大学院医学研究科医科学専攻 (修士課程) 開設 (入学定員 10 名、修業年限 2 年)。
// 22. 6.18	医科大学 (旧制) 設立認可。	// 20. 6.22	光が丘キャンパス移転 20 周年、看護学部設置 10 周年、完全法人化記念事業「アニバーサリー 2008」記念式典挙行。
	医科大学予科開設認可。		本学イメージマーク制定。
	1 学年定員 40 名 (修業年限 3 年)。	// 20.11. 2	「福島県立医科大学ビジョン 2008」制定。
// 25. 3.30	医科大学医学部 (旧制) 開設認可。		学生歌「ラララ光の丘」制定。
	1 学年定員 40 名 (修業年限 4 年)。		医学部学生定数増 (95 名を 100 名に増員)。
// 25. 6.18	医科大学開学記念行事挙行。	// 21. 4. 1	医学部学生定数増 (100 名を 105 名に増員)。
// 26. 3.31	女子医学専門学校廃止。	// 22. 4. 1	法人組織に産学官共同研究センターを新設。
	女子医学専門学校附属医院廃止。	// 23. 2. 1	法人組織に研究推進戦略室を新設。
	医科大学予科廃止。	// 23. 4. 1	医学部学生定数増 (105 名を 110 名に増員)。
// 26. 4. 1	旧女子医学専門学校附属医院は、福島県立医科大学附属病院となる。	// 23. 9. 1	法人組織に放射線医学県民健康管理実施本部を新設。
// 27. 2.20	医科大学 (新制) 設置認可。		放射線医学県民健康センターを新設。
// 27. 4. 1	医科大学 (新制) 開設認可。	// 24. 4. 1	法人組織に復興事業推進本部、地域医療支援本部、広報戦略室を新設。
	1 学年定員 40 名 (修業年限 4 年)。		法人組織のトランスレーショナルリサーチ (T R) センター及び産学官共同研究センターを統合して産学官連携推進本部を設置。
	県立高等厚生学院が医科大学附属高等厚生学院となる。	// 24.11.20	大学組織に「ふくしま国際医療科学センター」を新設。下部組織に「放射線医学県民健康管理センター」を置き、「先端臨床研究センター」「医療-産業トランスレーショナルリサーチセンター」を新設。
// 29. 3.10	附属高等厚生学院を医科大学附属看護学校と改称。	// 25. 4. 1	医学部学生定員増 (125 名を 130 名に増員)。
// 30. 1.20	医科大学進学課程設置認可。	// 25. 5.12	会津医療センター準備室を廃止し「会津医療センター」を設置 (23 科)。
// 30. 4. 1	医科大学進学課程開設。		「高度被ばく医療支援センター」「原子力災害医療・総合支援センター」に指定。
	1 学年定員 40 名 (修業年限 2 年)。	// 27. 8.26	「ふくしまいのちと未来のメディカルセンター棟」完成。
// 43. 4. 1	新学則を制定。進学課程は教養課程と名称変更。	// 28.10.28	ふくしま国際医療科学センター開設記念式典挙行。
// 44. 1.22	大学院学生定員変更協議書受理される。(25 名を 27 名に変更。実施時期・昭和 44 年 4 月 1 日)	// 28.12.11	
// 46. 1.12	学生定員増承認 (60 名を 80 名に増員)。		
// 48. 6.15	RI 棟完成。		
// 58. 9.16	大学歌「光の鳥」制定。		
// 63. 4. 1	医科大学本部 (福島市杉妻町) 福島市光が丘に移転。		
平成 9. 9. 6	開学 50 周年記念式典挙行。		
// 9.12.19	看護学部設置認可。		
// 10. 4. 1	看護学部開設。1 学年定員 80 名、3 年次編入学定員 10 名 (修業年限 4 年)。		

※詳細な沿革は、本学ホームページ「福島県立医科大学要覧」に掲載しております。(https://www.fmu.ac.jp/about/pr/youran/)

平成 29. 4. 1	大学に「看護師特定行為研修センター」を新設。 法人組織の「医療研究推進本部」、「産学官連携推進本部」及び「知的財産管理活用オフィス」を統合して「医療研究推進戦略本部」を設置。	令和 7. 4. 1	大学院保健科学研究科保健科学専攻(修士課程)開設(入学定員16名、修業年限2年)。 会津医療センターを4部門17講座に再編。
// 30. 4. 1	法人組織に「新医療系学部設置推進本部」を新設。	// 8. 4. 1	医学部生命科学・社会医学系講座を再編。 法人組織に「双葉中核的病院整備推進本部」を新設。
// 30.10.29	多目的医療用ヘリの運用開始。		事務局に「双葉中核的病院整備準備室」を新設。
// 31. 4. 1	事務局教育研修支援課の課内室として「助産師養成課程設置準備室」を新設。		「ふくしま国際医療科学センター」の下部組織「医療・産業トランスレーショナルリサーチセンター」を廃止。
令和 元. 6. 1	法人組織に「国際連携戦略本部」を新設。		
// 元. 7. 1	大学組織「国際交流室」を廃し、「国際交流センター」を新設。		
// 2. 4. 1	看護学部を7部門に再編。		
// 3. 4. 1	大学に「保健科学部」を開設。 (理学療法学科、作業療法学科、診療放射線科学科、臨床検査学科) 事務局に「保健科学部事務局」を新設。		
// 4. 4. 1	大学院看護学研究科看護学専攻(博士後期課程)開設(入学定員2名、修業年限3年)。		
// 5. 4. 1	大学に「別科」を開設(助産学専攻)。 法人組織に「F-REI連携推進本部」を新設。 事務局復興推進課の課内室として「F-REI連携室」を新設。		
// 7. 3.31	「福島県立医科大学ガバナンス・コード」制定。		



福島県立医科大学紹介動画

本動画は、本学HPで視聴できます。

動画視聴はこちらから

<https://www.youtube.com/channel/UCDmYREUHdkZDI9zNPSttvBQ>



ACCESS MAP アクセスマップ



会津医療センター



T969-3492
福島県会津若松市河東町谷沢字前田21番地2
TEL 0242-75-2100(代表)
FAX 0242-75-2150(総務課)
<https://www.fmu.ac.jp/hospitals/aizu/>

光が丘キャンパス (医学部・看護学部・別科) 〒960-1295 福島県福島市光が丘1番地 TEL 024-547-1111(代表)
福島駅前キャンパス (保健科学部) 〒960-8516 福島県福島市栄町10番6号 TEL 024-581-5503

公立大学法人 福島県立医科大学

〒960-1295 福島県福島市光が丘1番地 TEL 024-547-1111(代表)
<https://www.fmu.ac.jp>

FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

1 hikariga-oka, Fukushima City 960-1295, JAPAN

【企画・発行】公立大学法人福島県立医科大学 企画財務課
TEL 024-547-1013 FAX 024-547-1991